

三井物産會社上海支店「内狀」

三井物産会社が合名会社に組織替えされ飛躍的發展を遂げるのは明治二十六年以降のことであるが、創立（明治九年）より明治二十六年に至る間はその基礎を作った時期ともいえよう。この時期の三井物産会社の活動を知る資料は他の時期に比べればやはりより断片的たゞざるを得ず、とくにそれを各支店のものに限定した場合には例が少ない。ここに紹介する三井物産会社上海支店の「内狀」はその中の一つである。これは上海支店開設当初より明治二十五年までの間同支店の支配人として活躍し、のちに三井物産会社理事等を勤めた上田安三郎の死後、未亡人寿子（昭和一九年歿）の手に残り、現在は四男寿四郎氏（七五才、著述者が保管する所の資料中の一つである。これらの資料は今までに、昭和一〇年と一六年に社史編纂事業が行われた三井物産株式会社に貸出、提供されてその社史稿本作製に使われたが、資料そのものは公開され

たことがない。

伝存されている資料はこの「内狀」等の書狀綴、日記、備忘録、調査報告書類、辞令および履歴書類などがあるが、ここでは上田安三郎が実地に活動した上海支店支配人時代（明治二十五年まで）を対象として「内狀」と、石炭関係書類のうちから、三池炭販売の書類として「明治十六年三池石炭売約定見込書」および「明治十八年中三池石炭売捌高明細書」を紹介することとした。今回はさらに、これと同時に、「内狀」の当事者たる上田安三郎についてもその年譜（上田寿四郎稿）を併載した。上田安三郎は上海、香港支店支配人を勤めた後、三井物産合名会社理事に就任し明治三〇年代には益田孝に次ぐ地位を占めるに至りながら、比較的若年（四七才）で死亡したためかこれまで知られる所が少ない。また初期の三井物産会社における石炭販売の重要性、それ

田中 康雄

に果した上田安三郎の役割を考え、上田寿四郎氏が所蔵されている上田安三郎関係の資料を中心にまとめた年譜を掲載して「内状」と相互に参考となるよう考慮した。

なお「内状」の翻刻に当っては上田寿四郎氏の筆写にかかる原稿ノートを参考として田中康雄が原稿を作製した。このうち英文書状二通についてはエヴァリオン・コール夫人に読解を依頼した。

「内状」について

書状は厚紙、表紙のレターファイルに差出状、受取状の区別なく入交って、大略日付順に奥から綴り込まれている。ファイルの背表紙には「内状自明治十八年五月至全廿二年八月」と墨書された題箋が貼付されている。これはここに綴られている書状の大部分を占める、上海支店と東京本社との間の往復状に付せられたタイトル「内帖」（或は「内状」など）に基くものと思われる。（各書状の方につけられたタイトルは「内帖」となっているが、状、帖ともにてがみの意である。）内容の構成は上海支店と東京本社との間の往復状が最も多く、これに上海、香港などの支店員と上田との往復状を加えれば七八通に上る。その他には私的な書状と三池石炭関係の調書が含まれる。受取状のうち東京本社からのものは三井物産会社の野紙を用いており、差出状（控）は無地紙にコピーを取ったものが殆どである。全体の中で墨で書かれたものは例外的であり大部分はコピーを取るためのインクを使用している。このためコピー（主に差出状控）の方は勿論、本書でもにじみあるいは筆あ

との抜け落ちによって判読し難い箇所がある。

筆跡は二三を除いて他の殆どは差出者自身のものとみられる。受取状の中で差出書が「東京本社」あるいは「本社元方」などのように個人の署名がないものがみられるが、これらも他の個人署名のある書状と比べれば容易に同定できるものである。

書状の内容は私的書状を除けば実際の商売に関するものであり、人事（給料および人員配置）関係や三池石炭の販売を中心としてその他多岐に亘る営業上の指令、上申、連絡、報告等である。（一覧表参照）

以上のことからこの書状綴は会社の営業上の連絡書状を綴ったものであるが、その内容的性格はタイトルの通りやや内密的性格をもったものであるといえよう。会社の連絡用としてはこの他に番号を付けて往復されていた書状があったことは、この綴の中にそれが混入しているものがあることから推測される。内状とはそれと相對するものと考えられる。そのような性格であったため、私状も一緒に挟まれ上田個人の手元に残されたものであろう。なお本支店間の連絡は更に電信が盛に利用されておりこれら書状から垣間見ることができよう。

右の如くであるからこの「内状」は上海支店―東京本社間の連絡状すべてを取めたものではなく、一部であることに留意しておく必要がある。

その点で本店側の資料によって補うことが必要となるが、もとより「内状」綴の本店側に当る分は存在せず、又他の連絡状綴の

類もそれ自体としては残っていない。僅かに「内状」中にある増給、昇等の上申書類だけが、本店へ差出された分として「元方評議」(三井文庫所蔵資料 物産九二〜九六)中に散見される程度である。

その他「内状」記事と関連する資料としては元方役場(三井物産会社)の「日記」(三井文庫所蔵資料 物産一〜三二)、上海支店の事務規程等を含んだ「諸規則」(同資料 物産五四〜五六)などがあり、更に「内状」に見える諸活動のいわば結果を知るものとして、各年の総勘定書、損益勘定書(同資料 物産五二八〜五五五)(上海支店の場合、明治一三年以前および一九〜二三年間を欠く)と、概況事務報告書(明治一七年 同資料 別二二七三、明治一八年同資料 別二六三〇、明治二二年 同資料 物産二八九一)があり、明治二三年の取扱高を含む「物産会社営業実況報告并意見書」(同資料 物産二八九一)、『三井事業史』資料篇第三巻所収)がある。各々参考として互に補い合える部分があるものと思う。

三井物産会社上海支店について

三井物産会社の支店は同社の創立から日ならずして数店を数えることになるが、上海支店は創立の翌年(明治一〇年)に早くも開設されている。

三井物産会社が創立と殆ど同時に三池炭の一手販売権を得たことは周知のことであるがこの三池炭を販売するための足がかりと

して上海支店は開設された。尤も開設当初は第一国立銀行との共同出資であった。

これは明治一〇年一〜二月に、政府の依頼による清国に対する借款問題で渋沢栄一と共に益田孝が上海を訪れたこと(1)をきっかけとし、旧銅貨、銀貨の交換業務を引受けるに至り、そのため(2)の店を両者二、五〇〇円宛の共同出資で設けたものである。両者は明治一〇年一〇月三十一日にその合意決定を見ており(3)渋沢栄一、益田孝、木村正幹、上田安三郎出席、上田安三郎を店預人とし、副役を第一国立銀行側よりの笹瀬元明とした。

しかし実際の業務は第一国立銀行より三井物産会社が代理委任を受けるといふ形をとった。(更に第一国立銀行の為替受払、荷為替業務の委任も受けた)

もとより三井物産会社、第一国立銀行ともにこの機を得て中国に対する進出を計ろうとしていたのであるが、第一国立銀行はシヤンドの勧告によって本格的進出を中止し、明治一三年末に至って三井物産会社との組合を解約し出資金を引揚げた。一方三井物産会社は、益田孝が明治一〇年一〜二月の上海行の際にすでにスイス人ブリネ(在上海)に石炭販売の代理店を依頼し、更に将来オフィスを借りる約束までしたと言われ、明治一〇年六月から上田安三郎を派遣して準備を進め、第一国立銀行との共同出店が成立してからも上田安三郎が店預り人となって支店を経営し、ついには目的であった三池炭販売を軌道に乗せることに成功したのである。

三池炭の販売が三井物産会社の経営の中でどれほどの役割を担っていたかを正確に測定することは簡単でない。その販売利益の三井物産会社全体の利益に対する割合が、一つの端的な表現であろうがそればかりでは一面にすぎないであろう。しかしながら三池炭販売に対する評価は益田孝自身が語った、三池炭販売利益はたいしたものではないが、その取引を元として他の事業が発展した、という指摘に尽き、この他に出来る評価は余り見当らない。その事業としては石炭販売と密接な鉱山業が、また石炭輸送（船舶取扱は上海支店が担当していた）から船舶業があり、間接的なもの、つまり石炭取扱によって支えられていた上海支店から起ったものに棉花取扱、紡績業などがある、これによって見れば、その三池炭販売の主力であった上海支店（のち香港等も）の役割は大なるものがあつたと言うべきであろう。

因みに香港における支店設置も上海支店設置と同じ事情によつてゐる（明治一一年八月）。しかし上海支店と異なる点は旧銅貨銀貨交換業務のみで、石炭販売等は業務とされていなかったことである。香港支店はその後間もなく明治一四年に至つて廢止され再開されるのは石炭販売を目的として明治一九年一月のことである。これは当時の三池炭取扱の意義を物語ることであろう。

上海支店自身の利益金は、明治一四一八年間をとつてみると石炭売捌手数料が益金全体の四一五割を占め、その他船舶取扱手数料が一・五一割であつてこの兩者で六一七割の益金を出してゐる。これを以てみれば上海支店においても三池炭販売が主力で

あつたと言ふことができよう。

しかしながら明治二五年以降、上海支店の益金内訳が判明する所でみると石炭販売手数料および船舶取扱手数料の比率は相対的に低下し、棉花公司取扱、昆布、棉花取扱手数料が独自の地位を占めるようになる。明治二三年中の商品別取扱高からもこれと同様のことが言え、石炭一本やりの状態が変化して来ている。もとより石炭以外の商品についても開店当初から売捌に努力していたことは「上田安三郎年譜」によつて知られる所であるが、その中のいくつかが一応の成果をあげるようになったといふことである。従つて強力な踏台としての石炭取扱を一方に確保しながら、それに匹敵する商品を獲得しつゝある過程としてこの「内状」に含まれる時期を把握することもできよう。

- (1) 『波沢栄一伝記資料』第四卷 三一九～三五一ページ。
- (2) 『波沢栄一伝記資料』第四卷 三六六～三七八ページ。
- (3) 『日記』三井文庫所蔵資料 物産四。
- (4) 『波沢栄一伝記資料』第四卷 三六三～三六六ページ。
- (5) 『日記』三井文庫所蔵資料 物産八。
- (6) 『自叙益田孝翁伝』一九七ページ。
- (7) 『明治十年十二月三十日三井物産会社より支那并外国江 outlet 店之義附照會書』三井文庫所蔵資料 追一六七九一三。また「上田安三郎年譜」参照。
- (8) 『自叙益田孝翁伝』一九七ページ。
- (9) 『総損益勘定（書）』明治一四一八年 三井文庫所蔵資料

料 物産五三三〇五三七。

(10) 「上海支店損益勘定書」明治二五年 三井文庫所蔵資料

物産五四四、五四六。

(11) 「物産会社營業実況報告并意見書」三井文庫所蔵資料 物

産二八九―二。

(12) この時期以降の三井物産会社については本号松元論文を参照されたい。

(凡例)

一、綴られてある各文書には便宜上番号を付けた。番号は綴り込んだ順(概ね日付順)に奥から付け、配列はその番号順に行なつた。従つて各文書毎に原形とは逆に配列されてある。

一、原文書の文字はなるべく原形通りを目標としたが、多くは新字体を使用せざるを得なかつた。またいわゆる変体仮名は平仮名に、略字、異字の一部は漢字に直した。

一、書状の用紙の形状、筆跡、筆記材料は文書番号の下に()をつけて記した。用紙は無地紙の場合ほとくに注記しない。筆跡は署名のないもののみ註記した(署名があるものは殆どその署名者の筆跡と考えてよい)。筆記材料は墨の場合のみ記した。その他はコピー用インクである。

一、文書中に出て来る人名は主なものをまとめて末尾に注記し、

同時に等級、給料表に出て来る人名はその文書番号を附した。なお人名に限らずその他の諸事項についても「上田安三郎年譜」を適宜参照されたい。

一、本資料の掲載については上田寿四郎氏の許可を得た。また同氏より資料に関して多くの貴重なご教示を賜つたが、掲載の方法、資料の選択等については編集者の責任において行つた。

三井物産会社上海支店「内状」一覽表

日付	差出書	宛書	内容摘要
明治19 16・10・30	支配人上田安三郎	東京本社元方	明治十九年中三池石炭運遭調査 明治十九年三池石炭採掘販売予算 上海支店詰社員昇等并増給願 上田筆上海支店員昇等増給表
18・5・16	東京本社元方(益田孝)	上田安三郎	三池炭販売、南京米輸入、義利洋行勘定取立、外人雇入
〃 5・25	東京本社元方(益田孝)	上田安三郎	人事(小室、福原)、三池炭販売、運輸会社、何栄記より取立
〃 7・22	元方(木村正幹)	上田安三郎	上海支店員給料
(〃) 9・19	上田安三郎	松岡讓	長谷部卯一
(〃) 9・19	上田安三郎	益田	人事(益田英作、田中)、共同三菱合併の感想
〃 9・14	東京本社元方(益田孝)	上田安三郎	怡和洋行との取引、三池炭政府出炭方針、人事、汽船運賃、白紙販売
〃 9・29	上海上田安三郎	東京益田孝	人事(田中寿雄)
10	上海支店上田安三郎	東京本社松本常盤	利益金送金、私用金取計の依頼
11	東京本社松本常盤	上海上田安三郎	起業公債買入(私用金)、益田腦充血
12	上海上田安三郎	箱館松岡讓	長谷部卯一
13	(香港)支配人上田安三郎	益田社長、木村副社長	支店員昇等増給上申
14	(香港)上田安三郎	東京本社元方	履歷書送付
15	東京本社益田孝	上田安三郎	新嘉坡の情況問合、人事(福原、小室他)、日本石炭の景況、委託丁銅の引合
16			

三井物産会社上海支店「内状」(田中)

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	
19・9・30	〃 10・8	〃 9・20	(〃) 8・26	19・8・11		〃 7・17	〃 5・18	〃 5・18	〃 4・29	(〃) 5・13	〃 5・5	〃 5・4	〃 3・30	〃 3・18	〃 2・24	〃 2・11	明治19・2・3	
上海上田安三郎	上田安三郎	東京益田孝	東京松本常磐	木村正幹		元方(木村正幹)	上海上田安三郎	上海上田安三郎	寺島昇	東京本社松本常磐	上田安三郎	上海上田安三郎	本社元方(益田孝)	(下ノ関)益田孝	東京本社元方	上海上田安三郎	東京益田孝	
箱館松岡讓	益田社長	上田安三郎	上海上田安三郎	上田安三郎		上田安三郎	益田孝	寺島昇	上田安三郎	上海支店上田安三郎	松本常盤	長崎古賀豊三郎	上田安三郎	上海上田安三郎	上田安三郎	東京益田孝	上田安三郎	
長谷部卯一	人事(益田英作)	敷木販売、香港での石炭販売上の注意、人事、幌内炭山、八重山炭、北海道昆布	本店動向、流行病、採用人事	平岡寅助、益田北海道行	上田筆18年分給料分賦金表	18年分慰勞金表	上田本出国張の予定	印刷局製造薬紙売方	印刷局製造品取扱	私金取計報告、岩下ロンドンへ	私金の取計依頼	親類へ送金	ロンドン人事	見込	西表島炭礦視察報告、ロンドン人事、筑前石炭の	人事、船舶	店員の批評、上海香港事務取扱手続共通化	对新嘉坡方針、本年の出炭方針、石炭輸送について大蔵省の注文

日付	差出書	宛書	内容摘要
35	明治〃 10・18 元方(益田孝)	上田安三郎	人事(益田英作)
36	18・9・6 Tang Kung Tsing		石炭
37	19・10・2 C.W. Kinden	Wooyeda	敷木
38	孝	安三郎	益田英作の件の詫、石炭利益下付金
39	18・8 品川九十九	呉碩他	長崎商業学校創立基金募集
40	(19)12・20 松本常磐	上田安三郎	積立金
41	19・12・31 支配人上田安三郎	東京本社元方	上海香港支店詰社員等給表
42	20・2・3 東京本社元方(益田孝)	上田安三郎	上田の元締役慰勞金に付説明
43	(〃)4・15 東京本社松本常磐	上海支店上田安三郎	貸金返済、付借用証
44	〃5・27 哲夫	上海上田盤台	近況
45	(〃)9・5 東京本社松本常磐	上海支店上田安三郎	北海道より帰京報告
46	(〃)9・10 呉来安	上田安三郎	子息処遇のお礼
47	〃12・19 東京益田孝	上田安三郎	店員増給、材木販売、コットンジン
48	〃12・29 上海上田安三郎	(東京)宮本新右衛門	類焼見舞、天保銭売方
49	〃12・29 上海上田安三郎	(東京)田中孝輔	神戸開店催促
50	〃12・29 上海上田安三郎	(東京)松本常磐	上海香港純益金予告、往復社員
51	20・12・31 上田安三郎	(長崎)窪田豊太郎	碑文彫刻依頼

三井物産会社上海支店「内状」(田中)

69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52
孝	上海上田安三郎	(〃) 7・7	〃 7・12	〃 7・2	〃 6・22	〃 5・20	〃 6・14	〃 5・24	11・4・2	21・3・16	(〃) 12・29	〃 12・29	〃 12・	〃 12・31	〃 12・30	〃 12・30	明治 〃 12・31
孝	上海上田安三郎	東京本社松本常磐	上海上田安三郎	益田孝	天津佐々木祐司	渋沢栄一	上海田中寿雄	東京本社元方(益田孝)	孝	東京本社元方(益田孝)	上海上田安三郎	上海上田安三郎	支配人上田安三郎	上海上田安三郎	上海上田安三郎	上海上田安三郎	上海上田安三郎
安三郎	東京益田孝	上海支店上田安三郎	東京益田孝	上田安三郎	上海上田安三郎	上田安三郎	(香港)上田安三郎	上田安三郎	上田安三郎	上田安三郎	東京益田孝	東京益田孝	(大阪)谷口黙次	(東京)松延弦	(東京)古谷竜三	西京岡村五兵衛	西京岡村五兵衛
井銀行保証	三井銀行の保証要請、三池松下	資金繰り	病氣見舞、東京炭、敷木、銅、時計、船舶運航	コットンジン、八重山炭、帽子、時計	病氣見舞、東京炭、敷木、銅、時計、船舶運航	敷木	繰綿事業不参加	船舶運航、銅、敷木	敷木見合せ	三池松下、出京要請、銅、時計、東京灣石炭坑	銅、船舶運航、出京要請(三池炭に付)	摺附木見込、敷木販売、コットンジン、天保銭見込	上海香港支店詰社員等給表	(修文館)	近況報告	子弟(頼朝丸乗組)の不行跡	岡朴翁碑

日付	差出書	宛書	内容摘要
70	明治 7・30 益田孝	上田安三郎	三池松下(入札)、新嘉坡、三井銀行保証、銅
71	(//) 7・13 佐々木祐司	上田大人	敷木
72	// 8・9 上田安三郎	福原栄太郎	三池炭売上勘定作製、病氣掃朝の旅費
73	// 8・6 益田孝	上田安三郎	三池松下、八重山炭山中止、口の津への入港船問題
74	(//) 8・6 東京本社松本常盤	上海支店上田安三郎	社内改革、口の津、繰綿、香港新嘉坡の景況
75	// 8・17 上海上田安三郎	東京益田孝	三池松下、上海支店資本金附替、武田勝太郎
76	// 8・17 上海上田安三郎	東京松本常盤	三池運航、石炭臨時売上の処置、小室月給、三池
77	// 8・20 上海上田安三郎	香港福原栄太郎	松下
78	// 8・23 上海上田安三郎	東京益田孝	九州出張の予定、口の津、新嘉坡、繰綿
79	// 8・13 益田孝	上海上田安三郎	三池落札値段、汽船購入、大蔵省の銅、船舶
80	// 8・31 上海上田安三郎	東京益田孝	船舶運航、石炭好況、引次後の炭価得失、三池人
81	// 9・1 元方(益田孝)	上田安三郎	事の繰綿
82	// 9・13 上海上田安三郎	東京益田孝	口の津、銅、錫見合せ、頼朝丸船長
83	// 9・15 益田孝	上田安三郎	三池炭好況、銅代金、Z B 鉛輸入、日本人船員、九州予定
84	// 9・22 上海上田安三郎	東京益田孝	三池明年予定、醬油缶詰、銅、三地残炭価格、口
85	21・9・27 上海上田安三郎	益田社長	の津、購入汽船
86	// 10・5 上田安三郎	東京品川忠道	銅、曳船購入、ロンドンでの石炭売方注意
			三井銀行保証
			(佐藤順七郎、本郷地所等)

三井物産会社上海支店「内状」(田中)

附1 「明治十六年三池石炭売捌約定見込書」
附2 「明治十八年中三池石炭売捌高明細書」

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87
明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治
10.15	10.15	10.15	1.5	22.1.5	12.6	12.20	12.31	12	21.12.15	20.12	10	10.15	10.15
上田安三郎	上海上田安三郎	上海上田安三郎	香港支店福原栄太郎	香港支店福原栄太郎	香港福原栄太郎	上海上田安三郎	上海支店支配人上田安三郎	元方(木村正幹)	支配人上田安三郎	支配人上田安三郎			
品川久太郎	(神戸) 頼川君平												
(見舞御礼等)	(佐藤順七郎)												
	上田筆上海支店店員給料手扣	上海香港支店店員等給表	上海香港支店店員等給表	上海香港支店店員等給表	20年分慰勞金表	明治二十年分慰勞金支給金高	九州出張断念、汽船購入、繰綿所、未売炭、三井銀行保証	香港店員増給上申	太古洋行より引継石炭、石炭発熱報告	三池塊炭発熱并ニ欠量之報告	繰綿の評判、三池出炭予定、敷木、セメント、三池残炭精算、東洋銀行当座、人事	養生の勧め、綿実搾油、内地紡績業の景況、印度綿	三池囚徒、丁銅、石炭代送金、人事、材木

「内状 自明治十八年五月
至廿二年八月」

[1]

明治十九年三池石炭採掘販売予算

塊炭 一五一、五二五噸
粉炭 一一八、五〇〇噸
〔十九年中採掘スベキ
予算高〕

売却済ノ分

石炭種類

上海 噸

塊炭 三五、〇〇〇

〃 五、〇〇〇

香港

〃 一九、五〇〇

粉炭 四六、八〇〇

汕頭

塊炭 六、〇〇〇

粉炭 一〇、二〇〇

合計 一二二、五〇〇

売却手取概算 金額

上海 貳、六四〇 九二、四〇〇 弗

〃 三、四八〇 一七、四〇〇

香港 貳、九〇〇 五六、五五〇

〃 一、六四〇 七六、七五二

汕頭 貳、九〇〇 一七、四〇〇

粉炭 一、六四〇 一六、七二八

塊炭 一、六四〇 二七、二二〇

合計 二七、二二〇

売却未済ノ分(外国売リ)

噸數

塊炭 八六、〇二五

粉炭 二〇、〇〇〇

同断 (内地売リ)

粉炭 四一、五〇〇

但シ塊炭約定未済ノ分ハ此後香港上海新嘉坡長崎等ニテ外国

人へ売却スヘキ分、又粉炭六万五千五百噸ノ内地塩田へ四万

千五百噸ヲ売リ、残り貳万噸ヲ香港へ売却スルト見做シ計算

スルキハ其合計左ノ通り

塊炭 一五一、五二五

粉炭 七七、〇〇〇

粉炭 二二八、五二五

粉炭 四一、五〇〇

代銀貨 三九八、八二二

銀貨總計 九三、四八〇

銀貨總計 四九二、二九二

代紙幣 四一、五〇〇

外ニ

税銀

運賃總計

銀貨 五〇、二七五

〃 凡三五〇、〇〇〇

〇

明治十九年中三池石炭運漕調査

一香港上海汕頭約定高ノ内、当方ニテ運漕スベキ分

凡拾三万七千五百噸

此分へ対シ

汽船 頼朝丸 千貳百噸積
 全 秀吉丸 七百五十拾噸積
 帆船 千早丸 六百五十拾噸積
 全 熊坂丸 六百五十拾噸積

右四艘ハ専ラ上海汕頭へ使用之筈
 外ニ雇入ヲ要スル船

汽船 貳千貳百噸積 壹艘
 全 千五百噸積ヨリ不少 貳千貳百噸積ヨリ不多 壹艘

右式艘ハ専ラ香港へ使用ノ筈

右之処へ現今外国船ニテ雇入有之定期船ハ
 貳千貳百噸積 壹艘 一月ヨリ六月迄
 貳千貳百噸積 壹艘 昨年ヨリ二月迄

右ニ付是ヨリ先キへ要スル船ハ左ノ如シ
 三月ヨリ 千五百噸積ヨリ 汽船 壹艘
 貳千貳百噸積迄
 七月ヨリ 貳千貳百噸積 全 壹艘

石炭約定未済之分 凡八万六千噸
 是ハ市場ノ都合ニテ何レへ売却スヘキ哉判定難致ト虽モ、概算
 スルニ口之津長崎其外内地ニテ売却スベキ分并ニ運漕船買人持
 ニテ売却スル分等ヲ除キ、凡四万六千噸香港福建廈門等へ売却
 スル見込ナレバ、夫カ為メ凡貳千三百噸積ノ船舶壹艘ヲ間断ナ
 ク要スベク、其他時々千五百噸積ノ分ヲ要スベシ

十八年中雇入運賃

香港平均 壹回 壹円四拾八錢五厘ニ当ル
 汕頭全 全 壹円七拾五錢ニ当ル
 上海へハ社船ノ外雇入無シ

因云フ香港迄一回式弗ノ運賃ヲ出シタルコアリ是ハ英魯ノ
 事件ニ際シ船舶欠乏ヲ告ケ不得止斯クノ運賃ヲ出セリはハ
 非常ノ時ナルヲ以右ニ算入セズ

[2]

上海支店詰社員

(上海三井物産会社支店野紙、墨書)

昇等并増給願

- 一手代二等席ニ 月給貳十五弗ニ 福原栄太郎
- 一席 如故 月給貳拾弗 元方附
- 一席 如故 月給拾五弗半 副島義太郎
- 一席 如故 月給拾貳弗半 石炭方
- 一席 如故 月給拾貳弗半 長谷部信義
- 一席 如故 月給拾貳弗半 全
- 一手代三等席ニ 月給拾貳弗半ニ 伊志田直二郎
- 一手代三等席ニ 月給拾貳弗半ニ 但仮渡 船船掛
- 一手代三等席ニ 月給七弗半ニ 桃井可雄
- 一手代見習席ニ 月給七弗半ニ 勘定方付
- 一手代見習席ニ 月給七弗半ニ 大井幾太郎
- 一 小僮席

月給五弗ニ (月給三弗)

明治十六年十月三十日

支配人

勘定方付

上田安三郎

東京本社元方御中

[3] (三井物産会社上海支店野紙、上田安三郎筆、墨書)

是迄

手代一等ニ	銀貨	四十円ニ	手代二等	銀貨	三十円	手代三等	銀貨	拾五円ニ	手代一等	銀貨	拾五円ニ	手代二等	銀貨	拾五円ニ	手代三等	銀貨	拾五円ニ
手代二等ニ	銀貨	三十円	手代三等	銀貨	拾五円ニ	手代一等	銀貨	拾五円ニ	手代二等	銀貨	拾五円ニ	手代三等	銀貨	拾五円ニ	手代一等	銀貨	拾五円ニ
手代三等ニ	銀貨	拾五円	手代一等	銀貨	拾五円	手代二等	銀貨	拾五円	手代三等	銀貨	拾五円	手代一等	銀貨	拾五円	手代二等	銀貨	拾五円
支店庶務			支店見習														

福原栄太郎

小室 三吉

益田 英作

田中 寿雄

副島儀太郎

長谷部信義

福井菊三郎

大野市太郎

高木鉄太郎

岡田 玄良

[4] 十八年五月十六日 (三井物産会社野紙、益田孝筆)

上田安三郎殿

東京 (印文「孝」)

本社元方(印)

貴地御出張御苦勞之義ニ存候、無滞御着之報ヲ得大慶不斜候

去ル十三日御電信ニ而

三池粉炭約定出来ル一ヶ月何程供給シ得ルカ、尤兼而約定セシ

分式千噸之外ナリ、速カニ聞定メ而返事スヘシ、三池残り塊炭

売約試み中なり

右は、直チニ三池江電信往復及候へ共、海軍卿在留中ニ而混雜と

見へ、何分電信分明ならず且ツ直段之低キ儀危み候気色ニ而彼是

往復申御答延引いたし申訳無之候、昨夜御催促ノ電信と共に明か

の報ヲ得而直チニ今朝左ノ如ク電信致候

三池粉炭毎月五千噸売約定シ而宜シ最下指直三七五 上海行之

事未定

右ハ御宿処太古江宛差出可申と存候へ共、関係之電信故如何と心

配、領事とも存候へ共多分ハ御着早々電信局ハ御断り相成候事と

心得、貴姓文ケニ而差立申候、御落手之事と存候

上海行之事ハ小林殿ハ近日ノ内許可相成候へ共いづれも貴処婦

店ノ後チと申事ニ相成候間、夫カ為メ無理ニ早く御帰店被成ニ不

及、是非々充分と御計画有之度と存し、未定と申置候、小林殿

ノ都合ニ抛り孝も参り度と存候、孝之都合ハ七月上旬ニいたし度、

いづれにも御帰店頃之模様ニ可致候、無御遠慮諸処販路御工夫置

キ被下度候

此度之御出張ハ前途大ニ販路更張ノ功ヲ為シ可申、委敷模様御告ケ可被下候、粉炭も一日四百頓ハ出炭相成三池ガハ八千頓まで毎月約定シ而宜キト申參候、尤指直も三六〇以上と申越候、然し右ニ而は余リ過數と存候間、五千頓と申進候事ニ御座候

一 此程南京米少々横濱へ輸入し、百斤式弗ニ売却相成、貴地の相場状ヲ見レハ、宥弗九拾幾位ニは着可致、且ツ白米ニは少々染みも有之候間、旁電信ニ而旗昌洋行江問合候処、玄米式弗拾幾、白米式弗三拾幾と有之、支那人之輸入せしものより高く、甚タ不満ニ尔後相場も非常ニ下落いたし候間見合可申と心得候へ共、折角電信致候事ニ付拾万斤丈ケ注文いたし申候、御越し相成候ハ、右等之事情も御申聞可被下候、何分試験而已ニ而意外に手數相懸ケ申候、然し当年不順ニ付都合次第多數ノ注文致スも難斗候間、試置候ニは可然夫是程能ク御申聞置可被下候

右申進度、早々以上
追而当方ニテズトラスリーベン雇入候節、別ニ御問合も不致取リ斗候事申訳無之事柄常取引之アダムソント事ナレハ少々余分トモ被存候得とも雇入候申候答ニ御座候也

〔5〕

内帖 十八年五月廿五日

上田安三郎殿

(三井物産会社野紙、益田孝筆)

東京本社

元方

香港より十六日御差立之御状落手披見いたし候、段々同地ニ於而御尽力之段御苦勞千万ニ存候、最早今明日ニは御安着之報あるハと相樂居候

香港江は先以小室三吉御派出可被成、夫等ニ付福原をハ上海ニ差置両支店之間監督可被成云々、夫々御見込ミ通りニ而可然と存候、福原副支配人と申すことは尚同氏帰京之上篤と面会之上ニ而評議も可致候

一 三池粉炭ハ一日四百頓之出炭有之候故、先頃約定被成候分を除キ他ニ八千頓も約定被成候而宜キ事ニ御座候、是迄何とも御報知無之故、其事御果し無之事と存候、尚具々御往復沢山御売却被下候太古之代理店も好都合ニ本年限り解約相成何寄御事共ニ御座候一運輸会社汽船開航之義ハ先以目的無之候、又たとへ開設いたし候而も代理店杯六ヶ數候

一 福原一応掃省之義、差支無之候
一 何栄記之一条ハ後便委敷可申進候、尚式万四千弗程彼ガ可取立分有之、証書等夫々御回し可申候
右申進度、早々以上

〔6〕

内啓

(東京三井物産会社野紙、木村正幹筆)

(朱書)

四拾円

十七年

五拾円

福原栄太郎

〃 貳拾円 〃 三拾円 副島儀太郎

〃 貳拾円 〃 貳十五円 長谷部信義

〃 ナシ 〃 貳拾円 小室 三吉

〃 ナシ 〃 貳拾円 福井菊三郎

〃 拾円 〃 貳拾円 田中 寿雄

〃 ナシ 〃 拾円 大野市太郎

右十七年度分賦金仮ニ相定候処 増減等至当之処御勅

考至急御申越可被下、尚店限者 四円より不多、式円より不少

支給候事ニ而是又夫々御申越至急 附差廻不申候

上田安三郎殿 印文(印)

(日付欄書入) 「明治十八年七月廿二日」

[7]

拝呈、暑気モ漸ク相凌候処、御渾家御揃益御安康奉遙賀候、次ニ

拙家一同幸ヒニ無事罷在候間、乍憚御休慮被下候様ニ奉願候、扱

モ過般は兼而御厄介相願居候長谷部卯一義ニ付、御来示之件ニ付

而は先便早速同人江敵敷申送り、尚親共よりモ文通致し速カニ改

心候様ニ申遣し候処、其後の行状は如何ニ候哉と心痛罷在候、然

ル処此度斗ラス本人の郷里佐賀よりの来状ニ本人当年は徴兵適齡

なる由ニ而、制規ニ従ヒ応募の心得可致様との事申来り、親信義

モ甚た驚キ心配致し居候、元ト長谷部の父ハ先年佐賀の役ニ於テ

国事犯の刑ニ因リ除族ト相成り候ニ付、今日卯一義は独立の戸主

ニテ徴兵之事としては懸念モ不仕、且ツ親なる者国刑ニ処セラレタ

ルハ募集ニ応スルニ及ズト存し、安心致居候処、国許ノ意外の来

状ニテ誠ニ心配ヲ生し候、就而は甚た以恐縮千万ニ奉存候へ共、

尚玉地ニ而も右の事篤ト御取糺し被下、何トカ免れ候事ニ御配慮

被下候義は相叶ヒ申間敷哉、若し弥以他ニ免れ候策無之候事ナレ

ハ學術脩業の名義ヲ以テ当地ニ御戻し被下候事ニモ相願可申欵、

左すれば幸ヒ来年は香港ニモ弥支店再設の用意中ニ御座候間、彼

地へなり当地ナリ本人ヲ使用スルニハ苦ミ候事無之候

何分右事情御洞察被成下、幾重ニも都合克ク御差因被下度伏テ奉

願上候、実ニ是迄の御丹精ヲ蒙リ乍ラ此程如き生マ意氣を生し候

事、以の外の次第に有之、其最中ニ又候斯ル義ヲ申出し候義如何

の思召モ候はん欵と甚た苦慮仕候へ共、両親の心配ヲ見ルニ忍ヒ

ズ且本人ヲ今日ニシテ兵役ニ出し候モ実ニ遺憾千万ニ奉存候間、

爰ニ愚考不包申出シ御賢慮ヲ仰キ申候、何分悪カラズ御酌量被下

度奉願候、先は右申述度、尚余事は後日可奉得御意奉存候、頓首

九月十九日 上田安三郎

松岡讓様 侍史

[8]

当便御内書難有拜見、高堂御揃御壯健先以奉遙賀候、扱モ令弟英

作氏ヲ当地ニ御派出被下度御所望申上候処、御許容被成下誠ニ難

有仕合セ仕候、就而は他の高木とか申仁ト共ニ御送り被下候旨拜承仕候、両氏共に已ニ御派出ニ御決定相成リ候上は一日モ早き方宜敷候間、早々出立相成候様ニ御取計ヒ伏而奉願上候、又口の津田中孝輔氏モ来年ニナレハ同地ヲ離レ候事出来可申云々も拝承誠ニ仕合之事ニ奉存候、此後長崎との取引は倍々盛大に及ヒ候上は是非彼地ニモ外国商売ニ手馴たる人老人入用ニ而、土地の外商等ニ侮リを受けず文通電信等ニモ差支無之様致置度万々切望罷在リ候間、誰れなり後日香港或は当地ガ分チ候事ニ本社より御差図ヲ受け度奉存候間、一時当方多人數ニ相成候事ニは御懸念被下間敷候様奉願上候、又田中孝輔モ会社の不為ヲ知リツ、口の津ヲ去ル者ニは無之候へ共、本人は充分当地か香港の如キ盛業地ニ於テ一ト勉強致し腕前ヲ磨キ見度の志望久敷候間、其本人の望ム処ニ御差向ケ相成候へ、会社ニモ功ヲ奏し本人モ愉快心ヲ以商務ニ従事シ則チ兩全の策ト奉存候間、宜敷御遠察被下候様ニ奉希望候
笹瀬、伊志田の退社は誠ニ会社之不幸歎息之至ニ御座候、伊志田は此程書面遣し本人の意中委敷申来リ候ニ因れば、決シテ他意アルニ非ズ誠ニ氣の毒ニ存し候
又当節の共同、三菱の合併は新聞紙等見る度聞く度切齒之至ニ不堪候
堪候

成候哉心配罷在候、然ルニ此度佐賀ガ来状ニ而同人は本年徵兵適齡ニ候由申来リ、親共をして尚一層の心配ヲ増さしめ申候、親信義ハ先年佐賀の役ニ国事犯の刑ニテ除族セラレ、今日は卯一義獨立の戸主と相成リ居リ候間安心致し居候処、此度郷里ガの文通ニ募集ニ応ズヘキ旨ヲ申来リ候間、誠ニ驚キ居候、弥左様ニ候事なれば他ニ可免の策も無之事ニ付、当地か香港ニ転任スル事ニモ御差図ヲ願度奉存候、誠ニ種々の事ヲ申込候様ニ御座候へとも宜敷御賢察被下度、今便松岡氏とも委細申出尚彼地ニ而篤ト御取糺し相願候事ニ仕置候
当地暑氣も漸く相緩ミ朝夕誠に苦情無き時頃と相成り、店内何れも無事ニ勉強罷在リ候間、御安神被下度、妻ひさ、信一、美穂等も至而達者ニ御座候、小室は来年初旬香港ニ出張、田中も其頃帰省の途ニ附キ可申候
右申述度如斯ニ御座候、頓首
九月十九日
上田安三郎
益田様 執事

尚々アルウイン氏ニ而は又々安産女子出生の由電報ヲ得、甚ヒ居候
居候

[9]

第三十九号 十八年九月十四日

(三井物産会社野紙、益田孝筆)

東京

上田安三郎殿

本社元方

怡和洋行へ御売却被成候一条、詳細之御報知ヲ得、別而大慶いたし申候、其内高ノ未定と申スは仙頭而已ニ候哉又ハ香港も未定ノ事歟、折角記載之高ニ下ラサル様いたし度祈望いたし候、御申越ノ通り此約定ハ必ス非常ニ貴処ノ頭腦ヲ痛メ候事ニ可有之と御察申居候、全ク平素ノ御勉力此好果ヲ結シモノト可申、政府ニ於而も大悦被致候

擬最以可賀ハ三池堀採高減却ノ決行、遂ニ政府ノ評議ニ而大蔵省ノ論勝チトナリシカ、今日三池へ従前ノ通り心得可申様通達有之候、左スレハ二十八万噸も出炭可致ものと御承知専ら明年ノ約定も尚外々ノ口御勉力可被成候、上海之処ハ別而多数ヲ要し申候、招商局、太古とも精々御勉メ被成度何と欵八万噸位ハ上海ニ売約定いたし度ものニ御座候、粉炭も今便御申越之処ニ而ハ意外ニ多数売却可相成との事、何寄之大幸ニ御座候、是も三七五ニ参り候へは結構千万ニ御座候、何卒御申越ノ通り沢山売却致度事ニ候、右ニ付而は香港支店開設ノ処も速カニ御着手小室なり福原なり頭ニ立ツ人先キニ御遣し置キ可被成候

英作并高木ハ明日便船ニは間に合兼候、次便無相違差出し可申候筑前も弥速カニ着手いたし度と而約定調印之為メ一旦掃坂相成候、広岡之細君再ヒ出京相成候由ニ御座候、就而ハ是又貴地ノ苦勞ものなり、下ノ関江外国船扱ノ出来ルもの一人差置キ不申而は差支可申、是ニも困却致候、口ノ津へ可相遣人物ハ物価新報ノ近藤勝敏可然欵、六ヶ月も実検いたし候へ、大体ハ熟練可致、左ス

レハ田中ハ貴地ニ而少々修業、香港ヲ預ケ候而宜く、近日金子も出京いたし候間篤と申合ノ上相決可申候

英作ハ又来年一二月頃より、折々内地(下ノ関、四日市)等輸出米を始め候節借用いたし度、同人より外手馴レ候もの無之、是ニも困却いたし居候、然し時々借受ハ貴地ニ而も差支有之間敷と存候

一 両汽船并風帆船ノ運賃直下ケ之一条頻りに議論も有之、旁以幾分力先ヲ越し、当方より下ケ方申出候方可然と相考へ申候、就而は貴処ノ御見込能々計算ヲ立而、何程までニいたし候ハ、可然哉御申越有之度、当方ニ而も其辺見込相立置キ能々比較ヲ立而決定可申出候、右ハ至急ノ用事故此便船ニ而御申越被下度候

一 電信局長米先生、兎角返事も不致よし、いつれニも北京、天津之親玉ニ頼込候より外策も無之欵、安藤領事より公使へ御申送り折角御骨折見被下度、外之外国人ニ而追々問合来候よし、何と欵好結果ヲ得度ものニ御座候、大体何品ニ而も出来いたし候、唯電線と申スもの、地金ヲ欧州より取寄候故ニ少々負ケル欵とも被存候

一 白紙ハ如何之景況欵又ハ税関用紙ハ如何、何卒白紙も今一層売扱メ相成様御工夫被成度候、壁紙ハ此前便差進候ものニ而、余程注文御取り被成候事と信居申候
□ 紙并封筒其外ハ大体勉強催促もいたし居候、然シ電信写^マ字紙之油附之分ハヨレフ油ニ無之而ハ役立不申由ニ付、如何可有之、当方ニ而此油の為メニ一層高くものニ相当り可申懸念致候、日本油ニ而試験中ニ御座候

一田中寿雄ハ都合有之候間早々帰省御聞届可被成候

一長崎虎列刺烈敷為メ、英之郵船ハ勿論外国船立寄り不申、神戸ニ而三池石炭入用之義類リニ申込有之候、十二日までハ高島之石炭約定有之候ハ共、尔後ハ篤と試験ノ上約定可致事ニP.O之支配人とも談置キ申候

高島も虎列刺流行ノ為メ停業いたし候よし、大ニ炭価ニ影響可致候、三池ハ此機会ヲ外サス掘採増加候様電信可致候右之段申進候也

[10]

明治十八年九月廿九日

東京 益田孝様

上海 上田安三郎

田中寿雄義御許可ニ因リ頼朝丸便ニテ本日当地出發、三池ヲ経テ次の玄海丸便ニテハ帰京被致可申候、先ツ五十日間の休暇ヲ与ヘ置キ候間来十一月私香港出張之前ニ帰店致し候様ニ仕度奉存候、同人も当節は当支店有要之詰員ニ有之一時の帰省トモ甚た差支勘カラス候間、一日も早めニ帰店望ましく奉存候、御面会之上ニ而当方近状も御聞取被下度候

先は幸便ニ付荅封ヲ認め本人ニ相渡し候、早々頓首

[11]

明治十八年十月廿八日 横浜丸便

東京本社

上海支店

松本常盤様

上田安三郎

拜啓、久々御疎遠申訳無之候処、不相変御壮栄先以奉賀上候
当便第一銀行為替ヲ以テ銀貨壹万円円本社トノ通常勘定ニ差入度通
送仕候、右は頼秀等運賃の外ニ御座候て、実は当店上半季利益金
ニ引当タルモノニ御座候間本社ニ而御使用相成り差支無之、尚運
賃金等ニ対し而も追々御送金可仕候

此度去十七年分の慰勞金ヲ賜り候間例の小生借用金千弗の口ニ返
上仕り度、当便則銀貨三百円附替差出し候間宜敷御入帳被下度奉
願上候

外ニ銀貨九十八円拾貳仙也、小生ハ貴下江送金トノ附替差出し
候、此金ハ先頃来御配慮ヲ願タル小生亡父の遺金ニ御座候間右ヲ
以テ又々無記名起業公債証書一枚(面高百円)御買入レ本社ニ御
預り被下度、若シ不足アラハ当方ハ差出し可申、若シ余金アラハ
其儘本社ニ御預り置被下度、誠ニ御多忙中恐縮之至ニ奉存候へと
も何分宜敷御手数之程伏而奉願上候

武田勝太郎義は不相變万事乃御厄介ヲ相懸ケ居り候事と奉存候、
先頃は昨年来の学費金勘定書等御通送被下正ニ拝受仕候、右は直
ニ御答モ可仕の処例のズボラニ而今日まで御無音仕り、要事アル
片ニ音信スル如キ手前勝手ものト御叱りモ可有之、甚タ以辱入申
候、不悪御遑察奉願上候

此程費下ニは大坂ニ御出張相成り候由ニ一寸金子氏ハ伝承仕候

処、最早此頃御帰京と奉存候、生義も此間三池まで一寸参り帰路長崎ニ廻り金子氏ニも面会仕り候

右公私の要詞打交セナガラ御左右相同期度旁早々頓首

箱館 松岡讓様

上海上田安三郎

(東京三井物産会社野紙)

[12]

上海支店

東京本社

松本常磐(印)

番外 上田安三郎様

私用親展

過日御書面被下難有拜見仕候処、益御安泰拵仕候

次ニ野生亦無異送光罷在候間、乍憚御安神被下度候、扱又其節為換ヲ以御送金相成り、起業公債買入方并預リ証共別紙之通り取斗

ヒ申候間、夫々御入手被下度、尚又益田様過ル十日より腦充血にて御引籠リ療養中ニ而、日ニ増し快方ニ趣き委曲英作子迄出状仕

置候間御聴合せ被下度、先ハ用事而已陳述仕候、早々謹言

尚又武田勝太郎子も学校転舎相成候ニ付、右近傍江下宿換為致

申候間左様御承知置き被下度候、以上

(日付欄書入)「明治十八年十一月十三日」

追日寒氣相募候処益御安寧奉賀上候、次ニ当方詰合同打揃無事罷在候間乍憚御安慮被下度奉存候、陳は此程は御懇書難有拜受、長谷部卯一徵兵一件モ以御蔭免役地ニ転籍の上ニ無事相済候由御惠報被下誠ニ以て難有御厚志深く奉拜謝候、本人親共之迄ヒは実ニ一方ならず、早速私々厚く御礼申上候様ニと呉々も願出申候殊ニ又当節卯一義も左程不品行ト申迄ニモ無之由ヲ承り、猶更安堵仕候事ニ御座候、尚此上トモ何分御叱責被下候様奉伏願候、又同人義を或は香港ニなり遣し可申云々は唯々徵兵一件ハ私の心附候儘を申上タル訳ニ而、何も別段之意無之次第ニ御座候間、免役の事さへ相済候上は何卒末永く貴方ニ而御使用被下候様奉懇願候先般御来示の熊坂丸乗組藤井重治は当節当港ニ碇泊中ニ有之、此度口の津ニ着次第運転手免状請求之為試見ヲ受ケ度上京スル事ニ相成居り候間、同人の御親父ニ御面会も被為在候ハ、御話し被下度、頻リニ勉強致し居り候人ニ候間遠カラス良船長ト相成られ可申ト案ミ居り申候

先は乍延引御礼旁右申上度、早々頓首

[14]

明治十八年十二月廿二日

香港ニ於テ

益田社長殿

支配人

木村副社長殿

上田安三郎

私状

十八年十一月十七日認め

三井物産会社上海支店「内状」(田中)

拜啓仕候、今般上海香港兩支店詰社員の昇等并増給見込別紙ヲ以テ伺出候ニ付、宜敷御詮議ノ上御指令被下度、又月給の等差モ先ツ私一個ノ見込ヲ相認メ差出候間、是又御電覽の上御差圖被成下度、右は都而私の見込ノミヲ申上候義ニ御座候、当香港店ノ義は兼テ申上置候通りニ、先ツ福原栄太郎ヲ支配人代理トノ派出致置キ、小室三吉ヲ助役ニ附シ可然相考申候、其外ニ菅人東京商業学校卒業生徒ニテ高柳豊三郎ト申者ヲ当地支店限ノ傭員トシテ使用仕度、又追々繁忙ニ立至リ候ハ、上海店詰員ノ内ヨリ一名勘定方専務トノ派出致度奉存候、尚又当地ト上海店詰社員ハ都合ニ因リ何時モ交代致候様ニ仕置候ハ、兩店ノ業務別テ親密ニ施行相運ヒ可申様ニ被存候、当地支店諸帳簿勘定ノ義は都テ上海支店ノ振合ニ倣ヒ、当地限り独立ノ損益勘定ヲ製シ每半季本社ニ差出シ候事ニ可仕哉、其辺宜シク御指令被下度奉伺候、以上

上海香港兩支店詰社員昇等并増給願

全	銀貨	拾五円ニ	手代三等	十式円半	福井菊三郎
全	銀貨	拾五円ニ	手代三等	十式円半	田中 寿雄
席	銀貨	拾五円ニ	手代三等	十式円半	長谷部信義
手代二等ニ	銀貨	貳十五円ニ	手代三等	十五円	益田 英作
手代二等ニ	銀貨	三十円ニ	手代三等	十五円	小室 三吉
手代一等ニ	銀貨	四十円ニ	手代二等	貳十五円	福原栄太郎

全	銀貨	拾貳円半ニ	手代三等	十式円	大野市太郎
全	銀貨	拾円ニ	手代三等	給未定	高木鉄太郎
手代三等ニ	銀貨	拾円ニ	支店限傭	手代見習	岡田 玄良

明治十八年十二月

支配人 上田安三郎

東京本社元方御中

上海香港兩支店詰社員月給見込

一手代卷等	上席	銀貨六十円
	次席	同 五十円
	末席	同 四十円
一手代貳等	上席	銀貨參十円
	次席	同 貳十五円
	末席	同 貳十円
一手代三等	上席	銀貨十五円
	次席	同 十式円半
	末席	同 十円

但毎月々給高ノ三割ヲ積金トノ支店ニ預リ毎年々末ニ戻ス
兩支店詰社員ハ支店內又ハ支店ニ於テ設クル処ノ家屋内ニ居住セシメ賄費ハ社費ヲ以テ支弁ス
右相当ニ可有之奉存候間相伺候也

明治十八年十二月

支配人 上田安三郎

[15]

明治十八年十二月二十二日

東京本社元方御中

香港ニテ

上田安三郎

先般上海支店詰社員之履歴書差出候御私ト福原栄太郎の分相洩れ居り候間、右式通爰ニ乍延引封送仕り候右申上度如斯ニ御座候也

[16]

内帖 十九年一月廿一日

上田安三郎殿

(三井物産会社野紙)

東京本社

益田 孝

香港支店開設諸事好都合一月早々御電報ノ趣何等之幸カ不過之、又早速新嘉坡辺へ御出張御苦勞千万ニ御座候、段々之御奮進ニ拠リ大ニ事業も伸張し当社之面目ハ申すまでも無之、此度三池鉱山局ハ大蔵省ノ管轄と相成折柄旁以都合ニ御座候、尚此上と而も充分之御勉力為國家祈望之至ニ不堪候

新嘉坡之情況如何、日本石炭ヲ以而彼ノ市場之幾分ヲ押領シ得ヘキ見込歟、濠州英国ノ石炭ヲ驅逐シ得ヘキ見込アル歟、英国濠州石炭ノ価格ハ何程ニ当リ居哉、又ハ三池之石炭ハ彼ノ地着何程ニ当ル歟

又同地石炭の需用ハ一ケ年何程ナルカ、又日本石炭之及フ処先ツ同地ニ止リ候哉、今少々も南西ニ向ヒ販路ヲ拡ムル之見込無之哉、右等精細ニ御書通可被下候

一香港ハ福原栄太郎ヲ御遣し、小室之ニ助成セシムルヲ至極と存候、扱等級月給等之御見込御申越承知致候、当方ニ而も段々相談いたし候処、福原ハ香港支店副支配人とし而貴兄之代理為致候方可然、而て其給料ハ三拾弗といたし副支配人ニ而常ニ支配人之代理相勤、主務者たるを以拾弗之手当遣し候ハ、如何、交際杯ノ模様ニ抛リ手当ハ尚式拾弗ニ増候而も宜く、御見込御申越有之度候小室三吉并英作手代二等席ハ最早其順ニ而宜ク、唯小室月給之処今日まで拾五円之もの一時ニ三十弗ハ如何ニ付式拾五弗といたし香港ニ而勤務ノ様子ヲ見而尚二三ヶ月ヲ経而増給可然、英作と區別相立候方可然候へ、英作之方式拾弗といたし可然、一体当方ニ而は英作之方古參ニ而是迄之勤務ニ取リ此処少シ昇級スヘキ折ニ有之、然し新參と而も勉不勉并其人ノ技術ニ拠リ候事ナレハ從元其辺斟酌可致処無之候間、御鑒定ニ抛リ御見込充分ニ御申越祈望いたし候、外一同ハ別ニ異存無之、高木之処も岡田も可然と存候、右様当方之見込申進候へ共必定夫々深く御考察之上御申越被成候事ニ付、尚一応御見込承知之上いづれとも可致候間無御腹臆御申立可被下候

其上に而辞令差送り可申候
一日本石炭之景況ハ最慘状ヲ極メ申候、東京杯へ持込ムもの実ニ其数難斗、筑前之産出大ニ相増、少々此節之処ニ而は超過致スベ

く、自然香港上海へ販路ヲ求ムル之外無之様可相成、三菱も松島
ハ大ヤリ損ヒ高島も最早命数相分り候、中ノ島へ雖ヲ立候処高島
の脉ニし而、老丈ノ炭八尺之炭五間五尺とも毫も不違非常之利益
ものと申候、然し島カ小ナル丈ケニ一日三百頓位よりハ採掘相成
ル間敷申聞候へ共如何哉、当会社借区沖繩県離島ハ上離島ト申処
ニ御座候、去月廿九日賀田技手并水谷伝七出張いたし候、昨今ハ
皆該島へ渡航いたし候事と存候
いつれ近々に輸出ノ許可ヲ得へク多分ハ三月ニ至り一ト荷送り出
候様可相成事と存候

一御地へ丁銅二三万斤も毎月送り度と申荷主有之、大坂ガ申越候、
折角相試可申様為替之都合等能々申含メ送り致候、当地よりも田
作ヲ送り度申もの有之追々と商売も開ケ可申候、為替之処も正金
銀行原六郎へ頼リニ申聞致候
先右近況申進度、早々以上

尚々、母病死之間違ハ大笑之話、然し意外御痛心ヲ掛ケ甚恐
縮なり、全ク武智と孝と説違ヒナリ、小生母ハ追々快方昨日
品川へ帰宅仕候程なり、夫ニ変リ武智之御母ハ甚御氣之毒ニ
而貴処ニは別し而御愁傷と存候、アルウイン氏も来月二日布
哇へ出帆致候

(17)
内帖

十九年二月三日

(三井物産会社野紙)

東京

上田安三郎殿

益田 孝

新嘉坡其外諸処御奔走御尽力昨日無事上海へ御帰店被成候よし、
何寄之幸大悦いたし候、香港より去月廿三日附之御書ハ一昨日落
手、新嘉坡之情況ハ詳細ニ承知、小林殿江も委細御目ニ掛ケ申
候、香港之市場ハ征伐シ得ルモ御状之面ニ抛レハ新嘉坡ハ中々六
ケ敷、殊ニ価格も余程低下ニ付我炭ヲ以競争スルハ一層之骨折と
被存候、然し從元御進取ハ申ス迄も無之候間漸次御申越之通りニ
御計策可被下候

一香港開店以来之景況ハ定し万事好都合と存候、是より福原御遣
し、兩人ニ而専ら尽力之事ニいたし、折々御苦勞御見廻り被下
度候

一本年ハ石炭も塊炭十五万頓、粉炭十式万頓、合計式拾七万頓之採
掘と相極り申候間、尚塊炭余程御売却可被成分有之、一層上海之
処御尽力被下度、別紙大藏省へ差出候当年予算寫一通差出申候

一扱万事大藏省所轄換へと相成候以来、八ヶ間敷相成、因却之事共
ニ候、命令状も変更可相成模様ニ而、取調へ中ニ有之、別而船之
事一番八ヶ間敷、是非日本船ヲ以外国船ニ代り候積り殿談に有之
候、何程の船を使用シ得候哉問合ハセニ付、則ち別紙之通りニ取
調へ書差出申候、就而は期限ヲ定メ而雇入有之ものハ、満期前ニ
ハ必ス郵船会社之汽船ヲ雇入候事ニ御承知、アト雇入は断然御見
合可被成候、又目下運賃并雇入方等相談中ニ候へは、極り次第可
申進候間、其後ハ如何様之場合ニモ雇船ノ事ハ当方江御申遣し可
被成候、必ス該社江引合可申進候、大藏省に而は石炭ニ而利益無

之とも、郵船会社江数十万円之金ヲ投与之事故、其方之船カ利益ヲ得レハ同シクナリ抔論も起り候程ニ而、実ニ因却千万ニ御座候、殊更雇船約定も大蔵省ニ而直接ニ取極可相成抔被申聞候間、夫は強而相断リ懇請いたし候次第ニ御座候、右等之都合ニ而取扱振りも中々先前之通りニ不参、程能く命令状とも先前通り据置キ之事余程骨折レ可申候、頼朝、秀吉ヲ割合宜キ方ニ使用し、郵船会社之汽船ハ香港ニ使用セントスルハ不公平抔との論も起り而実ニ為被因申候、三池丈之処も随分面倒多く而小林殿ニも因却可被致候へ共、ツマリ売レサヘスレハ何程ニ而も出炭為致候事ハ動かサル模様ニ御座候、先ツ何事も忍耐ニ而勉力、ツマリ事実之上ニ而他人ニ勝候丈ケ之働キヲいたし候より外無之、尚此上とも益御勉力可被下候

一認メ中去月廿五日付之御状落手セリ、北海道硫黄ハ早速見本送リ可申候

右まで早々頓首

尚々呉々大蔵卿ハ日本船ヲ使用スル思召、郵船会社も昨今荷物無之候間頻リニ頼込居熊本丸等ヲ相用候積と相見へ申候間、此後ハ外国船雇入不相成必ス当方江御申越可被下候

[18]

内帖 明治十九年二月十一日

広島丸便

東京 益田孝殿

上海上田安三郎

香港支店ニ人員配置之事等ニ付一月廿一日附御状難有拜見仕候、先ツ福原栄太郎を副支配人ニ御採用被成下候旨奉謹謝候、給料之義は一体彼地は上海ガも諸品一層高直ニ有之候て衣服其外の費用も多く相掛り、又他ニ詰員一身上ノ事ニ付起見致し居り候事も有之候処より先般ノ上申書相認め申候、乍併会社全体之御振合ニ差響候様ニ而は不都合ニ御座候間、其辺宜敷御取捨被下度奉願候、小室三吉と益田英作トハ益田の方古参ニシテ事務も充分出来候事は承知罷在候へ共、当方ニ而は差当り小室の方当方の商業ニ馴れ、別而此度香港ニ派出後同人の働作を篤ト注目致候処、諸事取扱方至而深実ニシテ劳ヲ惜マズ勉強ニシテ人ニ功ヲ譲り事の細大トナク会社之得失ヲ思考シテ要点ニ着目し常ニ人ニ交ルニ穏和ニシテ礼讓厚ク、就中身の品行は一点の申条モ無之、其会社ガ為ニ尽スノ精神は勿論実ニ感心罷在候、此人此姿ニテ末永く会社ニ従事スルモノナレハ誠ニ当会社ニトリテ大ナル幸福ニ可有之、斯ル人物は可成重ク登用シテ本人ニは倍々其の意心ヲ堅クセシメ、一ツハ他の票準トモ致候方可然ト奉存候、英作氏小室ニ劣ルニ非レ共不幸ニシテ当地ニ来ルヲ遅ク未た是迄充分智才ヲ示スノ機会ヲ得ラレザリシ事ニ候間、其必ラス成ス事アルハ存シナガラモ私ニテハ小室の方ヲ一步進メザルヲ不得と相考申候、此度福原ヲ香港ニ転任為致候上は英作氏ヲ私の手助ケト致シ充分諸般之事務ニ涉ラセ、本人の働作等鑒定之上ニ而又願出候トモ可有之奉存候、右何モ御下問ニ付愚見其儘上申仕候へ共、前文ニモ申述候通り当会社一般之振合ニ關係致すの妨けも有之候而は不都合ニ御座候間、宜

敷御差因奉願候

一上海ト香港支店トハ、諸般之事務取扱方可成同一ニ致し度ト存
し、其事務取扱手續唯今起草中ニ御座候間、追而整頓の上本社ノ
電覽ニ供シ弥々確定仕度奉存候
右拝答旁申述度如斯ニ御座候也

[19]

内帖 十九年二月廿四日

(三井物産会社野紙、益田孝筆)

上田安三郎殿

本社元方

社員月給之義ニ付御内帖ノ趣承知いたし候、夫々月給之処ハ御申
立通り取斗申候、御申越之件々至極御尤ニ存候、福原、副支配人
ニ申付辞令書差出申候

尚貴地及香港取扱規則等艸案御調ヘニ候ヘは早々御遣し可被成候
郵船会社ニ而香港之航路一弗七十五兆ニ而熊本丸雇入之義小林殿
より種々御引合相成候処、引合不申旨ヲ以断リ申出候、然し尚大
藏大臣ニハ親敷談シルト申事ニ未タ何とも決定不相成候、就而ハ
我社船も此四月ヨリ之船賃ハ一弗八十兆ニ不致而ハ難叶、余程上
海之処働キ不申而ハ是迄之如ク引合ニ不相成候間、別し而御骨折
可被下候、実ニ郵船会社ニは困りものニ御座候、もし許可さヘア
レハ直チニ船ヲ買而当社ニ而御受合可申とまで申居候ヘ共、夫も
いたす間敷残念ニ存候、以上

内務大臣御越之機会ニ投し小生も一寸離島へ相越来候積リニ候、

委細ニ見分し而可申進と案居候、都合ニ抛ルと将来香港之一大商
売ヲ起し候見込ニ候也

(欄外受付印)「MITSUI BUSSAN KAISHA, SHANGHAI,
4 MAR. 86」

[20]

十九年三月十八日

(三井物産会社野紙、墨書)

上海

下ノ関ニ而認ム

上田安三郎殿

益田 孝

小生去月廿六日東京ヲ発し、海上都合克ク南島之巡回ヲ了り、一
昨日此地へ帰着いたし候、御放念可被下、今日午後当地出帆坂地
ニ而兩三日滞留帰京いたし候積リニ御座候、廿日間程既ニ不在ニ
いたし候間、尔後之事ハ承知不致候ヘ共別段相変り候事も無之と
存候

扱八重山島ノ内西表島ニ立寄り、炭坑之アル小島内離と申へ上
陸、实地見分致候処、成ル程炭脉ハ三方ニ露出いたし居、高キ処
は海面より六七尺も可有之歟、又今掘採ニ着手之処ハ海面より
僅カニ五尺位之場処なり、唯残念ナルハ炭脉僅カニ三尺ニ過キ不
申、其内下部ニ少々之狭石有之、石と申程ニも無之候ヘ共是ハ手
ニ而取除キ居候、掘採ニ弁利ナルコトハ実ニ此上ハ無之、舂船之直
キ前に石炭有之、追々遠方ニ至り候而も誠ニ僅カニ御座候、扱炭
質ハ此度少々送り進申候、残念ナルは格別之教潮之為メ間二合不

申候、いつれアトより沢山送り(五十頓)進候積りニ申付置候、右ニ而委細御承知有之度、分析表ニ抛レハ炭素七十九ニシ而高島よりハ良質ナリ、焚用候ものニ尋候処唐津之上炭と同様ニ申参候、碎ケ易キ処ヲ以推察スルニ良質ニは相違無之と存候、内離の方ハ周田四十町余之小島ニ付從元永年ニ拂り營業スヘキものニ無之と存候ヘ共、右ニ接続スル外離并西表之本島ニも二三ヶ処程炭脉頭ハレ居候間、夫々探偵を為し見ル積りニ御座候、今日之処ニ而ハ何も器械も入用無之唯々坑夫ニ苦ミ居候、帰京の上懲役人差回し方出願可致、左スレハ五六十人も出来彼是是非とも一日百頓ハ掘採相成候様計画致居候、船も風帆船ニ而ハ如何と心痛いたし候処、清風丸と申風帆参り、何ニも差支無之港内ハ唯々甚タ深く三十二ヒロ位有之、鎖ハ極長キもの用意いたし候方無之、然し場処ニ抛レハ夫程ニも無之、いつれ海図并長門丸船長之報告書ヲ得而送り出可申、いつれ当年五月ニは千早丸一回差向見度而し而、直チニ香港ヘ送り試度事ニ御座候

一竜動田辺次郎一兎角不快勝ニ而當惑いたし候、兩人ニ而ハ何分手回り兼候処ヘ右之仕合故、都合ニ抛レハ急ニも一人差遣し度、左も無之候而も当秋ニハ一名増員いたし度、其當撰者ハ種々愚考候ニ段々過日より御内示之事も有之、小室三吉ガ無之、折角香港ヘ御宛被成候もの取り去候義、貴地ヘ対而ハ不相濟候ヘ共、遠方隔絶ノ地故是非最秀なるもの遣し度存候、右故同人代り從今御心組被成同人ハ倫敦江向候ものと御心得置被下度候

一筑前石炭如何、先口之分ハ二兩七匁ニ而、長崎人大浦某江売約定

いたし候よしニ付、定し其口ヘ御売却相成候事と存候、大浦後家清國人ヲ欺キ資金ヲ借受ケ、其手下をし而上海ヘ見世ヲ出サセタリと曾而承り及候其人なるへし、御地造船所江一手売込之特許ヲ得タリと而筑前ヘ来り申唱ヘ候よし如何、筑前石炭アト口ハ如何、其炭質如何、將來之御見込如何、尚委細御見込為御聞被下度候

先右申進度いつれ余ハ帰東之上可申出候

長々御留守故御帰店後別而御多忙と存候、時下折角御自愛祈候也

[21] (三井物産会社野紙、益田孝筆)

内帖 十九年三月卅日

本社

上田安三郎殿

元方

竜動支配人病氣ニ付帰朝申付候間今ハ渡辺專二郎唯一人ニ有之、然ルニ当年ハ昨年杯と違ひ輸出も続々有之、其外用事も相増居候間、都合社員も三人ニ可致積り之折柄却而一人と相成如何とも致ス様も有之間敷、又領事其外大藏省出張官江対し而も余り用事ヲ等閑に心得居候様ニ当り、是非速カニ一人出張為致度之処該所ハ別而外と違ひ余程信用之アルものニ而將來望み之アル人物ヲ撰度兼而申進し有之候通り是迄諸店談合中に而も追々御申越之処ニ而は小室三吉其任ニ当り候間、是ヲ遣し度電信ニ而往復いたし候事ニ御座候、然ルニ香港之方差支如何とも商売出来サル様御申越、御七千万ニ候ヘ共、香港之方ハ小室主任ニも無之、福原もア

リ、又永ク貴側ニアリ而多少一体ノ模様ヲ承知いたし候若手も有之、又近接ニ而事々物々貴兄之指揮ヲ受ケ取斗、折々は親敷御見回りも被成候場処故、御不都合は申すまでも無之候へ共倫敦に遣スベキ社員一人も他ニ無之時ニ際し而は、何と欲御縁合ハセノ出来サル訳ケも有之間敷、再応申進候故太体当方の場合も御推察可相成ニ、尚イムポシブルとの事ハ当方ノ事情夫までニアル欵ヲ御了解無之欵、又ハ如何哉実ニ解兼候次第ニ候

然し他は如何様差支へ而も構ハヌと而ケ様御申越被成候事ハ無之事ハ万々信用いたし居候間、差当り巴里へ電信いたし坂本ヲ一時遣し置候様申付候へ共、是と而も残荷片付ニ付随分困難ニ可有之と存候

然し差当りハ操合可申候間、香港之処ハ一人ニ而足リル処ハ二人と被成候ても又如何様被成候而も、小室之義ハ英國へ差出候様御工夫有之度候、もし新規飛入候もの杯英國へ遣し候而は当方ニ於而安心難相成よりハ外若手之大ニ希望ヲ損、第一ニ小室抔も志ヲ挫キ可申候、尚外ニ兩三名も望みアル若手有之候間、御試験被成候ハ、御地へ可差出、数名差出し有之候者共実ニ役立サルコトと見へ、此際ニ望み一人も小室の代りと相成此急ヲ救フことノ出来サルとは歎敷事ニ御座候間、将来格別見込無之もの共は断然ニ御返へし可被成、外ニ有為ノ人物差出可申候、香港へ創立以来間も無之支店故、貴処ノ御苦心ハ推察いたし候へ共、倫敦も当社ニ取り大事之場処近キより繰替へ如何ともいたし双方ノ都合相斗り候事当然ニ付、尚御勤考福井大野其外ニ而兩人も遣し是非ニ御縁合ハ

セ、早速小室ハ御遣相成候様御取斗可被成候、一時坂本ヲ操替へ候事ハ余程苦ク候へ共、貴兄之御電信も又無理ナラサルコトと推察し右様取斗事ニ御座候、御了察、早々御工夫可被下候

[22]

時頃漸ク暖和ニ相成候処貴家益御繁昌御一同様御無事御消光先以奉賀候、次ニ私々常々無限御無音誠ニ申訳も無御座候、陳は兼而古賀佐吉伯父ニ毎月少々宛送金致来候処、此度より又御承知之におくに殿ニも僅かなから金子差送り申度、就而は毎月貴家当ニ金五円宛為替差出し候ニ付、右の内三円五拾錢ヲ古賀伯父ニ御渡被下、壹円五拾錢丈ケヲおくに殿江小使金として御払渡被下度、御手数願上候、則チ此度ノ金五円為替手形爰ニ封送任り候間、何卒前述之通り夫々本人ニ御配分被下度、且又此後之処も毎月貴家江当テ送金仕度候間、甚以乍御面倒御渡方之義宜敷御世話被下度、為替は御地三井物産会社支店ニ而御払渡シ可仕事ニ御座候、右は貴家御多用之中ニ願上候義甚た御氣之毒ニ奉存候へ共、偏ニ御世話被下度御依頼申上候、先は右得貴意度如斯ニ候、頓首

長崎 十九年五月四日

上海 上田安三郎

長崎

古賀豊三郎様

[23]

内帖

益御多様奉賀候、扱先達而中私病氣之折は毎々御送詞被下御厚意深く奉謝候、御蔭ヲ以漸ク当節快氣仕候間乍憚御休意被下度奉願上候

陳は毎々御面御恐縮之至ニ奉存候へ共、此度又々亡父之遺金貳百円程手ニ入り候儘本社勘定ニ附替置候間、貴方ニおめて先例之通り起業公債証書御買求の上、先口同様御預り置被下度、又御買入ニ付相生し候処の少差は貴地ニ而然ル可く御取計ヒ置キ被下度、而シテ御寸暇の折ニ先々の利子勘定等御示シ被下度伏而願上候、尚余情は次便ニ可申上先は右御依頼申上度如斯ニ御座候、早々頓首

十九年五月五日

松本常盤様

貴下

上田安三郎

[24]

五月十三日

(三井物産会社野紙)

上海支店

上田安三郎様

東京本社

松本常磐

五月五日発翰正ニ落手仕候処時下益御勇壯大慶至極ニ御座候、次ニ小生亦不相変送光罷在候条乍憚御安慮被下度、扱先頃ハ御不快

ニ候処早速御平愈相成り歎甚罷在候、就而御依頼之公債証書貳百円也別紙勘定之通り購求致し、先前御預り相成居利子共差引致し殘金ハ御預リニ致置候、尚又右起業公債貳百円之預リ証ハ別紙之通り差上申候間御落手被下度、尚相当之用向ハ無御遠慮御申越し候様願上候

一岩原謙三子倫敦江出張被命、来ル十八日出帆船にて長崎ヲ経而
出帆致事ニ決定仕候
一伊東彦七子外務省之官員ト相成り首尾能奉職致居候様子ニ御座候間御安神被下度候
先ハ無事而已申上ケ余ハ後信万總可申上候、早々頓首

[25]

内展 明治十九年四月二十九日

上田安三郎様

横浜丸便

(印文「昇」)
寺島昇(印)

(三井物産会社野紙)

益々御請適奉遙賀候、小生無異乍憚御休神可被下候
一毎度印刷局製造品御売捌ノ儀ニ付、御掛々御文通被下、近々御売捌ノ段好都合奉謝候、扱藁紙印刷用紙ノ儀ハ、御地の御状ニ依リ而は将来充分ニ御売捌可相成哉の御見込、兼而拝承仕居候、此儀ニ就而は印刷局へ上申いたし、同局ニ於而モ一層手ヲ尽シ製造可致様ノ手順モ相立申居り、然ルニ先般御掛へ申上候通り此紙ニ限リ内地売捌ヲ止メ、海外一途之目的ニ相成居候処、海外と申候而モ他ニ充分ノ目途無之、唯々御地而已ニ注目相成被居候儀ニ有之

処、随分価格割合高直の様ニ存候付先般一割ニ引之約束迄相遂候得共、尚余程原価高直の様ニ被存候付、当地ニ而モ色々手ヲ尽シ出願申出候而モ容易ニ引下致呉ズ、就而は何卒御地ヨリ直段高直ニ付今一層割引相成候様致眞度云々御状ヲ以御申出被下度、然らハ当方ヨリ申立の好手段と相成可申候間、宜敷御考察御文通の程奉存候、目下ハ壹番質印刷用紙老ポント九錢、二番質八錢ニ候而、いづれモ壹割之引ニ御座候、且三番質ハ余リ製造不致割引モ無之候得共、一割ハ是非共右同様ノ割引ニハ可相成候得共、是ニ而は未タ直段モ高直ニ有之様存候、就而は前条一番二番三番質共尚一二割ノ割引相成候様印刷局江御申立有之度云々御洩しを被書下度、尤モ当方ニ而は上海支店ニ於而モ販路ヲ開候ニハ多数ノ買手江対し相当の割引ヲ以直引致居候儀ニ付、一割而已ニ而は如何とモ致方無之云々申述居候儀ニ御座候、其辺御含ノ上宜敷御申出被下度、然らハ御地の来状ヲ以尚又出願致度奉存候
右御依頼旁如此御座候、艸、頓首

(欄外受付印) [MITSUI BUSSAN KAISHA, SHANG-
HAI, 6-MAY.86] [上田]

[26]

明治十九年五月十八日 東京丸俣

寺島昇様

上海 上田安三郎

四月廿九日御状本月六日ニ拝受、藁紙割引の事ニ付御来諭委細拝

承仕候、右は早速前便ニテ右件老封差出可申答之処、少々取混シ候事有之候為、其義難仕甚々恐縮千万ニ奉存候、然ルニ此度本方ガ来状ニ拝見致候へは、割引ヲ壹割六歩ニ御改正相成候哉ニ承知仕り候、就而は唯今直ニ式割以上割引之義申出候義如何可有之坎、勿論貴方ニ而可然トノ御考ニモ候へは更ニ当方ガ其意ヲ以テ書面差出し可申候間、此状御落手次第第二否ヤ御申遣し被下度奉願上候、此度迄は万々不都合無之為と存し認め方差扣申候、尚又藁紙売方の義は当方モ頻ニ心配、可成多分ニ売却仕度希望罷在り候、委細は別紙ニテ可申上、先は御答旁右申上度、早々頓首

[27]

明治十九年五月十八日 東京丸俣

益田孝様

上海上田安三郎

益御安康奉遙賀候、扱私病氣ニ付而は深ク御心配被下毎、御懇書難有奉拝謝候、以御蔭漸く此頃平愈仕候間乍憚御休慮被成下度候、御令弟英作氏ニは至テ御壯健、別而此度は一方ナラス御骨折ヲ相掛ケ申候、却説三池来年約定之事其外ニテ三池江罷越度、当店用向等片付次第ニ本月末頃ニは出発の心組ミ罷在候処、可相成は其前一応拝顔ヲ得テ種々御相談御指揮仰度件も有之候間、若シ御都合相叶ヒ候事なれば来六月六七日頃ニ神戸迄御出浮相願候事出来申間敷哉、左スレハ私義は来月二日当地出帆の郵船ニ而出発仕り神戸ニ而御出会申上度奉願候、而シテ其帰路ニ長崎三池ニ參

り候ハ、誠ニ以テ好都合ト奉存候、右様勝手ケ間敷義ヲ申上候モ甚タ恐縮千万ニ候ヘ共、万ニ御都合相付キ可申哉ト存候儘申出候間、何卒御勘考被下候上電信ニテ御報知被成下度、伏而奉希候、若シ御操合セ相附不申候ハ、直ニ三池ニ参上仕り度奉存候間、要件丈ケ御書通奉願候
右得御意度如斯ニ御座候、謹言

[28]

内啓 十九年七月十七日疊

上田安三郎殿

(東京三井物産会社野紙、木村正幹筆)

別紙十八年度分賦金書付差廻申候、昨年は少し不充分之惣計算故僅少之分賦御迷惑御察申候

別紙出張社員分賦極度之金額書入一応差廻候間、夫々実地至当之処ニ御書直し早々御返し可被下候、左候ハ、本書相調早々差廻可申候

右為其早々以上

[29]

十八年分

(上海三井物産会社支店野紙、上田安三郎筆)

四十

25 福原

式十八

15 益田

式十八 15 小室
式十八 15 副島
式十五 12 $\frac{1}{2}$ 長谷へ
式十五 12 $\frac{1}{2}$ 福井
式十式 10 田中
式十 10 大野
式百十六

[30]

内啓 十九年八月十一日

上田安三郎殿

(三井物産会社野紙)

過ルニ御状取手拝誦い細承知、別紙夫々書付差廻候間例之通御渡可被下候、当節社長北海行留守中ニ付小生々申進候

扱是ニ一ツ之難事出来申、平岡寅助事候其実貴地多忙ニ堪兼候哉、切角深切ヲ以海外詰御申付ト雖モ実地ニ望ミ学問も不足ニ而兔而も修業ニ相成兼、且病身旁々社ヘ対候而も不相濟、且一身ニ取而も見溜も無之、旁々速ニ退社相願聞濟之上は三ヶ年間入塾就

学致度との趣ニ而親父君ニ申越候趣ニ而御承知之通り同人ハ両親ノ未タ乳呑子ノ如ク愛居事故甚以懸念ヲ相生本人之満足セサル事ヲ無理ニ勤サセ候而も不宜ニ付、申訳ケ無之候へとも速ニ彼力意ニ任せ帰朝候而退社聞濟御座候様との頼ニ付本人之心中如此已上ハ一日も無益ニ付社長江申ニ不及断然決意帰朝申付候間前情御含

其御計可被下候、無左シテ心配引留候而も万一病氣相起候ハ、愚知ヲ聞候外無之嗚呼残念と申外無御座候、本人江は只々名残借体ニ御引分レ而已ニ而最早何も御申述無之事ニ御計可被下候、同人兄照殿は至極残念と昨日も来電有之申候
 一 藤瀬政二郎儀兵庫より貴地へ出張之管ニ而可然役割御遣ひ可被下候、此地ニ御返し之儀申参居候処平岡相濟候間如何哉と存候
 右為其早々以上

四拾円

式十七円

式十七円

三十円

式十七円

式十七円

十三円

十八年分不遣

同断

メ式百拾六円

福原栄太郎

益田 英作

小室 三吉

副島儀太郎

長谷部信義

福井菊三郎

田中 寿雄

大野市太郎

高木鉄太郎

岡田 玄良

[31]

第八月廿六日

(三井物産会社野紙)

上海上田安三郎様

東京松本常啓

八月十七日弑御内帖正ニ拝読仕候処残暑難渡候得共先以益御安泰拵賀仕候、次ニ小生亦無異送光乍憚御休慮被成下度候、扱又当地稀なる炎天残暑にて九十度ヲ往来致し、加之扉車益跋扈之勢ニ候得共、社員中遠藤大三郎一人伝染、是も帛籍ヲ脱し日ニ増し快方其他一人も無之大ニ仕合ニ存居候、別して小生ともは僻地ニ住居平常不自由致居候為メ、加様之時ハ悪疫も少ク大ニ仕合仕候、尚又専ら撰生ニ注意罷在候間乍憚御安神被下度候

一 木村副社長ニハ益田社長北海道行ニ付、押而御出勤被成候為メカ、流行病ニハ無之候得ども廿二日より病臥御療養中、是も日ニ増し少々宛御快方ニ御座候、右ニ付元方も無人ト相成候ニ付馬越氏ニハ急ニ帰京ニ致様出電致置候処、本月廿八日函館出帆帰京仕様返電有之候由、益田社長ハ山県井上兩大臣ニ随行、小樽□陸行根室江御出張相成候由、御帰京之上ハ花々數商業も可有之歎ト推考罷在候

一 益蔵氏ハ高梨氏等共ニ箱根入浴相成候様子ニ御座候

一 藤瀬政次郎事ハ早速御引受被下候由、当人も定めし満足仕候事ニ推考罷在候得とも、右代り人無之ニハ閉口罷在候、尚又商業学校卒業生にて小林□一長男雄志と申候人、見習之為メ当課江参居候得とも、是も九月十五日迄ニハ徵兵年齢、右ニ付頻ニ貴方出張之義歎願ニ被及居候得共、元方評議ニハ上海ニ右様人員ヲ要スベキ筈なしと云ヒ、又徵兵年齢空ヲ招集致候而は後日之心配等も有之云々未決ニ御座候為メ、当人ハ会社にて採用難相成節は自費ヲ

以上海留学と覚悟被致居候様子ニ有之候得共平岡モ自分勝手ニ付
帰京相成候等、又々無人と可相成、然ル上ハ右用之人物御採用相
成候而は得用にも無之欵、是も御勘考之上至急御返事被下度候

一矢野君も過勞ニ流行病相生し、伊賀保江御入浴相成候由

一武田勝太郎氏ハ脚氣病ノ為メ総州鹿野山江転居為致置候処、右
病ハ全愈候様候間、帰京ニ致欵ト照会有之候得共、悪疫流行之際
下宿屋等ニテハ充分予防も難相叶推考仕候間、休業中ハ帰京ニ不
及ト返信仕置間左様御承知被下度候

一十三日夜より暴風吹統キ、支那海大荒ニ而有之候由、幸ニ船舶
別条無之、仕合之事ニ御渡候、右暴風ハ長さ大坂辺迄有之候由ニ
御座候得ども、当地は雨気別而少ク暴風等之様子も相見ヘ不申、乍
併二十日も近日ニ有之候間多少之暴風雨も有之欵と推考罷在候
右無事而已申上候、早々

尚々、金融は聊カ流融致兼候様ニ御座候、外国為換相場日ニ増
し下落、但々驚人之外無之候、早々

[32]

内帖 十九年九月廿日夜

上田安三郎殿

(三井物産会社野紙)

東京

益田 孝

天津へ御出張今日無事御帰店之よし、生義も北海道ハ両海岸并紋
鼈等巡回し夫より海路萩之浜へ渡り、石ノ巻より陸路仙台福島等
ヲ経テ一昨日無事ニ帰京いたし候、両通御状之写并御内帖函館江

御遣し落手御電信も雖有存候

台木之義ハ段々之御骨折ニ而呉々当会社之面目且ツハ将来之試験
ニも相成、幸此事ニ御座候

余程調達ニ苦ミ候様子、然しツマリ無事ニ相調ヒ都而用意出来候
間先以安心ニ御座候、青森燐(殆と檜よりハ上等ニ相見ヘ申候)
とも相成候へは箱館渡廿三歳より五歳位ニは被買申候、檜とは殆
と半額ニも候間明年弥アト之注文も有之候事なれば可成文ケ據ニ
而御引受ケ可被下候

アト屯万挺も引統キ用意宜く候へ共唯々運送ニ難義いたし居候、
郵船会社定期船ニ而為積取度ト懸合居候へ共兎角談判相調ヒ不
申、自然郵船会社ニ而承諾いたし不申時ハ熊阪千早之内欵、若ク
ハ秀吉丸ニ而運送いたすの外ハ無之、さスレハ積荷一万ニ而ハ少
々不足当惑ニ御座候、可相成ハ今四五千も売増し相成候へは此上
も無之候

一社員配置之義ニ付而小生も段々勘考、帰京の上尚木村とも相談小
林殿之心附も承り、凡愚存左に申進候

一上海ハ三四軒之得意と約定結了スル前後最肝要ニ而、其余ハ時
々之売捌キも至而少シ、香港ハ之ニ反し大数ノ約定ハ無ク、時々
之売捌キ故中々注意も一層密ならさるべく、殊ニ八重山島ノ石
炭又幌内石炭之新物販路可相開事業容易之事ニ無之、且ツハ九
州其外との商売も力次第ニ伸張可被致候間、是よりハ上海之約
定相終り候上ハ太体香港へ貴兄親敷詰切御指揮相成候事肝要ニ
被存候、成程福原之力ニ而ハ新規ノ土地なり旁一般懸念ヲ抱ク

も無理ならずと被存候

一 扱貴君多クハ香港江出張と相成候へは、上海へ福原ヲ差置キ可然、香港之方一時御不在之時ハ小室ニ而も暫時之間ハ可然欵、而し而田中孝輔事ハ今日ニロノ津ヲ去ルヲ難相成、然し同人ノ身と相成候而も今日之姿ニ而はロノ津ニ終身流罪同様ニ心得可申、ツマリ同人も氣力ヲ失し可申候間今より誰カ代リ之人ヲ見出し、六ケ月間も田中と同勤為致候上田中義ハ香港なり上海なり其時ノ都合ニ而御使用被成、同人ノ技倆次第ニ而一方為任可申候、ロノ津ニ而充分ニ満足ヲ与へ候と而決し而香港江江單直チニロノ津同様之働キを得ルヲハ随分六ケ敷哉と被存候

一 英作事ハ種々御配慮ニ而大ニ事務も進捗致候欵とは存候へ共如何哉、同人義ハ此度更ニ独乙ハンホルクへ出張為致度候間、度々人ヲ交へ不都合至極ニ候へ共、御地之処ハ可然御取斗早々御返へし被下度、欧州ノ商勢頓ニ一変し英国之商權ハ独乙ニ被奪、米ノ商売杯全ク独乙ニ帰し申候、就而ハ今より三ヶ年程ハ適当ノエセントを置キ夫ニ随從セシメテ同処ノ商売ヲ修業為致、傍ラ米の売捌キ等ニ為立合候様いたし度、其他魚油硫黄等中々独乙ノ引合も増加致候様存候間、充分ニ修業為致度と存候へは、早速同人ヲホンホルク江派遣いたし度事ニ御座候、右ニ付御線合ハセ同人義ハ御帰へし被下度候

一 此程差出候藤瀬も末頼母敷人物、又今一人小林魯国ニ領事たりし人ノ子息、此程より試験いたし見候ニ後ニ余程役立候人物と被思候、是又徴兵之難義ニ当惑もいたし居候間旁英作等ノ代リ

ニ御試ミ可被下候、然し徴兵之煩ハ有之人と而も不充分ト御認メ之人物ハ無遠慮御差戻し被成度、北海道辺へ使用可致候、岡田大野等如何、余り氣力も無之候へ、御戻しニ而も宜敷候

先ツ右様之配置ニ而大体無不都合參り不申候哉、英作一条ヲ除ク之外ハ尚御意見も可有之候間、早々御申越有之度候

一 幌内石炭山ハいつれ私下ケ可相成哉と被存候、此度実地へ臨み見候ニ余り賞スヘキ山ニ無之、乍併鉄道ハ手宮積出場まで七拾弐ニ而運送受負致し候而已ならず、懲役人も有之候而非常ニ安ク掘採致候間、先ツ手宮渡し弐弐弗ニハ相揚り可申、同処より香港まで二弗ノ運賃とスルモ四弗五拾弐ニ売却相成候へは損ハ無之、况哉五弗ニも売レ運賃二弗以下と相成候へは大ニ利益ニ相成可申候

明年三月迄ハ先以官ニ而維持いたし候事ニ相成是非三万噸ハ香港ニ而売却いたし度との所望ニ御座候間、是も骨折候ハ、一ト商売ニ而是ハ都合ニ抛り手宮ニ而買切り輸出いたし候様ニ可致積リニ御座候、既ニ弐百噸程ハ五弗五拾弐ニ而売却相成候よし重疊千万ニ御座候、此度積送り候分も早々御売却可被下、夫次第アト積送り可申候

一 八重山島の炭ハ是非至急一ト荷積送り度候間、可相成ハ千早丸早々同地へ御回し被下度候、彼是因循なる事申參り居候へ共、世間之聞へニ対し而も猶余相成り兼候

一 北海道根室地方も皆悉ク巡回いたし候処、昆布之改良ニは地方之者共大困難致居候而、外務大臣より嚴重なる談事も有之、いつれ馬鹿々敷処置ハ止ミ可申候へ共、頻リニ三四名之支那人ニ束縛さ

れ当惑スルよし申唱へ、広業商会へハ怨み重り居り決し而依託不致候間、当会社ハ懇望いたし候もの多し、以前ノ昆布と違ひ候間少々ツ、なれハ依託販売引受候も可然、其内御地ニ而取扱ノ振合ハ申スニ不及、倉庫等別段之準備ヲ要し候事ナレハ漸次其用意も心掛度、ソロミ々少々ツ、引受可致事ニ松岡へも申残し置キ候間左様御承知被下度候

尚追々申進度事も有之候へ共いつれ追々可申進候、天津商況等心得ニ可相成事ハ御申越被下度候

右申進度如此候、頓首

[33]

奉拝啓候、陳は此度当店益田英作ヲ独逸ハンボルク江御派出相成度思召之由ニテ、速カニ帰朝可為致旨御書面ニ因テ謹承仕り、則チ御差函ニ從ヒ本便帰朝為致申候、却説欧州の商売昔日之風ニ非ス都而の商權追々独逸ニ集り、我國關係の商事も多ク彼等の取扱フ処トナラントスル勢情ヲ早クモ御洞察アリテ、彼地方ニ出張員ヲ御設置ニ可相成の御趣意ナル趣ニ拝承仕り、誠ニ以テ愉快ニモ亦雀躍□□不堪候、此挙タルヤ私ニ於テモ同感□□無之、左スレハ諸事御差函ニ從ヒ其ノ御目途ノ御実施を助ケ候こそ当然にして聊カモ異論等申出候理由としては更ニ無之候へ共、私ニ於テハ亦当地方の商売ヲ他視シテ欧州の商売ヲ助けんと迄の意は無御座候、当節支那政府ニ於テモ海外之面倒モ大ヒニ減シ候ヲ以テ、精神ヲ内國の事ニ転シ、鉄道ヲ布設或は通用錢ヲ改鑄シ、電信ヲ架設或

は海軍兵学校ヲ起ス等大ヒニ前日ノ景状ト異り、從テ商業上ニモ漸ク活版ノ情体ヲ現サント見へ申候、又当支店の業務ニ至テハ設立以來丁度十年ト相成り、漸ク中外ノ人ニ信用ヲ得テ各地の官衛ニテモ又將ニ此の会社ニ用向ヲ命セントスルノ場合迄ニ至り、今ヨリソソ会社の為ニ楽ミアル商売も出来可申ト相考候処ニ候間、此上は上海香港共ニ適當の人々ヲ置キ益々堅固の店トナシ、傍ラ

社員の有志者ヲ育テ、天津其外ニ派出シ万事ニ注目シテ進スノナク、外ハ括ク内ハ固ク弥々土地々々ノ信用ヲ厚フ申度常ニ苦慮罷在リ候処ヨリ、或は御所望申上候人モアリ、実ハ今日ニシテ現ニ福州辺ニ派出致シ臨時事ヲ取扱ワセ度モ其人ニ乏ク□□存し候位ニ無人ト申ても不当ニ無之甚た難義致居候折柄ニ、益田英作ヲ他ニ御転シ被下候事甚た以て迷惑千万ニ御座候、去りとして同人ヲ拒ンテ差出シ不申候訳ニは無之、此の新任ニハ誰れか他人ヲ御撰ミニ相成り、同人ハ矢張り此地ニ御差置之方会社の為ニモ又本人の為ニモ宜シカラント存し候間、可成は右様御取計と被下度ト存候、当地方の店ハ此後益々商業は相増し有志有力の人ニ無之而是在勤無算束、僅カニ徵兵ノ苦ヲ免シ為ニ無余義辛抱スル輩は頼母シカラス、怡和ニセヨ太古ニセヨ彼等か數十名立派ナル番頭手代ヲ使ヒテ何商売トナク自由ニ取扱居り候有様ヲ見れば真ニ羨しく、我々小僧の寄り集りハ辱入候事ニ御座候、又一ツの事務ヲ取扱フニモ永ク土地ニ在リテ人ニモ知ラレ名モ知ラレ候者ノ応対ト、更ニ新参ノ人ノ応接ニテハ大ヒニ難易アリテ、別而香港当地の如キハ深く此事ヲ感シ候、或は貴方ニ而の御考ニ而は有志の人

余り長ク支那の如キ土地ニ在テハ其志は何程カ縮退スルノ恐れあらんとニは無之哉、夫ナレハ少シモ御懸念ニ及ヒ申間敷様ニ被存候、英作氏当地ニ参ラレテヨリ丁度全一年、漸クニシテ土地ニ馴レ事ニ馴れ、私他ニ出張致候事アルモ無差支代理シ、又一体の商売拡張は自ら熱心ニテ類ニ百事ニ注目し、最初当地ニ来ルノ日ヨリ長ク此地ニ在ルモノト覚悟セシ念慮ヲ替ヘス、今日迄勉強無情勤め被居候者ヲ、突然他ニ転シ候事言ワ、両損トモ可申候、当店ハ不便ヲ得ルノミナラス人の代ル毎ニ取扱フ事ハ渋滞シ、間接ニハ損ナシトモ難申、本人は志望ヲ転セラレ馴レタル事ヲ捨テ、新ナル業ニ従事スル事ニ有之、又他ノ一方申時は会社の命令ナレハ背ク可キ道理は無之も、一旦甲の土地ニ在リテ志ヲ立テ之ヲ以テ我身ヲ立テ信用モ得ント決意セルヲ斗ラズ他ニ転スルコトスレハ、其人は大ヒニ不愉快の心ヲ起シ可申、若シ英作氏ヲ会社ニ縁故ナキ他人ト見做シ、今此地ニ在リテ俄カニ他方江転任ヲ被命自ラ之を好マサレバ、会社の命背クベカラズ、自身ノ志望ニ異レハ無抛退社スルノ外ナシ、其人ハ会社の内実ヲ知ル人ナリ、此場合ニ至テハ我々ノ掛念ハ少々ナラサルベシ、元ヨリ英作氏ハ〔非〕ス候ヘ共、初発ニ当地ニ長ク居〔相〕違ナキコト候間、此度の転任〔意〕外ニ出タルニ候、只々右ハ愚意ヲ其儘申述候事ニ候間、宜敷御聞捨置キ被下度、又不文は元ヨリ不敬ニ渉ル文字等ハ偏ニ御寛恕被下度、擬弥々英作氏ヲ欧州ニ御派出ニ可相成モノトシ、爰ニ私々歎願は私此度当地ニテ三池来年約定ヲ済セ、香港ニ参リテ再ヒ当地ニ帰来リ後任等夫々手配致シ候迄の処、同人ヲ当地ニ

借用仕度此義偏ニ御聞濟被下度願上候、実ニ勝手ケ間敷義ヲ申出候ヘ共当店の事は種々込入居リ候商売モ有之候間、此事余義なく願出候訳ニ御座候、若シ幸ニ英作氏ヲ是迄の通り当地ニ御置キ被下候事トモ相成候ハ、実ニ当店の仕合ニ御座候、尚又近時当店の実況英作氏充分承知之事ニ御座候間、御聞取被下、事情御洞察被下度伏テ奉希望候、謹言

十九年十月八日

上田安三郎

益田社長殿

[34]

私状

明治十九年九月三十日東京丸便

箱館

上海 上田安三郎

松岡讓様

益御安清奉賀候、此程は益田社長親敷貴地方御巡回ニ相成貴下ニモ御満足無ト奉存、且向後之商売上ニ御便益不敷候事とはよりも大慶仕合ニ奉存候

擬今朝兩度之御電信ヲ得而長谷部卯一遂ニ貴地ニ於テ病死致候由ヲ承リ、誠ニ驚入申候、同人兼而病氣ニ而厚キ御世話相蒙居候事は、両三日前ニ高橋君より卯一父江御遣し御手紙ニ而拝承罷在候処、今朝最初御電信ニは危篤トアリ、統ヒテ遂ニ死去致候旨ヲ承り、両親共々只々何カ夢の如ク余リニ突然ナルニ驚愕の外無之、

已ニ今日の便ニも貴方江罷越度と迄に申出候を小生ハ差留置候、却説卯一義年来貴下ノ御愛顧を蒙り、教育ノ事万端山海ノ厚恩ヲ頂キ、此度は別而斗ラズ病ニ罹り候而より実ニ容易ナラス御手当ヲ蒙り、御礼筆紙ニ難尽、只万分ノ報恩モ不仕シテ相果候事こそ残念千万ニ候旨親ニも頼リニ申出、貴下江御詔申上具ト懇ニ申居候、加ルニ又葬式万端跡々ノ仕末も御配慮ニ預リ候事深く恐縮に奉存候、隔遠之地ニ両親罷在候事ニ付彼等罷出自ラ御恩ヲ拜謝する義も難致、偏ニ御依頼申上候外無御座候、長谷部義実ハ昨夜なとは今日ノ事あるを知ラス貴下及高橋君江卯一病中御懇切ノ御取扱ヲ蒙りたる御礼状ヲ認め居り候位ノ事ニ御座候、然ルニ今朝ノ事以來深く悲歎ニ沈み、自身ニ而此便迄ハ呈書も仕兼候段私より宜敷申上候様願出候間候、此義不悪御遠察被成下度、次便ニは必ラス同人より可申上又当便小生より高橋氏江宥封差出可申答ニ候処、最早メ切間合も無之ニ付相略し候間何卒貴下ハ宜敷御申被下度、実ニ此度ノ義ニ付而ハ貴店話各位御一同江一方ナラス御世話ヲ蒙り候事とは又一々呈書相略し候段、宜敷御伝詞被下度、伏而奉願上候

先ハ右申述度如斯ニ御座候、早々頓首

[35] (三井物産会社野紙、益田孝筆)
内帖 十九年十月十八日

上田安三郎殿

元方

英作ニ御托之御状落手披見いたし候、詳カニ御申越ノ趣了承、且ツ英作ヨリも御地ノ事情ハ勿論、御意見ハ詳細承り申候、一々確論にして御尤千万何と他ニ申様も無之候、尤幾分カ当方ノ事情實徹不致処も有之、其辺ハ此帖ニ詳悉可致候へ共、ツマリ猥リニ人ヲ更ルことは何等ノ事情ニ不拘其得策ニ無之事ハ動かカスヘカラサルノ論ニシ而、殊ニ此節清國進取ノ方略ニ出、大ニ用務ヲ増スノ秋ニ際シ僅カニ其業ニ馴レシモノを除キ去ルニ至而ハ、所謂將タル者ノ手足ヲ去ルニ付、妨害疑イナキニ有之、是等ハ飽まで御同感ニ有之候へ共、又変ニ処スルことは無くて叶ヒ難ク、尤一方を守る人ヨリ見ル時ハ他方を顧ルノ違無キニ候へ共、本社カ全体ノ商売ヲ統轄スル上ニ於而ハいつれ之方も不平均無ク便宜ヲ謀リ、前後輕重其宜キヲ得而社員ノ配置ヲ為サ、レハ、大ニ業ヲ誤ルニ有之、是等も厚ク御察知有之度事ニ候、一体欧米社会と違ひ我商売社会ニ人物ノ乏敷ハ実ニ甚敷、我社之如キハ他ニ比し而ハ大ニ勝利居候へ共、如何ニせん我社商業ノ進歩ハ人物ヲ養生スルヨリも速カにして、常ニ人ノ乏敷ニ苦ミ候へハ、猥りに人を換ルノ得策ナラサルハ飽迄知レ共如何ニせん急場ニ際し而ハ所謂間に合を為し而も成ル丈ケ商売ヲ失ハサル様勉ルノ外無之、是等ハ実ニ遺憾之極ニハ候へ共不得已之致ス処、今二三年も経過セハ大ニ此弊ハ除キ得ヘシと存候

扱此度独乙へ社員ヲ派遣スルハ敢而新事業ヲ発起スルモノニ無之、御地ノ想像之如ク旧ヲ捨而新ヲ取ル様之訳ニハ決し而無之、全ク旧ヲ守り而是迄之丹誠を失ハサルヲ勉ムル而已ニ有之候

米ノ商業ハ当社ニ取り最大切なることは能ク御承知ノ通りニ有之、然ルニ連年其筋ニ於ても輸出ノ為メ損失打統キ、当年ノ如キハ決而損失ノ無キヲ保証シ而輸出相勤メたりシニ、独乙ニ商權ノ帰セシ為メ仲裁法ハ悉ク独乙ノ商人ニ奪ヒ去ラレ、英人ノ手ヲ離レ無法ノ仲裁ヲ為シ而売買手ノ保護ヲ為シ、因ラサリキ今年も意外之損失ヲ招キ実ニ其筋ヘ対シ而も申訳も無之始末ニ候、去迎外國人ハ引統キ輸出ヲ為シ、又頻リニ大陸ヲ巡回シ而花主ヲ求ムル等勉強到ラサル処無之、然ルニ我社ハ依然倫敦江支店ヲ構ヘ僅カニ社員二名倫敦一切ノ商事ニ当リ、大陸之如キハブロークルノ代人又ハ代人ノ代人ヲシ而受渡ノ検査ヲ為サシムル等、兎角花主との縁も遠ク受渡ノ取扱も不充分ニ彼ノ地ノ事情ニも疎ク、一步々々外國人ニ被占候様相成、其筋江対シ而も等閑ノ責メ難被免、如何様し而も一名ハ差出しといつれ坎堅固ノエセントを撰ミ其店ヘ置キ而監督ヲ為致、旁ラ独乙商売も為学他日大ニ為ス時ノ要ニも供し度、扱ハ疍名派出スルコト取極メたる事ニ御座候、斯ク相決定せしを上申セシカハ大藏省ニ於ても聊其勉強之精神ニ安堵サレ、又孝ニも明年早々出掛候事等も申シ、遂ニ引統キ当冬より来春江ノ輸出も断然執行スヘシと被決候事ニ御座候、是等容易ナラサル關係之アル事情も御了察相成度事ニ御座候

一扱此派出員ニ殊更英作ヲ撰ミ、昨年一度ハ欧行セシムルと申せし小室をも撰マス、又福原をも撰マサリシハ、此米商売ニ従事せしこと無ク、其事業上我々之要スルコト等ハ承知不致候間、是等新規之人ナレハ少クも六ヶ月間位ハ東京ニ差置キ、能ク積入方より大

藏省ノ取扱、我々之希望をも承知不致而難叶、今年十一月末ヨリ輸出ヲ始ムルノ間ニは合ヒ不申候間、扱ハ英作と申進候事ニ御座候

小室之処江は篤と事情を申送り聊カ遅延スル旨ヲ以不満足ヲ生セサル様致度と存候

右等情体難止場合より生セシ事、折角御地ニ従事せしめ度との考ヘニ而差出し候事ニハ有之候へ共、差当り他に遣スヘキものも無之、又御地之処ニは仮令ヒ同人ノ格別用務ニ役立タサルも甚御不弁利と存候へ共、他二人も無之以上ハ目今当社ニ取り最大切なる用事を失ハサル為メニは実ニ代ヘ難ク、乍承知申出候事ニ有之候去リ迎御申越之処も御尤なり、貴方も今ハ大切ノ場合なり、是等は頓着不致と申ニハ決し而無之、実ニ二名ヲ除ク之外ハ皆徴兵遁レノ若輩而已ニ付是等ヲ以貴兄之大戦争ヲ為スことハ困難申斗りも無之候間、何と坎工夫を致サ、レハ不相成、唯今篤と勘考中ニ有之候、田中孝輔之義ハ唯今ニも口ノ津ヲ離レ而貴方江派遣シ、又永ク清國ノ商売ニ従事為致候事ハ都合相成、金子も承服、口ノ津之処ハ服部又ハ沢松ノ内ヲ以是ニ代ラシムルコト致し候間、直チニも差出し可申候、尤急ニ用立候ものニ無之、少クも六ヶ月位ハ貴所之側ラニ在り而取扱方ヲ学ハシメ、遂ニ香港なり上海なり御使用相成度と存候、小室も相応ニ用務ニ馴レ候事と存候間、福原等と共に何と坎御繰合ハせ御出来不申哉、英作ヲ派遣スル以上ハ当分貴地之用ニ差出し候事ハ不相成、直チニ出張為致度と存居候、尤一ヶ月位はいつれと坎可相成候へ共、既ニ左様極ツタ人ナ

レバ却もおもしろからず候哉、御地御都合次第第一ヶ月位ニ而も用弁相成候事ニ候ハは電信次第可差出候

一此事ニ付而はアルウィン氏ニも種々心配いたし候、明日小生ニ相談いたし度この事故、面会同人とも厚ク談合いたし見候積なり、又他ニ良考も無之哉、種々勸考中ニも有之候間、尚可申進ぐも存候ハ共、貴方ニ於而も篤ク事情御考案被成、弁セヨルノ丈々ハ御弁し相成候様いたし度希望いたし候

右ノ段御返事申進度、早々以上

尚々貴方ハ殿敷御論被成候も畢竟我社商權ヲ拡張ノ精神、此方ニ而無理ヲ云フも是又同一之事ニ候ハは、唯能ク軽重難易ヲ推考シ相決スルノ外無之、無腹臆御見込ハ御申越テ之候候也

[9]

Shanghai 6th Sep 1885

Gentlemen,

To enable you to take such measures as you may think proper with regard to your coal supplies for next year, and partly acting under the suggestion of Shang Taotai Managing Director of the C.M.S.U.Co. and partly through my arrangements to charter steam Colliers from England not yet having been completed; I avail myself of the opportunity to submit for your consideration a proposition which is acted upon, may lead

to the mutual benefit of all concerned.

As the output of Tang Colliery has since May last increased from 600 to 900 tons daily, and finding great difficulty in getting suitable boats to bring part of this output to Shanghai, I at once put myself in communication with certain steamship owners and builders in England and Scotland. Not wishing to be shipowners ourselves, I on behalf of the C.F.&M. Co. made a proposition to charter two or three of the boats our friends proposed to build on terms which we have every reason to believe they will accept.

As the boats will carry a large dead weight cargo on 12 ft. draft with a good speed at a small consumption of coal, the rates I offered them as coal freight and the price I propose to charge them for our coal will more than clear them of all their working expenses, and the owners certainly do expect to reap a handsome freight upward from their agents at Shanghai.

Though our output averages 900 tons a day yet through the increased local demands, we will not have more than 6,000 tons per month or 50,000 tons per annum to bring to Shanghai, and that can easily be done by two or three boats which our friends have proposed to build.

The proposition made to me by Shang Taotai was that all the C.M.S.U.Co.'s steamers would take in coals (Kaiping) at

Tientsin for the round trip, if I would take Tls. 385 (the present price of Mieke) for our unscreened No. 5 Seam Coal and Tls. 3□ (the present price of Takashima Dust) for our NO. 5 dust.

The price of our unscreened No. 5 Seam Coal at Tientsin is Tls. 450 and No. 5 Seam Dust Tls. 350 -- I am quite prepared to sacrifice something for the sake of securing the coal of the upward trip, but to make such arrangement with the C.M.S.U. Co. only will not help me to give up my arrangements to charter suitable boats from England, an arrangement which in consequence of my connections with you, I do not like to make unless circumstances compel me to do so-- I therefore propose that all the three companies' steamers running to Tientsin should take in Kaiping coal at Tientsin for the round trip at the following prices.

Tientsin	Tls.	400	for	No. 5 Seam	Unscreened	Coal
"	"	350	"	"	9 Lump	Coal
"	"	300	"	"	5 Dust	Coal

deliver free of charge alongside your steamer.

As assay on our coals will prove to you that No. 9 Seam Coal ought to fetch the same price as this Mieke while No. 5 Seam Unscreened Coal is worth half a tael more and I believe your own engineers will confirm what I say is true and should they on good grounds decide that No. 9 Lump is not worth Tls. 3□

I would be glad to make a further reduction and as the difference between Tientsin and Shanghai Syen (?): is nearly made up by the charge of Coolie hire from your coal shed to the steamer you can loose nothing in the prices on the coals no matter you take in Japan Coals at Tientsin and I believe all your Captains will tell you that to give the steamer a better term in her downward trip it is better to coal at the other end. It is only to secure your further patronage of twenty or thirty thousand tons more of our coal that we agree to forfeit half a tael per ton all round and in trying to make this arrangement with no loss to you in prices, we show you at the same time that the gain you will get by it will be enormous, for these boats being constructed of steel will carry 1400 tons general cargo on a draft of 12 feet and if they only take 1000 tons of cargo and 50 Chinese passengers upward every trip, the loss on the three companies will be severely felt.

Should you accept my proposition I will at once telegraph to England to make no further arrangement to build the boats, and I further assure you that in future thre C.E.&M.Co. will charter no boats that may be detrimental to your trade and if we have occasion to charter a boat to bring a cargo down here or to Foochow our agents at Tientsin will always give you the refusal of such charter.

Awaiting your early reply. I am gentlemen,
Your most obedient servant
(Sd.) Tang. Kung. Tsing
Managing Director Chinese Eng^s Min.^s
Company

[5]

Kaiping Oct.2/86

My dear Wooyeda

I was very much pleased to get your kind note and glad to hear that you and your family are so well & happy-I am afraid we have both been too busy since we last met to be able to correspond very much, but I trust our friendship is just as true as ever in spite of it.

I am very glad you got the sleeper order and hope you will get many more in the future- I don't know Hiba wood at all, but have asked for samples to test with the Hinoki-Engineers in Japan swear by Hinoki from Yesso as being the most durable for the money in spite of its high value- cheap timber is not always cheapest in the long run- The Hinoki will be better, the further it grows Northwards and you must cultivate the Yesso market if you wish to sell us perfectly durable material

to compete well with Canadian & native supplies- The Colliery etc is doing splendidly but we are freed to pay off a lot of debts incurred in all sorts of absurd outside schemes which really had no connection with us- Hope some day to see you up here, when you can find time and after completion of line will render travelling easier and more rapid for a busy man like you must be-

My wife and self are both as jolly as possible and have as yet no family. You have been mroe lucky in that direction it seems.

What has become of Sas□ is he still in London and your firm? And do you still occupy the same house in Shanghai which you had eight years back?

The floods have given us great trouble and I fear we shall have difficulty in completing road by spring, but will do our level best anyhow- the line will be superior to the Japanese and cost about 1/6 per mile carrying more cargo at less price- so the Chinese are luckier than you were with the tremendous staff of Directors etc etc and narrow 3.6" gauge- on 30 miles of line we have only 1-Foreign Engineer and two drivers- in Japan it was 30 men to one mile- all well paid and working as slow as possible, this is why the Imperial Ry cost so much more than the Chinese will do- if no "squeezing" is permitted. With our

best wishes to you & your family.

Yours very truly

C.W. Kinden

[38]

(切紙、墨書)

愚弟之事ハ書状ニ而御託いたし申候、不悪御寛恕可被下候

三池此前半季之利益御下ケ金ハ壹万八千五百拾円程有之候旨、只今電信有之畢竟段々之御骨折故ニ有之候、内々一寸申進置候、時下御自愛所祈なり、頓首

十一日

孝

安三郎様

尚々香港上海人配り之處、尚御申越次第如何様ニも取計可申候、実ニ毎々乱入御迷惑相掛申候

[39]

(野紙、墨書)

拝啓

敝署之節各位益御清福奉敬賀候、然ハ今般当港へ商業学校開設ニ付学費ハ六ケ年間書面之通五厘金ヲ補助スル事トナリ、十二名ノ創立委員ニテ創立費并学校敷地購入代ヲ有志家ニ寄テ寄附ヲ仰キ候事ニ決定仕候故ニ、御迷惑之御事ニ御座候得共於貴地長崎御在籍之御方々へ応分之御寄附ヲ相願度宜布御聞得可被下候、尤御寄

附高ハ九月一日開校前迄ニ御報知被下候ハ、金員ハ追テ御送附被

下候而亘敷、又一時ニ無之而も来年中ニ割合兩三度ニ相成候而も亘敷、夫ハ本書之通五厘金ヨリ一ケ年二千四百円ツ、ノ補助有之候故創立費募集方三千円以上之高ニ付、急ニ運ヒ兼可申、仍テ右壹ケ年分ノ操上ヲ相談、夫ヲ以テ創立候付此返済ヲ来年中ニ償却スル故、一時ノ事ニ及ヒ不申御含思召ヲ以テ御寄附奉願候、此学校開設発起人ハ全ク小きヨリ出テ県令始メノ賛成ヲ得テ爰ニ成立候付、各君ニ於テ相当之御寄附ヲ承リ候ハ、一入面目之次第、何卒宜布御賛助奉仰候、頓首

十八年八月

品川九十九(印)

吳 碩 殿

大倉謹五郎殿

村瀬 忠房殿

上田安三郎殿

鶴田 幸吉殿

有志諸君御中

(付箋)

「鶴田氏ニは御出崎中ニ付直接可相願処、多忙取紛中不得其儀候間上海御連中ゆへ、旁御連名ヲ以テ拝願仕候也」

公立長崎商業学校創立旨

我邦今日ノ商業ハ往年鎖国時代ノ方法ニ馴致シ眼界ノ窄小ナル方

法ノ迂疎ナル依然旧態ヲ革メス焉ノ敏捷練達ノ外商ト相拮抗スルニ足ランヤ、京浜阪神各地ニ於テハ夙ニ此ニ注意シ商業学校ヲ設置シ盛ニ商家ノ子弟ヲ陶冶セリ、我長崎ノ地タル本邦五港ノ一ニシテ貿易ノ枢区ニ位ス、而シテ未タ此校ノ設ケナキハ実ニ一大欠典ト謂フヘシ、今ニ於テ此校ヲ興サスハ通商ノ途途ヨ開ケス、商家ノ困憊益々甚シカラントス、故ニ商業学校ノ設立ヲ企ツルハ本港人民ノ応ニ勉ムヘキ急務タリ、然ト虽モ目下民力疲弊費途多端ノ時ニ際シ俄ニ之ヲ設立スル亦容易ノ事ニ非ス、於是石田長崎県令閣下之ヲ貿易商ニ諮ラレ、貿易積立五厘金ノ内ヲ以テ第一期三ヶ年々々金二千四百円、第二期三ヶ年々々金千二百円ヲ補助セラル、トトナリ、親ク我輩ヲ召換セラレ創立委員トシテ斡旋スヘキノ懇命アリ、我輩亦該校設立ノ志ヲ懷クヤ尚シ今ヤ幸ニ此懇命アルニ逢フ、蓋シ時機ノ初テ熟スルモノナリ、我輩奮テ該校創立ニ尽力シ寄附金ヲ募リテ創立費ニ充テ以テ長崎区ノ公立トシ本年九月一日ヲ期シテ該校ヲ開カント欲ス、仰キ願クハ有志諸君大ニ此舉ヲ贊助セラレ庶分ノ金員ヲ義捐シ共ニ与本港ノ繁栄ヲ永遠ニ企図セラレンコトヲ敢テ白ス

明治十八年八月

長崎商業学校創立委員

松田源五郎

中村藤十郎

三原慶三郎

黒川勘四郎

笹屋仁三次

加悦 章平
江崎左右平
岩田 清秋
安中半三郎
品川九十九
長崎西浜町
寄附金預所 第十八国立銀行
御寄附金員受取証ハ国立銀行ヨ
差出可申候

今般有志家ニ寄附ヲ仰ク入費高ハ左之通

一金千二百円 創立方營膳費等

但今度敷地買入タル所へ古建家有之分ヲ追テ新築マテ營膳スル費用凡三百円、教員旅費学校備付物品同書籍類代、開業式費等一切入費

一金二千二百円 学校敷地購代

但大村町十一番地元伝馬屋敷、当時新聞社ノ地所建物代トモ地坪ハ五百坪余

メ三千四百円 是ヲ創立委員ニテ今般寄附ヲ仰ク高

[40]

(三井物産会社野紙)

三井物産会社上海支店「内状」(田中)

番外 第十二月二十日

上田安三郎様

松本常磐(印)

御内翰拜見仕候、陳は小生より甚々疎音ニ打過恐縮罷在候得ども先以益御壮榮欣抃此事ニ御座候、随而小生亦不相変瓦全送光罷在候間御放慮被成下度候、就而積立金一条ニ付御細書之旨拝承、此義ニ就而ハ益田殿にも御見込可有之様子故、定めし内状ヲ以御指示可申上推考罷在候得共、経費等ニ而多少共益金相生候義は本社并支店共ニ同例も可有之義ニ御座候間、無論損益勘定ニ入記致候而差支有之間敷候得共、又建築費等之用意ニ積立金之義も至極堅固ナル御明案ニ有之候、乍併不動産等ヲ購求致候迎強チ損金ト可見做物ニモ無之候事故皆々積立金ヲ以購求不致共宜カルベキ事ニ推考罷在候、右□就而毎年積立金を増殖スルヨリハ其内幾分宛カ毎年之損益勘定江入記仕候而差支無之事ニ推考罷在候間篤と御勘考被下度候

右用事而已申上候、早々頓首

[41]

上海香港支店詰社員等給表

手代一等四十円	福原栄太郎
同 式等三十円	小室 三吉
同 式等廿五円	益田 英作
同 三等十五円	○田中 寿雄
三十円	
二等式十円	

同 式十円

副島儀太郎

同 式十円

長谷部信義

同 式十円

○福井菊三郎

同 十五円

大野市太郎

同 十五円

高木鉄太郎

同 十二円半

岡田 玄良

同 十二円半

林 昌雄

同 十二円半

藤瀬政次郎

同 十円

小林 雄志

同 十円

遠藤々次郎

同 十円

自賄三十円

同 十円

佐々木祐司

同 十円

高柳豊三郎

同 十円

池田 広次

同 十円

支配人 上田安三郎

右之通見込ミ頂上ニ記シ上申仕候也

明治十九年十二月三十一日

東京本社元方

御中

外ニ支店限雇

〔朱書〕

〔明治廿年四月ヨリ三十円ヲ改メ
月給式十五円ニ賄料十五円トス〕

〔42〕

号外 廿年二月三日

〔三井物産会社野紙、益田孝筆〕

上田安三郎殿

元方

貴所ヲ元締役ノ辭令ハ此ニ封入いたし候間御落手可被成候、此度貴処松岡も元締役ニ、又宮本新右衛門も同様ニ相成申候、就而口頭ヲ以申述候事有之、既ニ兩人江は篤と申述候へ共他事ニ無之、前元締役兩人ニは慰勞金とし而会社純益金之歩合ヲ乍少く給与致し有之候、然ルニ此歩合給与ハ元締役何人有之候而も兩人ニ限り、余は其年ニ他社員江給与候慰勞金より給与之事ニ評決相成候故ニ、兩人ノ内欠員出来候時ハ外元締役中より一人ハ組込候事ニ有之候

權利榮譽に付而別ニ相變り候事無之、即チ会社之重役ニし而重キニ任し要地ヲ占メ而会社之為メ特ニ努力致すへき訳ニ有之候へは、別し而慰勞金等ニ差違有之訳も無之候へ共、歩合慰勞金ハ元締役と申役目ニ相付キ候ものニ無之、拜司永造、馬越恭平兩人ハ前以元締役ニ命しられ、其後歩合慰勞ヲ取極メ候事ニ有之候、然ルニ皆いつれも此歩合慰勞といたし候而ハ会社も限り無キ訳と相成候ヲ以断然其筋ニ於而も制限ノ論ヲ主張いたし候間、左様取極り候事ニ御座候、尤慰勞金通常支給ニ於而重役丈ケ他社員と差違有之ハ勿論、尚特別賞与も被受候ものニ無御座候、右等御承知有之ケ候ものハ特別賞与も被受候ものニ無御座候、右等御承知有之度、尚格別御尽力希望致候、早々以

(欄外上部横向書)

「拜司死去金子此内江組入候事ニ御座候」

[43]

四月十五日

上海支店

上田安三郎様

東京本社

松本常磐(印)

(三井物産会社野紙)

四月一日発輪難有拜見仕候処、益御壯寧欣拵仕候、次ニ迂生亦無事罷在候間乍憚御放神被下度、陳は十七年十二月申賃金帳合相成候洋銀千弗之義、追々御入金相成り十九年慰勞金之半額并此度貴方勘定掛より報告相成候五拾弗を以皆済相成候間、別紙証書御返戻申上候御受取被下度、尚又御尋問之特別賞与之義は規則も有之候通り第二回御下賜相成候上□第一回ハ現金ニ而可相成事ニ御座候間別段借用金等無之候ハ、第一回ハ無論御受取相成候而差支無之義ニ承知罷在候、右御返事而已申上候、早々頓首
尚々洋銀千弗ハ其頃之為換相場にて千百円と帳合相成居候得ども、差金ハ相場交換違之損金として帳合仕置間御安神被下度
候事□

(印紙五枚)
計三錢

借用証

一洋銀壹千弗也

右者必用ニ付正ニ借用仕候、来明治十八年十二月迄ニ無相違返納可仕候、借用依テ如件

明治十七年十二月三十一日
三井物産会社元方

御中

上田安三郎(印)

(※全面を×と「済」で消しあり)

[44]

(第二十国立銀行便牒)

番外

函神間郵船長門丸便

爾後永クノ間御無音ニ打過キ、貴兄ニ於テも定メテ頼ミ甲斐ナキ友人ト御思召被下候ト、深ク慚愧ニ堪ヘ不候、何卒心事御推察被成下不惡御承引被成下度候

貴地ヲ通り居ル郵船ノ人ニ時々聞ク所ニ由レバ、貴兄ハ益御壮栄之由所賀ニ御座候、拙家も小生初メ家内一同も何之恙も無之相暮ラシ居リ申候ニ付乍憚御放念被成下度候

扱薩ノ丸船長又ハ松本杯よりも御聞及ヒ被下候哉小生も幸ニシテ負担シ来レル当銀行業ハ年々着々拡張シ来ルヲ得、利益も資本金ニ対シテハ常ニ貳割余ニ上ルヲ得、貸金延滞等ハ誠ニ少々ノ一ニテ、是も全ク死セリニモ□ハス、且又今年ヨリ弥小樽ニ支店ヲ張り、又根室ニも試シ營業ノ為メ出張員ヲ派出セシメ、之カ終始ハ小生自ラ出張シテ管理ノ責ニ当ルヲ御座候、太々誇言ニ亘リ候様ニ御座候得共、先ツ当地ニテノ我營業ノ基本ハ稍々固マリタルものト称シ候而も宜キ欵ト相考居候、右ノ如ク函館ヲ中央トシテ小樽根室ニ羽翼店ヲ設ケ、三所鼎立シテ北海道ノ商業ニ関与ス

ルヲ得候ニ至リシハ小生ノ素志ナル幽居事トハ事相変リ候得共、間接ニ本道ノ為ニ尽スコヲ得候訳ニ付心中決シテ不平ナルハ無之候、尤も之ヲ貴地杯ノ商業盛大ナルものニ比スレバ、拙も比較之位地ニ立ツコハ能ハサル所ナレバ、先以テ此ニ至リ候ヲ得タル丈ケハ貴兄ニ於テも御安心被成下候様仕度候

一 小生一身ノ狀況ニ至リ而は猶上海ニアルノ日ト異ナルヲナク性ノ疎放ナル行ノ□癖ナル如何トモ矯正難致、不相変一錢ナシノ上ニ更ニ幾分カ負財ヲ増スノ傾向ニ御座候、併シ小生ノ為メニハ大ニ尽力シ呉候地方ノ益友も出来候ニ付、為ニ便宜ヲ得候ト不少、云ハハ苦シナガラも少シク楽ニ相成候方ニ御座候、付而は一日モ早く又其幾部分ニ而も兄よりノ恩借ニ返納致度キ念ハ曾テ胸裏ヲ去リ不申、当年ハ如何シテも強メテ三分ノ一位ヲ返納仕度キ覚悟ニ御座候、而シテ来年ハ必ラス其全額ヲ完納致度キ精神ニ御座候、付而は太々御手数ニ御座候得共曾テ差入レ置候証書ノ写ヲ御郵送被成下度右扣ヘハ取置候得共何レヘカ仕舞失候欵見当リ不申候、何レ當年御入金致候分も小生根室地方ヨリ戻リテ後即チ十二月ノ交ニ相成可申と奉存候、尤都合ニ由リテハ出来得ベキ丈ケ夫レケ多額ヲ差入レ候トニ可仕候、此言ヲ實施致候上ハ貴兄ニ於テも小生ノ賜ハ未タ腐靡セサルヲ御証シ被下度候、只々今日ニ至リ候而も猶未タ之ヲ消除シ得サリシハ生ノ実ニ堪ヘサル所ニシテ兄ノ厚情ハ決シテ消磨シ能ハサル所ニ御座候

一 當時ノ旧交ハ今四散致候得共其当地ニアル人ハ御社支店ノ高橋清吾氏ナリ、又紀伊丸船長河岡氏時々来港、氏来ル時ハ不相交賜

氣ニ時ヲ送り申候、岐易号ニ在リシ朝香ト申ス人ハ当地之税関ニ在勤スレテ稀レニ倶楽部ニテ相見ル位ノ一ニ御座候、只前トセルハ過日上京ノ節横浜ニテ大病後已ニ死セリト思考セシおかく(赤壁)ニ七年振りニテ面会致候一ニ御座候

一岡正康氏ハ終ニ長逝セシ由、実ニ氣ノ毒ナル一ニ御座候、聊カナカラ森田氏ニ托シ差出置候ニ付可然御取計被成下度候

一本道ハ商業上殊ニ貴地ト關係不少ル処ニ御座候処、此よりハ追々当方ヨリも申上候一ニ可仕候得共、御地ノ状況も御報シ被下度候、將又貴地へ荷為替ヲ開キ度キ考も有之候処、於貴地ニ受入レタル金ハ能キ出合ノ為替ニテ東京ニ送り返スノ便有之候哉、貴地ト横浜間ノ並為替打歩ハ何程位ナル哉、御知ラセ被下度候、又貴店ニテ御受入レ被下候哉も御洩シ被下度候

上海

右要件旁如此ニ御座候、頓首

函館ニテ(印文「江南」)
哲夫拜(印)

上田盤台机下

(日付欄)「明治二十年五月廿七日」

(欄外)「尚々過日來於札幌□□会社設立ノ挙アリテ、資本金八拾万円ニシテ六年間年五朱ノ保証利ヲ政府より附セラ、目下株金募集中ナル故百株(百円株)ばかり申入候積ニ御座候、追テ御入用ナレバ御分チ可申候」

(欄外受付印)「MITSUI BUSSAN KAISHA, SHANG-

HAI,7-JUN87」

[45]

第九月五日

上海支店

上田安三郎様

東京本社

松本常盤

(三井物産会社野紙)

残暑亦難堪御座候得ども、先以益御壮勇拵在之至ニ御座候、次ニ小生事六月十九日北海道支店江出張去月廿四日無滞帰京仕候間不在中ハ彼是御配慮を煩事と推察罷在候、小生出張之場処ハ函館小樽両支店、岩尾登小樽ヨリ凡ソ、島登根室ヨリ汽船ニ而、兩硫黄山并ニエトロフ島根室ノ漁場ナリ江出張、帛路南都ノ宇曾利山、一ノ関ノ剣山荒湯等ノ硫黄山江出張致候処、礦業ハ実ニ容易ナラザルモノニシテ先ツ算磐玉ニ相掛候ハ岩尾登硫黄山而已、其外ハ但し困難と申候外無之御推察被下度候、尚又本年ハ鯨魚不漁ニシテ随分種々ナル困難も有之候、尚又小生も聊カ見聞之儘元方江報告仕候処、岩鼻氏を以函館支店副支配人拜命、來ル八日出発致候事ニ取極り相成候間、当社ノ為メ大ニ仕合ナル事ニ推考罷在候

右ハ無事着而已乍延引御報告申上候、早々頓首

[46]

(野紙、墨書)

謹啓時下秋暑未消之処益御盛栄国利弥盛大ニ至り御多祥御壯勤之

段迄ニ奉感詠候、然、豚児永寿事今般貴局へ参上之処、特別之御恩特相蒙り、本月一日内方書記等御下命ニ相成り同名ノ詳報ヲ接シ何トモ感激之次第筆紙難尽感誦不斜奉存候、貴君ハ曾而御年少之折素既等致し候由之処、其後打絶両途異方ニ今日有之義承及候へハ數年如昨日相覚へ故旧之義不御取捨豚児御研嶮被下等幾久感佩致し候、尚此上御翼助奉禱候、拙者今少し勉強致し候ハ、諸方遊歴等致度心得ニ候間御地南北一過拝接上□深々御盛誼奉謝度奉存候、貴君が御大人ハ現今何処ニ御安在ニ候也、御序拝承致度候、先ハ先年之御熟意以而冀文ヲ呈シ御高誼御礼申上度、如斯余讓再鴻、恐惶謹言

九月十日

吳來安

〔大阪東区南新町二丁目二番地〕

上田安三郎殿

〔47〕

内状 廿年十二月十九日

東京

上田安三郎殿

益田 孝

(三井物産会社野紙)

英作前便ニ而差出申候、暫時之滞留ながら御面話被下候事と存候
田中孝輔お帰へし被下度旨電信致し御承知被下候事と存候
田中寿雄、福井菊三郎兩人昇等は御請求ハ無之候哉、貴兄不在中代理も為致候事ニ相成候ハ、一等手段といはし差支無之候、福原

之手伝とは申もの之無人之処ニハ有之、追々責任も重ク為心得度と存候、英作ハ一等手段ニ昇級相成候、又小室義も倫敦江遣し候時ハ右様取斗可申内評ニ相成居申候、是等御舎之為メ申出候、外二月給ヲ揚ケ候人、御見込御申越可被下候

福原ハ如何、又英作之手当もいづれ御申越ニ從ひ取極メ候積リニ而其儘ニいたし出立為致申候、是又御見込早々御申出可被下候

一材木之義ハ積残リ之分余程談判御面倒と被察申候、十五日出之御状ニ抛レハ、三月十日頃クタンへ着荷為致不申而は、尔後相調ひ不申様御申越ニ而有之候へ共、秋田新瀉ハ大丈夫之処ハ五月ニ入ラサレハ汽船ノ船積六ヶ敷、到底積出し不相成候間如何とも致方無之、小樽ハ四月ニも無理ニ積メヌと申スニは無之候へ共、御滞京中御聞之通り十一月已前ナレハ人足ノ懸ケツナギも出来いたし候間何と坎工夫も相付候事ニ候へ共、今となり而は如何とも人手も無之候、到底是又六ヶ敷事ニ付所詮五月以降ニ無之而ハ積出し難相成段申進候処、残木までも左様なる坎との御尋ニ而從元左様なりと一言之返事ニ事足り候へ共、尚為念何と坎函館の方ニ而多少之損失ハ厭ハス出来ルものなれば出来候様いたし度懸合中に付、夫等ノ為メ最終之御答も延引いたし居候、実ニ非常之難物故如何とも引受ケたるガ悪しかりしと觀念之外無之候

一越後、秋田之方も、もし御地之約定渡し後レ之分ハ不受取と申明文有之よしニ而、アト伐り出しも見合ハせ居候次第、御地之談判結局次第ニ而手当も有之候間、最終之返事差出候ハ、いづれと坎先方へ投ケ出し、残不渡し之分御決定御申越し可被下候、一日も

早く相願度事ニ御座候、御地之地位ニ立而ハ苦しさは御察及候へ共、北国之港ニ至り而ハ如何とも致方無之、夫カ為約定ノ表より如何様之場合ニ立至り而も遺憾無之、後事ヲ注意スルまでニ御座候、中々北国引当ニ外国之商売ハ甚タ難候

一コトトンジン之事渋沢ニ聞合候処、書面ハ差出候積リニ候へ共、居留地なれば、或ハ許可も可有之候へ共、居留地外たる海軍省之地所之分ニ至り而は尚更六ヶ敷、所詮其辺ニ而ハ六ヶ敷かるべしと承り及、甚当惑いたし居候趣ニ渋沢氏ハ申居候、御地ニ而道台辺見込如何、品川氏地処ニ打立候而は如何、尚碇と当方丈ケニ而取調へ申度候

油種ヲ日本へ輸入セサル以上ハ矢張貴地へ立ルより外致方無之候、倫敦ニ而ハ買付候事と存候間、可相成御尽力可被下候、もし誠ニ行届カサル事ニ候ハ、無余議倫敦ニ而外注文へなり少々損ヲ為して売付ルより外無之候、御考案御申越可被下候
右之段申進候、頓首

尚々倫敦より山辺へ托し候鎖りハ届キ候哉

[48]

明治廿年十二月廿九日 横浜丸便

東京ニ而

宮本新右衛門様

本年も弥々以て押詰り御多忙奉拝察候

上海

上田安三郎

扱も此度伝承仕候へは貴家ニは本月十九日朝御類焼ニ御逢ヒ被成候由、再度之御難義実ニ御迷惑奉察上候、乍併焼ケタリトカ申して此後之御繁栄充分ニ可期の事ト奉賀候、御家族御一同御無事ニ而大慶此事ニ奉存候、旧銅貨は御尽力ニ抛り本年当店も大ヒニ仕合セ致申候、尚来年も追々盛大ニ御送り相成候様ニ御配意万々御願申上候

天保銭之事は前便計算書ヲ添へテ申出置候間御承知被下候事と奉存候

右は元方之御状ニ因れば改鑄の上ニテ御送可相成御見込之由ニ拝察仕候、然る時は尚更売場も振り直段も割合よろしく売れ可申被存候、何も只今之好機会を不失取扱申度奉存候間、見本として三個斗り改鑄の分早々御送り被下度奉存候、積出し地の手取り今日之処ニ而は百斤ニ付拾七八円位ニは相当り可申ト奉存候
余情は尚年明ケテ追々可得御意、先以愛度祈上候、早々頓首

[49]

明治廿年十二月廿九日 横浜丸便

東京ニ而

田中孝輔様

貴兄御帰朝ニ付本社之辞令書爰ニ封送候間御落手可被下候

御出帆後海上御無事ニ而口の津御着ト奉存候、同所并ニ長崎之御

用は都合克相済々速に御上京出来候哉、御状は東京ニ差出し申候、

上海

上田安三郎

御出立前ニ呉々御話し申置候通り神戸の開店は三池石炭売捌の筋よりして実ニ一日モ早キヲ要シ候大切之事ニ候へ共、社長ヲ始め元方非常ニ繁務の爲ニ其着手或は延引可致ト夫而已懸念ニ被存候間、貴兄之此度御出京ヲ機トシ直チニ其事ニ着手相成候様ニ御仕向ケヲ只管奉希望候、而シテ太体の事柄は貴下一旦神戸ニ御出張の上書面ニ而本社の差図ヲ受クル様ニ致し候方却而其運ヒ宜敷可有之奉存候間是又御含ままでニ申添候、神戸出店は小生熱心之義ニ而常ニ其成立ヲ承り度案ミ居り候間定メテ御多忙中御手数數ニは奉存候へ共時々其模様御報道被下度伏而願上置候
本年も弥々押詰り来り候、余情は来陽追々可得御意先々目出度御迎年所祈候、早々頓首

[50]

明治廿年十二月廿九日 横浜丸便

東京ニ而

松本常盤様

上海

上田安三郎

本月十九日附御状難有拝受、貴下ニは去ル九日御無事御帰京相成候由奉賀候、小生等は去十二日ニ無事帰任仕候間御安慮可被下候此程阪神ニ而は御互同親敷述懐の時ヲ得、誠ニ愉快ニ存し候、御帰京後は早々貴下乃御意見等御申出相成候由承り大慶此事、只々内は本社の基礎ヲ固フシ、外は益々商売繁栄を望の外日夜他意無之候

上海香港両支店本年下半年純益金高唯今頻リニ取調中ニ御座候間、年内ニは是非御報致す事ニ可仕、凡ソ両店ニ而貳万円は出来可申の見込ミニ御座候、送金之義ハ追々取計ヒ候間、順次御入手被下候事と奉存候
英作氏ニは当地ニ被立寄暫時面会、貴地の近況承り候、田孝氏ニは最早着京致され御面会ト奉存候、小室氏モ来月早々香港出立帰京可致申、当地方の事御聞取可被下候
宮本氏又々類焼とは実ニ氣之毒ニ奉存候、併シ焼ケブトリとか申て一は目出度ト可賀候、本年最早余日無之先は目出度御迎年被成度祈上候、右御答まで申上度、早々頓首

[51]

先便ニ而一書差出し当地ニ而此度迄は碑文彫刻ニ及ヒ不申義を申進置候処、或は近日右碑文出来候哉とも被存候間、掘刻の道具等は太体御用意ニ而御渡来被下度奉存候、先ハ此段申入度如此ニ御座候、早々以上

二十年十二月三十一日

上田安三郎

長崎ニ而

窪田豊太郎殿

[52]

拜啓仕候、本年モ弥々押詰り御繁多之程奉察入候、扱本月十九日出御状去ル廿六日ニ相達シ拜見、故岡朴翁之碑文写シ御送り被下御手数奉深謝候、右は故正康氏の建碑ニ付誠ニ必要ニ而仕合セ仕候、石碑の義も此程長崎ニ而相拵へ最早兩三日中ニは当地ニ到着可致事ニ相成り居り候、何れ開限の上は万事貴家まで御報道可仕、又写真も此中出来候間是又差出し可申心得ニ御座候、万事当方ハ不都合なく取計候間御安心被下度御老母江亘敷御伝言被下度奉願入候

兼而御委託之額面売却済之事ニ付テハ前便ヲ以悉細店方ヨ得御意候間、亘敷御承知被下候事と奉存候

先は右御答旁申上度、余情は来年緩々御文通可申上奉存候、早々頓首

廿年十二月卅一日

上海上田安三郎

西京 岡村五兵衛様

貴下

[53]

拜啓仕候、本年モ弥々押詰り御繁忙之程奉察入候、扱爰ニ御相談申上度老条は念息太郎氏の事ニ而、最初頼朝丸ニ乗組後ニ秀吉丸ニ移リ是迄段々兩船長ともに同人の事ニ付心配致し呉れ候処、如何せん本人の処行甚た宜シカラズ各港ニ到ル毎ニ船長ニ無断ニ而上陸シ、或は窃ニ水夫等を誘導シテ悪所ニ遊行、為ニ本船の事務

ニ差支を生し候等の事数度ニ及ヒ、船長ヨ段々教戒候も更ニ其効無之、右ニ付何トカ本人の為ニ可然処置モガナト頼朝丸船長とも懇々相談ニ及ヒ候へ共、今は只老人ヲ厭フ為ニ船中一艘ニ妨ケヲ生し候義ニ付船長等も乗船為致候事を好ミ不申、且ツ実は頼朝丸船長は同人の為ニ洋銀四拾余弗ヲ仕払ヒ、秀吉丸船長も亦た貳拾余弗ヲ弁償致居候始末ニ而、彼等モ実は迷惑致居り候、先度長崎ニ而無断上陸の儘時刻ニ帰船無之ニ付船は其儘ニ出帆し此程口の津ニ被參候申ニ付頼朝丸便ニ而当地ニ被參候様ニト山本条太郎ヨ頻リニ勸め候も承知なく、彼地ニ滞在頼朝丸は再ヒ本日当地ニ入船之筈ニ候間、此度は乗船相成候哉ト心待致し居り候、当地ニ參ラレ候ハ、尚小生ヨ充分意見致、一時之処置は取計ヒ置キ可申も此後ハ先日御相談仕候如く可然宣教師乃手許ニ附シテ非常之教戒ヲ加へ候事、小生は専ラ本人の為ニ希望仕候、斯く申出候も甚た心外千万ニ而貴下の御胸中深ク拝察何共御氣の毒千万ニ奉存候へ共、不申出シテ打捨置キ候而は弥々以本人の不為ニモ御座候間有之儘ニ申上御賢慮相同度奉存候

先は右申上度まで如此ニ御座候、早々頓首

廿年十二月三十日

上海 上田安三郎

東京ニ而

古谷竜三様

貴下

[54]

謹啓、本年も押詰り弥々余日無之御繁務之程奉拝察候、此程は久振ニ神戸ニ而拝顔を得、種々御高話ヲ拜聴愉快ニ存し申候、其後御無事御帰京不相変御壮栄ト奉遙賀候、私義モ本月十二日当地ニ帰任、其後彼是多忙ニ紛れ御無音申上候、兼而御添意を蒙り候処の在芝罘林昌雄義も不相変同地ニ而勉強罷在り候間、御安慮被下度、焦炭は来月中ニは出来可申ニ付差送候事ニ用意罷在候、石炭ハ私し帰店後代価四兩迄引下ケ申遣し候へとも、先方は三兩半位ニ申居り未だ相談出来不申、丁銅も阪神地方格別の高直ニ而、加ルニ品物少く約定出来兼、誠ニ残念ニ存し居り候、島田衆太郎氏の事は長崎ニ而呉老大人ニ拝顔シ、後日の事御約束申上置候間、何卒御放慮被下度奉存候」指輪壹個紙包トシ今便拜送、兜町本店より御届ケ可仕候ニ付御落手被下度、是は出来意外延引致し申訳無御座候」先般小生之号ヲ碩甫ト賜り御厚志万々難有爰ニ尚御無心申上たきは右ニ対シ何か其意ヲ以テ一筆御揮毫被下候ハ、拝受の号ト共ニ永ク閣下の賜として保存仕度、伏而御所望申上候」当地モ冬枯ニ而至而静穩を極め居候、別而我邦人ニは役者至而少シク面白キ芝居モ出来不申、舞台寂寥タル有様ニ御座候、尤モ例ニ因リテ明晩は吉島客棧ニテ忘年会の催シモアリ、新年三日ニは弊店ニテ宴会ヲ設ケ候筈也、高原新領事君御夫婦并ニ伊東副領事ニハ本月十九日ニ御安着ニ而領事館は賑はしく相成り申候、長崎松野モ存外病性面白カラズ心痛罷在候」本年は最早此便ヲ以テ出船ノ終局ト相成候間、尚来年追々可奉得御意、先以テ日日出度御迎年

奉折候

右御左右相伺度旁如此ニ御座候、頓首

廿年十二月三十日

上海 上田安三郎

東京ニテ

松延 弦様 閣下

尚々令聞江亘敷申上候様ニト判妻ヲ申出候儘御伝言被下度奉願候也

[55]

明治廿年十二月三十一日 横浜丸便

大阪ニ而

上海

谷口黙次様

上田安三郎

益御清栄光以奉賀候、本年モ弥押詰り御繁忙之程奉察入候、扱モ松野直之助事当時長崎ニ而療養中ニ御座候処、何分病情面白カラズ甚た苦慮罷居候、今ハ偏ニ吉雄先生の御尽力ヲ仰キ只々氣永ニ加養為致候外無之ト奉存候、就而は当地修文館事業之義小生不及ナガラ平三郎子ヲ助ケ時々愚存も申出居候、然ルニ平三郎子菅人ニテハ實際事務行届キ兼候情体ニ見受ラレ候間、誰れか相当の人を手助ケニ相附ケ申度と小生は相考申候、就而熟考仕候へは此程貴地ニ而拝眉を得候折ニ古賀貞次郎氏の事御話シ有之候間、同人

[57] (上海三井物産会社支店野紙、墨書)
 明治廿年十二月廿九日 仏郵船便

東京

上海

益田 孝棟

上田安三郎

一摺附木之取調書別紙差出候間、御一覽被下候上ニ而其筋江御上申願敷奉存候、見本ハ苧種ツ、横浜丸便ニ而差送候間御落手被下度、後日幸便モ候ハ、丸箱分は大苧箱差送可申、当方今日の景氣は上海如キ盛ナル土地ニ而は凡ソスウイデン製の丸箱の方多ク需用有之、天津漢口如キ辺鄙の地方ニ而はウイヤナ製の丸箱の方多ク需用有之、兩種共ニ最モ売行キ宜敷候、尚摺附木の事ニは常ニ注意罷在リ何なり御算考ニ可相成存し候義は此後追々上申可仕奉存候、摺附木は支那地方而已ニ限ラズマニラ、フイリピン島及ヒ濠州ニモ捌ケ申べく被考候間、弥々決意を確められ候様に奉存候、偏ニ御工夫被下度奉存候

一敷木之事ニ付而は不相変御配慮ヲ蒙リ難有奉存候、天津の方はヤットの事ニて出来る丈ケヲ三月中ニ渡シ、残りは四月に渡す事ニ懇願致し候間、少シク安心仕候、物数は昨年ノ残ト新注文ヲ合セテ四万本入用之事ニ有之、種類は栗の約定に對シ而は栗ヲ渡すニ先方は差支無之モ、実は桧椽櫓等の木質余程先方ニ而好み居り候間、栗ニ代ヘテ北海道木ヲ渡すとも少シモ差支無之、先方は却而尅ヒ可申、此事已ニ内意も相尋ね置キ候義ニ而万々故障無之候

間、何れとも宜敷御工夫被下可成一日モ早く御積出シ被下候義備ニ願上候、大倉組ニ而は何処ヲ積出し候欵来年三月十日渡ニ而更ニ栗式万本程ヲ此程約定取極め候由ニ御座候

一コットンジンの事ニ付而は未だ当地道台より確タル返答無之ためニ、直接北京総理衙門江照会スル訳ニモ行カス領事館ニ而も頻リニ心配中ニ御座候、右の次第に御座候間私よりは中途ガ李仲堂ニ書面差出し内意ヲ承る事ニ致す積リニて、只々開河の時節を相待居り候、鉄の家は已ニ近日着する筈ニ而書類は相達し候、器械は当地ガ電信次第ニ倫敦ヲ積出し候筈ニ相成り居り候

大坂紡績会社より中山繁松氏は廿六日に当地ニ被着申候、是又右の仕合ニ候間今日ニ而は如何とも無致方模様ニ御座候、決而断念スル程ニモ至り不申、去りとして急ニ運ひも相付キ不申候ニ困却仕候、全く今日の処ニ而は例の河村等が設ケントせし大阪洋行のためニ智恵無キ支那人ニ智恵附ケタル姿ニ而彼等は夫程見込ミアル仕事ナラ日本人ニサセズトモ支那人中ニ而取設ケ可然との意ニ而、道台等最モ清商を勧誘シテ工夫中ラシク御座候、併シ清商等而已ニテハ右等の事業迎モ実施は出来間敷、又々織布局の如ク中止ニ至り可申ト被存候

一天保は御改鑄ニ相成候ハ、却而売場所ハ広く、政府御懸念之筋も少シト奉存候、右は一定の形トナシ相当の荷印を打ツテ当社の名義ニ而売出し候方可然、先日造幣局長谷川氏ニ承り候処ニ而は天保は密鑄造高八百万円モ有之候由ニ候間、中々大高之商売ニ有之、是非改鑄の分ハ当社一手売捌引受候事御尽力願度奉存候

右御答旁申上度如此ニ御座候也

一英作氏ニは去廿五日午前十時無事香港御着之由、只今来信ニ御座候

一山延氏ニ御托時斗の鎖は正ニ拝受仕候

一尾張紡績会社の岡田令高氏仏郵船ニ而只今当地ニ被着、当店

ニ来訪相成明三十日午前再ヒ出帆帰朝被致申候

右申添度、早々頓首

[58]

明治廿年十二月廿九日 横浜丸便

東京

益田 孝棟

上海

上田安三郎

(上海三井物産会社支店野紙、墨書)

謹啓仕候、本年モ弥以押詰リ別而御多忙ト奉恐察候、陳は本月十九日附御内帖去廿六日ニ相達し難有拜見仕候、英作氏ニモ去ル十二日当地ニ無事着ニ而其夕刻直チニ香港ニ向ク出帆被致、廿六日ニは彼地ニ安着ニ相成候事ト奉存候、小室は多分来月早々香港出発帰朝致し可申、其帰路は多分当地ニモ立寄り、又長崎神戸大坂の商売も一ト通り見聞為致置候へは、倫敦江転任後の為ニも相成可申ト奉存候ニ付、左様致し候様に勧め遣し置候、此人は兼而も申上候通り温厚篤実ニシテ常ニ品行方正、人ニ深切ニシテ業務ニ綿密、從而得意之信用モ厚ク、実ニ社員中ニテモ多ク得難キ人

物ニ候間、斯ル人ヲコソ追々重ク御登用有之度只管奉希望候、御状ニ因れば既ニ右等手代席ニ昇等御申付之御内評ト承リ大慶罷在候、英作氏義も此度一等手代ニ御命シ相成リ候由拜承、是又相当の義ト大悦罷在候、同氏江御支給の月給金額は別紙ニ見込ミ申立候、田中寿雄義は私在京中ニモ願出置候通差向キ卷等手代席ニ御申付被下而後、追々番頭席ニモ御登用被下度御評議、伏而奉懇願候、福井菊三郎義は此度までは御増給被下候而已ニ而可然、同人義ハ未た年若ニモ候間追々昇等之義願出可申、副島長谷部の兩人も矢張り此度は御増給被成下可然、其他三等手代中ニテ昇等給増等願上候分是又宜敷御下命奉願候、尚此度特ニ願上度は福原栄太郎氏の事ニ而、同人は苟モ香港支店副支配人トノ其責任モ重ク且ツ是迄勤勉の効を以て此度番頭席ニ御取立被下候義は相叶ヒ申間敷哉、他ヲ例ト致シ候訳ニは無之候へども、同氏は入社の際よりして丁度渡辺岩下氏等ト履歷ヲ同フシ候様ニ奉存候間、若シ此度番頭席ニ御繰入被下候ハ、本人も極而甚ヒ可申、又今日執務の位置ガ申スモ相当ナル欵ト奉存候儘愛ニ意存不残上申仕候

右は都而別紙ニ見込ミ相認め封入候間、可然御評議被下度奉願上候

田中孝輔氏ニは来一月四日頃ニは着京被致可申ト奉存候、神戸開店の主意は私ガ充分ニ相伝へ候処、同人は至極得意ニ而新店開設之事は自ら任シ石炭商売ヲ拡張スルハ専ラ好ム所トシ、且ツ自身の信用をも復シ可申の機会トシ大ヒニ熱心ニ見受ラレ候間、私ニ於而も甚た愉快ニ存シ居候、此度同人上京仕候ハ、神戸店設置の

事ハ何分一日モ早ク御着手被下度奉希望候

実は倫敦ニモ已ニ電信致シ、神戸并横浜ニ於テ供給スベキ三池直段も報知致置たる仕合ニ御座候間、明日ニモ神戸ニ而積取ヲ望ム船王アレハ目的不都合を感シ可申候、且又横浜箱館の式ケ所モ神戸ニ垂ク要地ニ候へば、常ニ宍屯の石炭も無之とは難申述候間、何分の御工夫願度事ニ御座候
右申述度如此ニ御座候、謹言

[59]

第拾九号 廿一年三月念六

上田安三郎殿

東京本社

元方

(益田孝筆)

永々香港御出張御苦勞ニ御座候、此帖着頃□□帰店と存候
銅之義ハ如何ニモ天津及上海之御得意へ対し申訳無之次第ニ候へ共、古川市兵衛之銅ヲ専ら売方いたし居候高橋芳兵衛ハ此売約定ノ事は一切古川へ申出無之候而品物相渡不申故岩崎由二郎ニも当惑、如何ニも不都合之事而已申居候間遂ニ百万方策も方弁も尽キ果候間今日出訴いたし候、此公判ヲ以証拠とし而天津及上海之得意へ当方之申訳ケニいたし度、尤銅ハ四月より六月迄ニは天津之分に對し而ハ高橋より相渡スよし之書面も取り得候へ共天津機器局へ損害之償金ニ而も払不時ハ其責メニ任スヘシとの懸合ニ對し而ハ応し不申候間出訴いたし候事ニ御座候
笹尾が御買入被成候廿万斤之銅一条ニ付、証拠と而ハ面きもの御

遣し可被成旨申進候処、此度御不在中々送り越候書類ハ皆笹尾と約定若クハ支那商との約定書等而已ニ而笹尾自り肩書ニ岩崎由二郎代理と旁ニ認め有之候へ共岩崎より之委任状ハ有之候歟、若クハ岩崎より依頼状ニ而も有候歟、何歟岩崎之代人と認めル之証拠ハ無之合之処ニ而は岩崎も笹尾ヲ代人と認め不申候、出訴いたし候而も笹尾を相手ニスルより外岩崎を相手ニいたし候事も難相成、尤肩書ニも有之候間笹尾ヲ呼出し何と歟肩書ヲ責メ候ハ、偽りを認めたりとも難被申と存候へ共、今少々別ニ証拠ハ無之候哉有之候ハ、早々御遣し有之度候

一千早丸熊坂丸ハ兩艘とも石炭運送ニ借用いたし居候而は到底損失ニ而、船主ニも内地運送ニ用ヒ呉様依頼ニ付、無拠次第事務長へも御断り申候間千早丸も早々口ノ津へ御差向ケ、口ノ津ニ而石炭積込神戸若クハ東京へ参り候様御下命可被下候、東京及神戸いづれニ可致歟は前々口ノ津へ達し置キ可申候、又兩艘とも外国人ハ皆解傭いたし候間、雇入期限も有之候へ、為御知被下度、約定書ハ無之と存候へ共有之候ハ、御遣し被下度候

一香港江送り荷いたし度石炭ハ、金貨五円までを差直ニ申進置候、是非其内ニ而雇入相成候様祈望いたし候、必ス一艘ハ送り試いたし度存候

一貴処一応御出京之義申進候、是ハ強チ時斗而已ニ無之、三池石炭及運送之事等も、小林事務長在京中ニ而種々御相談もいたし度、旁幸と申進候事ニ候、御地永々御不在故容易御出京六ヶ敷とは存候へ共、石炭之為メニも余程緊要と存候、少數高ヲ制限候事も勢

ひ御申越之通りニ不致候而は難叶と存候へ共、貴所も可成ハ直接ニ御説明緊要と存候、尚帰店次第再応可申進候

右之段申進度、早々頓首

尚々造幣局銅之義夫々申立〇許可ヲ得候而近々積出し候事ニ相成処少々〇先前とは相違いたし、且ツ歩合も余程宜敷殆と九九とも可申もの之よし、第一僅カ壹万斤之銅ニ数通之電信ニ而売却候程ニも無之、全ク品も相違いたし候事電信ニも難証旁其儘ニ電信ハ相過候へ共、壹万斤ハ送り出し可申候、責メ而古川之方申分之分ニなりとも御用ヒ被成候欵若クハ更ニ御売却被成候欵兩用ノ内ニ御取斗可被成候、官ニ而ハ拾八両五匁ニ売却相成候へは満足ニ御座候也

[60]

(三井物産会社野紙)

此帖ハ写し取り置キ不申候

内帖 廿一年四月二日

上田安三郎殿

孝

永々香港御出張御苦勞之御事ニ御座候

扱此程内密電信いたし候通り三池炭山も弥公売相成候事ニ内閣ニ而内決いたし候而、近日新聞紙へ広告可相成筈ニ御座候、最下之代価ハ四百万円ニ而、百万円ハ今年中納メ、残り三百万円ハ十五ヶ年賦と申事ニ御座候、而而六月三十日迄ニ其上何程なりとも入札し而高札のものへ落札可相成事之よし、右之割合なれば到底五

百万円とも入札不致候而は我物と相成間敷哉ニ被存候(四百万円以下ハ売ラヌとの事なり)

今日本ニ而は岩崎弥之助老人と存候、尤肥前之人ニ而横浜之石炭屋等組合之両潤社と申ものも入札可致欵、兎ニ角十二ヶ年之夢も醒メ而一朝之煙と化し遺憾ヤル方無キハ申スまでも無之、別し而此重任ヲ担当し而十年一日之如ク精神一途ニ尽力セラレタル貴君ニ対し而ハ申シ様無之候へ共、如何とも致方も無之候、而而今更何様愚痴ヲ申シ而も其詮無之とは乍申、精々工夫もいたし居候へ共、第一ニ当社ニ於而も是ヲ買受ケ而継続スル欵之決心不致而は難相成、販売之手順等は能ク相調ひ内外之事明カニ了知致居候ものは当社之事故、此工夫を為サ、ルも残念ニ付折角本店之人々とも内話いたし居候、小林殿ニも本月末ニは帰途ニ被就候ニ付是非其已前当所ニ而貴君ニ御面会被成度申居られ候間、種々前文之事御相談いたす為メ尚今日御電信御出京ヲ促し申候、至急御出京待ち居申候、実ニ当社之為メニは甚敷變ニ御座候、いつれニも御面会之上至急ニ御相談申度存候

一銅は如何様いたし而も、所詮銅と申ものハ無之候、岩崎は高橋より買受居候へ共、高橋なるものは古川ニ通し無之、古川ハ清国前公使よりも外務省へ掛合ニ相成居候位ニ而、余儀無く少々も渡し居候様子、無抛当方にては急訴ヲ起し、遂ニ古川市兵衛ヲ法庭へ呼出し候までニ相成申候、福州之分も岩崎之保証アレハ笹尾よりハ少しは宜候、是又急訴ヲ起し可申候、外ニ品物有之候事ナレハ何程高値ニ而も買入差出し申度存候へ共、実ニ如何とも致方無之

次第ニ御座候

一時計之事ハ約定いたし、既ニ御地へ五千箇香港へ五千箇注文いたし申候、式万五千ニ而清国及朝鮮引受申候、朝鮮の方ハ長崎より人ヲ出し候積リニ御座候、当地ニ而売方手順ハ掛り之ものより委敷御報知可致候へ共、御地ニ而は尚可然御工夫見込御立可被下候、修復技師ハ此程参リ居候間日本職人三四名修業為致居候間、此内菅人差出し申候、当地ニ而は色々時計屋と早談、彼等へ為被度度試み候処、彼等承諾不致遂ニ直接ニ売却相始メ、却而大ニ都合ヲ得申候、此商売ハ大奮発し而手順能クいたし候へ、随分相応之利益ニ可相成候、是等之為メニも御越相成候へ、大ニ都合ニ御座候

一東京湾石炭坑之義ニ付詳細御申越拜承、是ハ兎も角も委敷探知いたし置申度、三池一条之事ニ付是非入札前ニ承知致度候間、老人誰カ早速ニ同地へ出張御申付被下度、福原欽英作欽兩人ノ内ニ可有之欵、小室も取急キ此便船ニ而御地へ参り、直様香港へ出張之事大阪出張先キ電信いたし置候

三池も技師老人差出し貰ひ度、兩人ニ而罷出候へ、大ニ弁利と存候、折角小林君とも相談中ニ御座候、勘定方老人田中中信二郎差出申候、如何様ニも藤瀬倫敦へ御遣し被成候事六ヶ敷候へ、たとへ田中ニ而も致方無之候間同人ニ倫敦へ出張御達し可被下候、倫敦よりハ至急差出し呉候様電報有之、何分打捨置き難く候、たとへ福井ハ御地ニ而御手元用事いたし居候而も、彼在店いたし居候間ハ少々手弱キ田中ニ而も弁用可相成、倫敦ハ是と異なり用事も

近頃ハ甚増加し而勘定方も手初メ之人ニ而は無覚束候間、是非藤瀬差遣し度精、御辛抱之上御繰合ハセ同人御遣し被成候様御取斗可被成候、誰しも倫敦へ参り候事ハ名譽とも存し居、後進者ニ先キヲ被越も快からすと存候間旁御決断藤瀬御遣し之事ニ被成、早々同人出帖いたし候様御取斗可被下候

右之義ハ厚く小生より申進候、余り御地ニ而此繰合ニ執拗動かさる事有之候ては自ら人間へ御地へ向かハさる様可相成、兎ニ角福井ニ兩勤御下命間ニ合候様御取斗可被下候
右之段申進度、早々頓首

[61]

廿一年五月廿四日

上田安三郎殿

東京

本社元方

(三井物産会社野紙、益田孝筆)

昨年より差起り居候敷木商売ハ当分御見合ハせ可被下、唯々能ハサルヲ責ムル而已ニし而清国へ対し而は失信ニ御座候、此敷木ハ伐出しと云ヒ運送と申しと而も日限りを立若クハ本数ヲ限り而約定ナシ能フヘキモノニ無之候、其故ハ申スまでも無之御聞之通り之積出し場処之悪敷と、又積出し場処(北海道之如キ)宜シケレハ今頃ニなり人夫ニ乏敷、又雪解ケ而は津出し六ヶ敷等、此様之面倒なる六ヶ敷商売ハ無之、加之式千本不足と而態々大船ヲ送ルコトハ難相成、千本余レリと而不用と相成候而は余程直段ニなりとも猶豫無之而は是等ノ損ヲ償ひ難く候、ケ様の品物ハ前便も申述

候通り10% more or less は容赦可致事当然となし、又期日も充分なる猶豫ヲ得而置キ不申而は六ヶ敷候、是等之事充分佐々木之腦裡ニ入ラサレハ只々困難ニ日を送ル之外無之候、大倉ニも此商売ニは苦難ヲ受ケシ而已ニ而閉口いたし候、殊ニ外之品物と違ひ内地ニ而も少數余分ノものを用意せは丸々価之無キものを持ツと等敷、実ニ始末ニ苦ミ候、旁是等ノ損ヲ補フニは今少し売価ニ利益ニ而も無之而は引受ニ難立候、昨年大倉等と競争せし処より佐々木之腦裡ハ偏に平身低頭し而売ルノ一方と相成居候、幸ノ此度大倉と内約いたし候ニ付而は至而充分之氣張りを出し、当方ニ運動ノ出来ル丈ケ之權利ヲ得サレハ引受ケハ御免可相願旨佐々木へ御申送り可被成候

御申越ニ付秀吉丸ハ繰合ハせ、如何様ともカキ集メ兩地ニ而積入レ送り可申、此數壹万千本程ナルヘシ、左スレハ昨年約定残り四万本ノ内尚千八百本若クハ貳千本ノ不足と可相成ニ付、此少數ハ如何とも可積送工夫無之候間免約ヲ受ル様いたし度候、又五月十日付之御状ニ而御申越數木六千本ハ約定被成候ヘ共、当方ノ難義御申立之上ニ先方ニ而も事情ヲ被容約定相成候様御申越ニ付而ハ、可相成ハ御解約可被下候、もし又解約も相成兼候ハ、当七月下旬ニ小樽より積出し可申、夫まで御猶豫被下度候、尤左様相成候ハ、昨年残高も其節同時ニ積入可申候

一唐景星注文之數木も、直チニ注文ヲ受レハ、七月下旬より八月下旬まで之内ニ小樽ヲ積出し得可申、注文ヲ受レハ可成丈ヶ前之分と同前ニ致し、頼朝丸遣し度と存候、直段ハ近くハ人夫相揚居候

間六十八匁原価ニ御座候、加ルニ秀吉丸存外積數少ク郵船会社ニ而ハ中々安ク積具不申候間、此度引受候ニは少クも七十匁以上と致度、秀吉丸ハ櫛ニ而ハ老万本と計算相立可被成候、此処ハ左様閉口せずと今一層意張り而当方之望みヲ申立、夫ニ而先方応不申時ハ断然約定ハ見合ハせ候様佐々木祐司へ充分ニ御申含メ可被下候右之段申進度、早々以上

(端受付印) 「MITSUI BUSSAN KAISHA, SHANGHAI.
1-JUN-88」 「壽雄」

[62]

明治廿一年六月十四日

在香港

上田安三郎様

上海

田中寿雄

拝呈仕候、爾後大兄ニは御容体如何被成候哉節角之御出張も不謀御病氣にて御病腦被為在候事と万々奉察候、爰許皆様ニは御安祥ニ御涉り被成、信一樣美穂様ニは毎日西童院へ昼迄御運ひ被成候間御放念可被遊候、大兄ニは随分御大切ニ御保養片時も速ニ御快復奉折候

一社長殿ニは先達而來咽喉カタルにて喉衝を起し、一時ハ熱度も撰氏四拾度ニ昇り、危篤とも可申程ニ被為在候処、幸ひ漸次御快復ニ被為向候間、懸念致す間しく様ニと木村殿々之来状ニ有之候、稍安心仕候、今日之便にて厚く御見舞申出置候、大兄御病氣之次

第柄も委敷申出置候

一 東京硝子会社仮事務所が端書郵便にて

豫而御引受之当会社株式御申込金、則一株ニ付金五円宛来ル六月十日迄ニ東京第一国立銀行、或ハ三井銀行之内へ御払込可被下候、此段得實意候也

但同行領収書ハ仮事務所ニ於て仮株券と交換可致候也 五月

三十日

右過ル十二日の横浜丸便にて到着致し候ニ付私ともハ大兄御引受之株敷と存念不申候ニ付本日之横浜丸にて、委細を本社江申出取計らひ貰ひ度心得ニ有之候処遂ニ失念仕候、然ルニ横浜丸出帆と同時に仏郵船にての来状着中該会社總會を開ク通知状、其他とも別紙之通四葉到着致候ニ付茲ニ加封し差出申候、株金御払込之事ハ次便本社へ大兄御不在中ニ付可然御取計らひ被下度義ヲ可申心得ニ有之候間、左様被思召可被下候

一 本社倉庫掛が仏便にて別紙之通申参り候間、本紙を茲ニ加封仕差出申候、倉庫掛りへハ次便書面受領致し候事丈ケの返事差出し可申候

一 秀吉丸之事社状ニ申上候間御領承可被下候、本日之横浜丸便にて、本社江ハ既ニ福州約定致し候柚の木三塊積合ハせ致有之候ニ付、天津荷揚濟之上福州へ一航為致候後内地も使用被下度、委敷本社へ申出置候

一 本社が精練銅ハ拾九兩、半製銅ハ拾八兩ニ売れとの電命ニ有之候得とも、昨今ハ本邦之直段も稍低落致し、当地ハ尤も不氣配にて

精練ハ拾八兩五匁と申居候、七匁五分なれば売却時と考へ居候、

半製ハ拾七兩五匁或ハ七匁五分と申候得とも、此半製ハ申上候通此程之着荷ハ悉皆慎裕号へ相渡し候ニ付、唯見本外無之候、特大兄御承知之通大形ハ不向ニ付、則大兄大坂造幣局へ御意見御申出之通りニ製造相成候ハ、今日之拾七兩五匁ハ或ハ拾八兩ニも望人可被頭ニもあるましく被存候、此事情ハ大坂且本社宮本殿へも申出置候

一 福州之方ハ慎裕号と善後局と破談出来そふニ有之候、出来たる上ハ四五百兩を賄路とし支払ふ事にて電信を以て呈送申遣し置候、併し善後局が慎裕号ニ破約の後慎裕号が故障不申出様ニ被行候事尤も緊要なりと念を推し置候、乍去当方より慎裕号へハ幾分欸涙銀を不遣てハ当社之名義且将来ニも不面白事と存し居候、然ルニ本社が之来状中古河銅裁判之件ハ和解ニ相成、昨今西村勝三氏仲裁ニ入りて心配中之よし申来り候、未タ右ヲ左ニ供給と申迄ニは不至との事ニ付、今便にて委細福州之模様等本社へ申出、出来る事なれハ多少ニ不拘一時も速ニ順次供給致候様ニ充分御取斗被下度申出置候

一 右之件ニ付我領事へ審理衙門が又候催促有之候、高平二口兩氏も氣を付呉候ニ付篤と情実申出置候、審理衙門江之廻答ハ暫く見合致し貰ひ候

一 秀吉丸も六日ニ長崎出帆致し候ニ付、本日当りニは天津着之頃と來電待居候「茲ニ佐々木が申越し候大倉組之事ニ付の書信写し加封し差上候間、御一覽可被下候、此事ハ既ニ佐々木へ委細ニ申通

し置候申合せと欲協義と欲申すも、大倉組引揚テ仕舞ふた以上ハ、飯合旗昌のブラオン氏エゼントを被致も、佐々木の別紙ニ述る如く我産のものニ付テハ容易ニ西洋人へ清政府ヲ相談もあるましく、又あるニ致しても彼洋人容易ニ行ひ可得事とも不被察候、然レハ自然当方ニ注文致す様ニ可相成ハ勢ひの然らしむる事と被存候、大坂組之井坂某ニ面会仕り程克答弁仕置候、井坂ハ漢口迄罷越し二週内ニ長崎を經テ東京へ歸るとの事ニ有之候、又同人申スニは当社へも井々木材類を送付致し度申居候、御含迄申上候

一 郵船会社構内ニは板材不絶相嵩ミ居候、又小船ニテ積出す事も不
少候

一時計之公告書類ハ廿日までニハ出来可致事ニ松野氏も勉強致し罷居候

一 右時計三打五グロス貴地江着致候よし、何卒出来る事なれハ御分配被下度奉願候、此事ハ別ニ小室氏江不申出候間大兄ヲ御指図可被下候

一 渋沢氏ヲ書状沓封、白尾ヲ沓封、福地より沓封、是ハ寿雄被封印候処、兼而大兄へ依頼之事件と被察候、被封印之義ハ御許し可被下候書余後便可申上候、頓首拝

機器局納式万五千斤ハ横浜丸ニテ長崎船移しニテ天津へ送付致し候也

[63]

(東京第一国立銀行便覧)

拜啓時下向暑之処益御清祥奉賀候、扱先達而御出京之節は乍例多忙ニ而失敬而已申上候段御寛恕可被下候、御帰任之途次大阪ニ而小金へ御面会も被下線綿事業ニ付御話有之候事情も伝承仕候、爾後紡績会社ニ於而重役種々協議を尽し候処、到底清国商人之名義を振りする事は危険ニ而、又洋商等と組合候儀も十分満足之事に無之ニ付上海ニ而就業之儀は断念致し、大阪本社之最近地ニ而計畫可致積ニ相決し候間、左様御了知被下度過日御話も御座候末ニ付此段一応御挨拶申上置候也

上田安三郎様

(印文「栄一」)
渋沢栄一(印)

[64]

(天津三井物産会社出張店野紙)

号外内信

明治二十一年六月廿二日

上海上田安三郎殿

天津佐々木祐司(印)

拜啓、暑氣之候益御清適可被為遊御勵務奉敬賀候、陳候者閣下香港地方へ御苦勞被遊殊ニ暑中御察申上候、承候所同地ニ於而御病氣之事上海ヲ報越、一時ハ驚候得共御加養印アリ追々御快方之模様と申事故先々大慶罷在候、此上無御油断御養生專一ト奉存候扱又開平唐景星氏注文木一件、此度東京ニ於而社長と大倉氏と懇話之相談整、且安直ニ而引合不申ニ付、敷木ヲ寸法短キモ一本天津銀五錢ヨリ約定出来不申由、上海ガ申参り甚当惑罷在候、開平の方ハ坑内之留木ニ用候義ニ而格外高直ニ而は買入難ヨシ、是レ

八年ニ六千本宛入用ゆへ尤好得意ト被考候、且別段手数料も無之ニ付約定代価ハ丸取ニ候間、右約定仕候而可然乎ニ被考候、依而玆過日上海へ申出候第三十七号信ハ再ヒ書被申候

概栓拂取交長七ヒート幅厚共七インチ角

天津銀四銀六分

此分四千本入用

全取交長六ヒート巾厚共七インチ角

天津銀四錢

此分式千本入用

合六千本 右一ケ年中入用之分

右高ニ而汽船一艘積不便ニ候へ、或ハ二ケ年入用分則前之割合之通長七ヒート八千本、長六ヒート四千本都合一万式千本丈輸送致候而も宜、又ハ一時ニ不都合ナル片ハ六千本を本年十月中、六千本ハ明年四五月中ニ而可然由申事ニ御座候、此注文ハ年々之事故可成安直ニ無之ハ、依然是迄通り支那木を用候欵、或ハ他ニ注文いたし候欵勿論売入不申、愈々引合不申訳ナラハ致方無之候得共東京之大倉組ト之約束を信じ直増之意見ニ而ハ到底人ニ被取可申憂有之、上海田中氏へ一応右之義御問合いたし候得共前件之次第を以御承諾難成よし返翰參、約定致兼当惑罷在候、御見込至急伺ヒ申度相侍上候

内々承ルニ北京鉄道ハ亦、明年設立之模様ナリ、右ニ付伍廷芳氏へも數木買入之事は願入候得共彼ハハ口外出来難、左右之挨拶も無之、乍去測量ニ取懸り盛土之相談有之候間、無疑事ト奉存候、就

而は此度二十万本ニ近キ數木ナル可ク被考候、何ソト欵是を不殘引受度者ニ候得共、左様味くハ被行間敷苦慮罷在候、万一數木代価借受を望む時ハ二ケ年或ハ三ケ年間五六分ノ安利を以貸与候ハ、不殘当社へ申付サルニも有之間敷哉ニ被考候、一手ニ引受候以上ハ一切出方ニも甚都合宜可有之、右等之事情御舍被置其向御尽力被成下度候、前件大倉組と熟談半分宛分配云々ハ可云シテ難被行困難之一事ト被考候前之理由ナル故、入札又ハ注文之際ニ望み難渋無之様豫メ充分之御配慮御配慮被下度候、右之趣は御不在中ニ付東京本社へも内信を以申出置候間、左ニ御承引被下度候
右用要迄、艸々奉申上候也

〔欄外印〕「上田」

〔65〕 (三井物産会社野紙)

此帖ハ御地ニ而写ヲ取り御回し被下度、自尽認メコッヒ一なし内帖 廿一年七月二日

上田安三郎殿

益田 孝

貴兄香港之御病氣御帰後ノ模様、逐一英作婦着承知、扱々御難儀御察申候、御帰後も余程疲勞之由何分御注意格別ニ御養生有之度、一切能ク医師ノ説ニ御従ひ被成候ハ勿論ニ候へ共、軀地療養を勸メ候ハ、是又御採用、長崎若クハ神戸辺へ御出掛ケ可被成候、貴兄不在中ハ随分種々之差支も可有之能ク従当方も被察候へ共、如何ニせん命アリ而之物種なり、呉々此事ニ付而ハ用事を第

二段と可被成候

一英作婦り東京之事委敷承り申候、随分将来日本ノ大敵と被存候、然し余り懸念も致し居兼候へ共、東京と云ハ台湾と云ハ、いつれも炭価ハ下落一方之傾ヒと存候、三菱ニ而ハ全ク謀略ニハ可有之候へ共、決し而入札ハ不致事と申居候よし、皆々油断之ならぬ人々ニ御座候

一コロンホヨリ石炭入用ナレハ、同地着直段何程ナルカ申越せとの事ニ而、今便別封し而差進候書状写し御一覽可被下候、扱此御客ハ香上シャクソソノ氏之周旋と有之候間、同人へも可然御出帖可被成、又同地出帖人へは従貴店夫々御申遣し可被下、東京よりハ石炭之業都而上海支店ニ而負担スル間、該店ヨリ返事可致事ニ申送り候間、左様御承知精々御尽力一ヶ処も得意之増加御謀り可被下候

一福州銅約束ハ余程都合克ク、解約之方ニ運ひ可申よし、扱々幸之事ニ御座候、吉報折角待居候

一天津スリハルスも余程フライブ無之而ハ代金押へ而之懸合之よし、其辺無抜目佐々木ニ而取斗候様御指図被下度、実ハ当方も種々金融ニ差支相生し、此七八月ハ甚困難いたし候間、精々金之手御付ケ被下度候

一コットンジンは弥会社ニ組織相成よし、大悦此事ニ候、万端真正之組織ニいたし外国人等も益信用を措キ而、将来日本人との組合上ニ良キ感しを残し候様いたし度折候処ニ御座候、四万円と被成会社式万円外国人壹万円外連中壹万円之よし、孝も式三千円可相

願、紡績会社之連中少々相加へ候ハ、如何、望マサレハ加へサルまでニ御座候、清国官吏如何なる事を申出候哉

一銅も以電信、過日御申越し書状ニ有之候直ヲ以御売払不苦旨ニ申進候、尤現今御地ニアル七万斤丈ケ之事ニ候、アト尚いつれハ欲沢山売却スル御良考ハ無之候哉、英国へも見本差遣し候へ共、矢張此度之聯合ニ加盟いたし居候サンチケート之哲人ニ持込、一手ニ売り約定いたし候工夫專一と存候、横浜ニも一二軒有之候へ共当地ニ而引合候と直接話しニ相成候懸念も有之候間、何欤御地之外国人等ニ而引合ニ参り候人ハ無之哉

一八重山は過便も申進候へ共、御地へは長崎より下等炭沢山参り候間おもしろかる間敷、寧ろ香港へ悉皆送り、アトハ定船ニ而香港よりロノ津へ帰航候方可然と被存候、能々御積算船ノ為メ炭ノ為メ利得を計算シ御決定御指揮被成度候

是ハ水谷帰り来候ハ、中止之考へニ定め度と存居候
一先頃差進候帽子ハ至而粗末ニ候へ共、随分上等之分も出来申候、今年ハ内地需用をも兼、山口地方ニ而沢山製造いたし見度と考へ申候、御地之景況如何御見込御遣し可被下候

一時計も為替金タ、マリ来り、随分難義と存候、皆御地へ御取り寄せ之よし、アト暫時参り申間敷候間香港へも半分御遣し、両地ニ而精々御売り初メ可被下候、兎角日本之様ニも参ル間敷哉
先右申進度、早々頓首

尚々小生も病氣保養之為メ鎌倉へ相越居候処、荆妻同地ニ而発熱是又胃腸熱ニ而難義いたし候、然し格別之心配も無之候、御

放神置可被下候

三白長崎下等炭売捌雇船等不容易御心配と存候、然し一手ニ引受候ニは御承知ノ通り中々之事ニ無之候間無遅滞販売相成候様偏ニ御尽力願ハ敷候

(欄外印)「上田」

(欄外鉛筆書)「R.D. 10-7-88」

[66]

薩丸便

明治廿一年七月十二日

上海

東京 益田 孝雄

上田安三郎

久々御無音申上候段平ニ御寛恕奉仰候、貴下ニは此程不斗御病氣ニ而一時ハ余程御奇篤ニ被為在候、其後速ニ御快方被成候由跡ニ而承り、一は驚キ一ハ甚ヒ尚統ヒテ御快氣之趣ニ拜承大ヒニ安堵仕候、然ルニ此度の御状ニよれば御養生先ニ而令聞御発病被成候由御心配奉拝察候、其後追々宜シキ方ニ候哉御案申上候、御両所共此上充分御加養、暑中ニ候へは別而御用心相成度同時神速之御全快奉祈候、又私シ病氣ニ付而は深ク御心配被下、種々御懇切ニ仰越被下万々難有奉存候、最早一日と快キ方ニ御座候間御放慮被成下度、遠からず全快可仕只々長カキニ苦ミ居申候
六月廿五日并当月二日附御状(此分は写しを返上仕候)難有拝受、英作氏モ無事御帰京東京ノ実況モ委ク御聞取相成安心仕

候、チエータ氏ニは御面会相成候哉、実ハ東京ソよりも台湾中々懸念ニ被存候、此頃は又々桑ヲ植付の事などニも尽力致居候よし、何れ石炭も一度はものニ致し候事と深く被考申候、劉將軍中々熱心ニ働キ居候

一天津敷木一件之始末は御下命之趣委細承知仕り、一々佐々木江も申通シ居候事ニ御座候、伍氏は元より当方の為ニ色々心配致し被呉候へ共、同氏不在中一時他人の取扱となり、其間当方の不都合ヲ督責され李仲堂の耳ニモ入り、今日ニ而は伍氏も当方を無事ニ済ませ候手段ニ苦ミ候処より、過般申出候渡方延引之理由ヲ認メタル書面ヲ望まれ候訳ニ御座候間此義御遠察被下度願上候、又木材商売ニ付種々御賢慮被仰越一々拜承仕候、此義ニ付而は兼而の御論ト反對致シ候事呉々も残念千万ニ奉存候

北京天津の鉄道布設之事も亦々許可相成候ニ付而は、此度こそ先度の失敗ヲ取戻シ且ツ清官之信用を復シ候時機と楽ミ、又唐景星氏等之注文も深ク後の楽ミヲ置キ候事と存居り候へ共、本社ノ御論當方と異り候上は此上の失策無キ内ニ断念仕候外ナシト歎息罷在候

一銅の事は福州善後局ニ而は当方ノ事情ヲ察シ具レ、都合克解約之運ヒニ至リ掛候処、主務者何と申官員病死いたし、其相談も中止ニ相成居候、当地慎裕は会審衙門ヲ経而我領事館江彼是申来候へ共、当方は福州の便リヲ心当テ辛抱いたし領事へモ事情委敷申述居候

天津の方は佐々木頻リニ尽力中ニ有之候、未た何とも不申来候へ

共、是トテモたゞは濟ミ申間敷、可成損金之高ヲ減シ度と心配中ニ御座候

一精煉銅は拾八兩半替、半精は壹兩落ニ而相談中ニ御座候へ共、未だ決し兼候、鑄潰シは拾貳兩八匁五分ニ売却致申候、跡荷大高約定は未だ品位ヲ充分ニ知り不申ト、鑄錢ヲ政府ニ向ヒ官員先生等安直請負致居候ためニ、今日の相場ニテハ買ヒ得不申候間当分清官との約定ハ六ツケ敷御座候、旁に御説之如ク外国人の可然ものニ引合見度存し居候

住友三ヶ年間の出産銅ヲ神戸渡百斤式十式円半ニ約定セシ趣ニ承リ候処、其事実説ニ候哉何れンデケートの手ト被考候、欧州の模様次第ニ而は御工夫も可有之、本日電信之序テ有之候間倫敦之景況も問合置キ候、貴方之御見込ミモ充分承り申度中々下ケル氣遣ヒハ当分無之候歟

一コロソボへ石炭の事ニ付文通之義ハ委細承知仕候、便次第早速夫々返事可仕候

一時計は漸ク去ル九日より売出し申候、広告セシ新聞此度差出候間、御覽後フリント氏江御交付被下度候、未だ大高の買入ハ参り不申候へ共、小売りハ可也ニ売行申候、今四五日モ相立候へ、余程売れ可申被存候、近日天津芝罘福州漢口江老グロスツ、モ送付、追々売捌の手順相付候管ニ御座候、寧波は德澄ニ依頼シ蘇州は松筠(スイン)を用ヒ度存し居り候、南京ニ余程目的有之候へ共未だ適当人物心当り無□、香港も是非近々売出し度存し居候へ共未だ實際其義ニ連ヒ兼居候、技手はクリステー氏参り候為

め大ヒニ仕合セ致し、唯今支那人ニ伝習中ニ御座候

右時計売捌当地方一手ニ引受候約□書の写真ニテモ宜敷候間、早々御遣シ被下□勿論他より彼は申参るものも有之間敷候へとも、是は是非用意ニ備へ置不申而はならぬもの歟ト奉存候、当地ニ而は日本の様ニ参ル間敷歟の御懸は御尤千万、支那人は新規之物ニハ中々取付不申、現ニ壹個の時計ヲ買フニモ式度も三度も参ル位之事ニ御座候、併シ一度評判ヲ得信用相立候へは実ニ莫大ナル売場ニ御座候間、最初之着手コソ甚タ肝要之義ニ有之、折角尽力罷在リ候間追々景況御報申上候事御待可被下候

一帽子は乍残念本年は少々時季後れ、且ツ当地方之望ミニ応し不申候処も有之候、是れは其掛リヨリ追々申上候通少々御改良被下候ハ、来年は多数ヲ売却致し得可申ト奉存候

一秀吉丸の事は承知仕候、香港が輕荷ニ而口の津江戻す歟、或は当地ニ壹荷取寄セ候歟何れ欵利益の方ニ可仕、或は香港が長崎江相当地ニ壹荷物有之候ハ、積ませ候事ニも可仕候

一[※]下等炭(今福江口等)売却ニは船ニ差支、甚た困却罷在候、最早頼朝丸近々戻来候間是ヲ三池ニ用ヒ、月雇船ヲ長崎定船ニ不日ニ備へ申候、外ニモ雇船心配中、且当地清商等トモ頼リニ相談中ニ御座候

一コツトンジンの事は、其組合申合セ規則只今狀師ウエインライト氏認め中ニ而、一兩日内出来致し可申候、道台少々グラント氏まで苦情ヲ内々申来り候へ共、公然トハ不申来、尤モ当方は右ニ付夫々豫防は致し居候

右申述度如此ニ御座候、早々頓首

(※上部余白横向墨書)「一時計メテイリヤル未た来ラス、又

脩理スル道具モ着シ不申候」

(※※上部余白横向墨書)「袖ノ木蜂ノ巢ハ能ク売レ葉山モ渡

方ニ追ワレル位ナリ、古賀山ハ高嶋同直ニ売タリ」

[67]

第七月七日

上海支店

上田安三郎殿

東京本社

松本常磐(印)

(三井物産会社野紙)

久々疎情ニ通過き恐縮罷在候得とも先以益御壮栄大賀仕候、先頃香港江御出張之節は貴恙にて余程御困却之御様子ニ承候処、急ニ御快愈無御滞御帰上被遊候段重而大慶之至ニ御座候、当方益田社長も一時大患ニ御座候処治療其功ヲ奏し方今全ク快愈御出勤ニ候間御安神被下度、随而小生も御出京之時より引続き眼病にて事務も充分掌り兼ね閉口罷在候得とも、先々売買方事業ニ従事罷在候間御心附之廉も御座候ハ、何卒御添慮被下度候

一上海より別口預リ金壹万千貳拾五円ハ通常勘定江御附廻し可申趣拝承仕候得とも、本社も近頃財政大ニ困難罷在候間御出京之節粗御談示申上候通り貴店資本金として出金致置候金五千元なり

同時ニ通常勘定江御附廻し相成候様御取斗ヒ被下度候

[68]

明治廿一年七月廿一日 仏郵船便

東京 益田孝様

上海上田安三郎

貴下ニは弥々御平愈被遊候哉、又令聞ニハ其後追々御快方ニ被為在候哉奉按候、次ニ私義此頃漸ク全快出勤罷在リ候間、乍憚御安慮被下度奉願上候

扱モ去十八日当地ガ突然ニ当店金融上ニ付電信ヲ以御相談申上候義御承知被下候はソ、当地は御承知之通り各銀行ニテ抵当品無之而は貸与ヘ不申、当店ニ而は是まで金員入用之時は石炭蔵入証ヲ以テ其時々金融相付ケ居リ候処、此節石炭売却方之都合ニ而一時残ラズ銀行ガ抵当を引出し申候、此際天津敷木之代并ニ福州銅代金等之滞リ或は操棉器械等之為ニ多分之出金致し居リ、兼而本社之御来示も有之、当七八月間ニは可成余分ニ送金仕度候も心ニ任セ不申、且ツ其事無之とも若シ三池之事本年限とも相成候様ニ候ハば勘定之終結こそ專一ニ奇麗ニ為濟申度、今、其覚悟致置申度ト種々工夫罷在候、是まで当支店にて香上銀行の借越は平均上海

銀壹万兩位のものニ有之、尤時トシテハ貳万兩ニも及ヒ候も亦壹万内外の預ケト相成リ候事も有之候間、三銀の保証ヲ得候共常□後五万兩の借越ヲ致置候訳ニハ無之、只壹万兩の保証ニ而其以上の金員は引出セ不申候も、五万兩の保証ニ対シ壹貳万兩は銀行も心能ク貸し呉れ可申ニ付何れ右の相談出来るものなれば金高は上海銀五万兩丈ケ願置度奉存候、此節柄之事ニ御座候間他ニ相談致候ども三銀ニ御相談被下候ハ、世間ニ而評スル者も有之間敷、又当地香上杯ニ而も別而当店ニ対スル信用モ増し可申奉存候、此事可成速カニ手順相立置申度電信ニ而御相談申上候次第ニ候、御返事の御電報ニ而は可否何れとも御申遣し無之ニ付未だ銀行江は何トモ不申出候、此状御落手之上は何分速ニ御処置被下、御電信被下度奉願候

一三池入札之期も最早余日僅少ト相成、遠隔之地ニ在リテハ別而心配不少候、実は御懇命モアリ病氣保養旁々是非上京仕度ト希望罷在リ候へ共、御承知之如ク当地ニ而弥々手放シ兼候事件而已ニ而、速カニ発途も仕リ兼候、貴方ニ私事罷在候共矢張心痛スルノミニは御座候へ共、遠方ニ居リテ日夜苦心致候意中も亦御推察奉願上候

右一件は何れト相成リ候共早速必ズ御一報被下度具々奉願上候
先は右用事而已申上度、早々頓首

[69]

(三井物産会社野紙)

廿一年七月廿三日

安三郎様

孝

御手紙拝見致候、追々御快方ニ而自ラ筆をも御執リ被成候事大悦不遇之候、然し筆法尚震ルを見ルハ尚御氣力之恢復セサル故なるへく、折角御撰生御保養可被成候

段々御地之近況御申越大ニ明瞭ニ相成候、北方材木商売ハ唯々其至難なると内地ノ調ハサルトニ抛リ懸念不少候へ共、全ク以断念せりと申スニも無之、尤先頃来余リ難事而已湧キ来候間、大ニ落胆せし処もアリ而、過日之書状ヲ認メ候事ニ候へ共、時と場合ニ拠而ハ又大ニ考へも立直し不申而は難相成欤、兎ニ角今暫くにして尚耽と将来之商売ニ付而も御相談可致様可相成候

一 賀田貞一を古賀山へ遣し候処、該炭山ハ脉ノ傾斜強ク留木を用ルト不相成候間、三尺より外ニ掘採ハ不相成、随分難儀ノ炭坑に而、一日數百頓ヲ出スコトハ難相成見込之よし、剩サハ現今之姿を拾五万円ニ而買ふと同段、其上ニ尚十五万円ヲ出金セヨとの要求故所詮相手ニは難相成候、先ツ少々貸金ニ而も致し、売り捌なりとも引受申度と存居候、先ツ日本ニは三池ヲ除之外安心なる山は無之候、豊前国田川郡ノ炭山ハ八尺にし而炭質も宜キよしニ付出願いたし候処、該県ニ而も有志者輩出し県ニ迫り而八ヶ間敷、遂ニ二分借区いつれへも見合ハせと相成申候、三池ニナリトモ無之而は安心し而石炭ノ商売ハ出来サルコトと相成候、唯々高直なるニ皆人驚キ岩崎モ入札不致採と承り及候へ共如何なるもの歟
長崎ニ而も折角取りまとも候もの之事故、何卒下等炭之売り方都

合克ク結果候事祈ル処ニ御座候

一 銅之事ハ御地之処も精々御心配可被下、当地ニ而も英国初メへ種々心配いたし居候、精製ハスン々々いたし居候

一 笹尾并岩崎約定之分ハ到底賄賂之一点に而助ル丈ケ助り度、從元御如才無之、唯々清国賄賂之功頭ヲ見度と存候、当方ニ而ハ出来ル丈ケ之可致事ニ候

時計も追々御見込有之よし何寄ニ御座候、フリントも大満足ニ御座候、約定書写一通差出申候

一 コットンソン会社之事ハ、自然当方ニ而も株主募集いたし候方宜く候ハ、如何ニも可致、弥紡績会社ハ勢宜く、前半季三軒家十二万円積金ヲいたし候上ニ、尚三割八分之配當いたし申候、今日之処日本人之要スル綿(則ち織物綿糸綿等ニ而)千五百万メ目ニ有之候処、内地ニ而産出スル綿ハ僅カニ五百万メ目而已ニ御座候、如何様し而も支那綿ヲ要し可申候間速カニ繰綿業之成效を見度案居申候

一時計之メテリエル無之御困却之よし、当方も品切ニ御座候へ共、先頃注文之分次便参り候間、参り次第幾分カ相分チ可申候

金子弥一も古賀一条ニ付東京申付、英作も未タ不快ニ而箱根ニ入浴いたし居候

香港之方時計売捌キ頓と工夫無之様子、唯々人ガナケレハ何も出来ぬと而已申居候、クリスチーニ教授為致候而も誰カ一人日本人ニ而修復之出来ル人御入用との御考ニ候ハ、早速同地へ差出し可申候、御地も同様と存候、清国人之方却而面倒ニ候ハ、日本人

ニ而間ニ合ハセ可申候、御申越可被下候

一 香港上海銀行ニ而、三井銀行保証スルナレハ五万円ノクレットを与へ候と見へ、其御電信被成候へ共、三銀も保証事ハ容易ニ聞入不申、又ホンコン銀行ニ於而ハ何分其意ヲ難得事有之、甚躊躇

いたし居候、其訊ハ彼如何なる訳カ立派之抵当品ヲ出し而も一ノ外国商館ヲ經由セサレハ金融不致、云ハクホールトヲフタイラク

トル之差図ニ而子チーフ商人とは直接ニ取引ヲ不致と而、此程米國より来ル石炭油ノトクメントニ而正金銀行仕払期ニ迫り候間融

金ヲ人ヲ以而依頼いたし候へ共右様之訊ニ申聞候間、即チ当方ニ而も依頼不致候、御地之処ハマナシルニ格別之人アルカニ候へ共唯五万円ヲ借入レ而時々融通スルと申ス事ニ而は三井銀行ニ而保証致ス間敷候、御手紙ヲ待ちて掛合も可致候

右之段申進度、早々頓首
尚々荆妻之病氣御見回難有、最早追々快ク今日鎌倉より帰京候事ニ御座候、御放念可被下候

〔70〕 (三井物産会社野紙)

内帖 廿一年七月卅日

上田安三郎殿

益田 孝

今日電信致せし通り入札いたし申候、然し何分其結果ハ明後日ニ無之而は難相分、明後朝開札三十日以内ニ許可之管ニ御座候
唯今之ところニ而入札いたすよし今朝次官江も申聞候ハ、川崎候

三郎と申島田組ノ旧番頭ニ御座候、其他見受不申、十一時頃までハ三菱ノ札も不相見候へ共、夕刻までと有之候間此帖認メ候間ハ相分り兼申候、当方ニ而ハ都合三人ニ而入札いたさせ申候、其都合ニテ臨機ノ取斗いたし候筈ニ御座候、余ハ運ヲ天ニ任カセルノ外無之候、最高ハ四、五五五、〇〇〇といはし申候

此間之御手紙ニ新嘉坡七弗之相場ニ有之候間送り荷三池へ御勸メ被成候処、売約定相済居候分なれば宜く候へ共、唯送り荷とありては難被許よしニ付御送り無之様御申越ニ付、何分合点行カス、直チニ電信いたし候事ニ御座候、マンズフィールド社売り付ケたりと御届被成候而御積出し被成候而亘敷、又最早別ニ高直ニ御申出ニも不及、三池之方ニ而承知相成り候丈ケ即チ一頓式弗位之手取リニ相成候価格ニ而計算、御届相成候へは宜く、スン々々右様之手続キニ被成、当社ニ内実負担し而御売捌キ可相成、三池之方ハ大藏省より束縛相成居候間前年之如く營業主義ニ致し候事ニは不相成、面倒而已ニ付当方ニ而夫々承知取斗不申而は難相成、其代り其危険ヲ取り候丈ケ之事いたし候而も差支無之候間、右様御取斗可相成丈ケ沢山御売捌可被成候

一 他手へ落札相成候ハ、当年末ニ至り残り候石炭ハ三井之手へ渡し候もの丈ケハ、山ノ原価ヲ以売下ケ相成候事ニ出願いたし候積リニ話合いたし置候

前文之事ハ新嘉坡而已ニ不限各地とも皆同様ニ御心得、精々御売捌キ可相成候

一 三井銀行保証云々御文通之趣承知いたし候へ共、此度入札いたし

候ニ付而は、非常之難論もいたし候而決定いたし候後ニ付、今此処ニ而何とも申出兼候、いつれと欵入札之結果ヲ見而是ニ取懸リ度、暫時御見合可被下候

一半製煉之方も五万斤十七兩五匁と申立置、夫ニ而政府之方ニは余程精煉より上直ニ当リ、天保之儘売却相成候より余程宜きよしニ而、精々此直ニ売却いたし呉候様依頼ニ御座候、兎ニ角アトも沢山売却方御注意可被下候

一 怡和より精煉銅なれハ廿二円以上買度様申出居候へ共、考へ中ニ御座候、僅カニ而も三ヶ年間相掛り候よしニ御座候(精煉なれハ)殊ニ直チニ相分り、困却致候故如何可致欵、然し御地の市場ニ而は到底沢山ハ売却相成ル間敷と被存候

三池之運命ハ今日ニアリ、いつれ此手紙御落手前ニ電信ニ而御承知ノ事ニ御座候、早々頓首

(欄外受付印)「MITSUI BUSSAN KAISHA, SHANGHAI, 8-AUG.88」 「丁巳」

〔71〕 (無銘野紙、墨書)

揮啓益御安靜奉敬賀候、陳候ハ閣下御病氣如何被為有候哉、漸々田中氏御通知ニ寄安心ハ仕居候得共酷暑之候ゆへ定而御難儀被成候事ト奉存候、此上無御油断御養生專一ニ奉存候、扱又敷木勘定モ漸々延引其実は非共蔽氏ハ罰金を取候趣談ニ而何ソトカ免れ度種々苦心、先伍廷芳氏ニも内々相談仕候所日本ニ而兎角災難を

得タルケ条書認差出、是を以敵氏ヲ説可申旨心切申與候間右之義ハ社状を以申出置候得共下拙之考ニも格外之日後ナレハ風波之難も書尺難、又上手ニ書程虚言ヲ申出候様ニ被思不都合ト存、外ニ良策アラシを考再ヒ伍氏ニ罷越大倉組は如何致タル乎を聞札候所、彼ハ今勘定中何程款罰金も可差出候模様ナレ共彼ハ日教少ク且敵氏ニ甘ク持込ミ居候間或ハ免れ可申、左候ハ、三井之方も談判都合宜様ニ申與候間、勿論大倉組差出不申事ト考候義ヲ咄合候所、同組ノ勘定済候迄待候方可然旨伍氏申事ニ付無拗延引致居候次第、大倉組ハ全ク罰金を不出事ニ相成候義を承り、此度速ニ申廻勘定相建申候、然ルニ三千兩ハ是非申受候様ニ敵氏申居候得共到底不差出ニ済事と信居候間御安意被下度候、右ニ付而は跡金を一二ケ月延シ與候様ニ申居候得とも、是レハ程能く申廻み二三千兩位ツ、時々取立候ハ、可然考居候

又兼而御承知有之候五分之一件、昨年分敷木代ハ勘定相済候間右高老万九千五百九十五兩一錢四分ニ五を乗、則九百七十九兩七錢57を伍氏ハ相渡申候間、左ニ御承引被下度候、尤帳合ハ上田支配人承知と記置候間、貴店於も御沙汰被成置候様仕度候
松丸太も曲り分を五百本と申事ニ相成居候得共下拙ノハ三百本と申出置候、通常之分ハ一本三弗、曲り之分ニ二弗五十錢致具候様一昨日伍氏ニ頼入多分式弗五十錢ニ而押付候積ナリ、到底損物ナレ共此上安直ニ致候而は此度之丸太もアレハ跡之差支ニ相成候間一兩日中勘定相立可申候、是又御合置被下度候、此度頼知丸材木モ是非共彼等ニ売付度、現物を見内は何ノ共難申上候、何レ跡ノ

可申上候

右用事迄仰々頓首

七月十三日

佐々木祐司拜

上田大人閣下

(欄外受付印) [MITSUI BUSSAN KAISHA, SHANGHAI, 21 JUL.88] 「4」

〔72〕

内帖 廿一年八月九日

美富号便

福原栄太郎様

上田安三郎

拜啓陳は三池礦山も弥々当方之手ニ落チ、近々可讓受との御達書下付相成可申ト存候、新聞上ニ而種々申居候事は当テニナリ不申、只々本社ノ報知ヲ相待候義ニ御座候
一三池炭売上勘定書之義ニ付而は電信ヲ以テ申進候通り、三池ニ而殊々御急ニモ有之、且此処是非古荷一洗シテ勘定可相立、兼而本社ノ申渡も有之候間、出来ル丈御調製御送被下候事と奉存候、此程蔵渡延売之約定相整ヒ候分なども、受渡期日ニ至ル蔵敷利息保険料トモ充分ニ見込ミテ夫文ケ売価ヨリ引去リ、何れも今日売上勘定御製シ可被下候、三池ニ而は可成此の八月ニ上申可相成、本年度之勘定ニ御操入被成度御望ミニ有之候間、諸入費見込夫文ケ充分引去リ候共不苦、唯々早キ方ヲ御望ミニ候間、此状ヲ

御覽次第ニ未タ不出來の分は早々御拵相成度、未売之荷有之分当店ニテハ凡見込ヲ以太体之直段ヲ以テ売リニ相立、勘定書差出し候位之訳ニ御座候、若シ来十五日ヲ後レ候共致方無之、可成早ク御送出し可被下候

此後之臨時売炭勘定書も可成丈ケ速ニ差出し候事三池ニ而は御好ミナリ、其実本省ガ八ケ間敷被責候ノ事ニ御座候、依テ売約東済なれば直ニ勘定書御製シ可被下候、売価之義は利足等見込ミ候ものトシ、実価ガ減シテモ差支無御座候、詰リ三池ニ而は此処損失さへなければ只々勘定ヲ奇麗ニ立テ候事御希望ニ御座候間、此意御察シ被下此場合ニ而は充分ニ御働キ被下、兼々小生の正実主議は其筋ニ対シテハ更ニ効現無之、今日ニ立至リ候次第、真ニ御推察被下度、三池ガ本省江の關係も規則ニサヘ当テハメレバ差支ユル事ナキノ情慾相見ヘ候間、此処当方も三池より御申越シ通りニサヘ致セハ宜敷訳ニ御座候、貴方当地共ニ古荷ヲ片付け候ハ、此処充分新炭ヲ貯蔵シ、年末ニ至リ其高当社江山元原価ニテ引受申度、本社之計画ニ有之候処、三礦当社之手ニ落テ候上は夫れも余り得策ニモ有之間敷、詰リ売レル丈ケ沢山本年申上ケ、可成利益ヲ得候事至当ト被存候、雇船当地ニ而も心配候ヘ共、貴地ニ而も心掛ケ御雇入被下、三池之許可は跡ヨリ必ラス申受ケ候事ニ可仕候間、無御懸念御取計ヒ可被下候、或は時宜ニよりにては貴地船渡売約せし事ニ、当方ヲ経て届出候而も宜敷候(勿論初メニ三池ヘ伺出候而売約の許可ヲ得タル後)、左スレハ跡ニ而雇船の許可ヲ得ルニ易ク候

一貴兄并大野氏病氣ニ付一時帰朝ニ付テノ旅費は各々自ラ御出銀ニ而は御迷惑察入申候、乍併貴兄之分は兎ニ角、大野分は小生ガ表向其処置申進候事、只今甚た難義ニ存し候事有之、則余の義に無之、今は小生の支配下ニ在ル人都て或拾四五人の多人数ト相成候間、若人ニ許セハ誰れも彼レモ其例ニ致さねばならず候間、此情御察シ被下、是は貴兄限の御取計ヒニテ、御兩人の旅費可然様ニ其地丈ケニシテ御処置相成度候、則御自出ニは及ヒ不申、又御不在中の俸給等も御受取可被成候、此後之処は旅費手当等の事仮リニモ相定メ、夫々御達し可申答ニ致し居り候

一井伯の御新職は実ニ意外ニ而驚入申候
右内々申進度、如此ニ御座候也

[73]

(三井物産会社野紙)

内帖 廿一年八月初六

上田安三郎殿

益田 孝

三池之一条ハ佐々木八郎之一番札ニ而取ル之覚悟とせば最早論ハ無之事ニ御座候、唯四十五万円程高物ヲ買フ事故、精々工夫をなし而三人ノ高札ヲ止メサセ、当方ヘ百十万円ニ而落トシ度熱心勉力いたし居候

扱三池ヲ買入候事ハ実ニ一朝一夕之事ニ無之候間、一度買入候事ニ相成候ヘは之ヲ勸メタル当会社ハ其責難被免、其任の重キ不易事共ニ御座候、就而は大ニ商売ノ工合も明年ガ改革シ、余程奮

発をいたし度ニ付而は、種々御打合へせもいたし度候間、凡三周間程御滞留ノ積リニ而其内御出京被下度、尤小生も弥来月ハ三池へ一応罷出可申歟、其辺ニ而御出逢申ス時ハ尚更ノ都合ニ御座候口ノ津へ外国船ヲ入津いたさせ候事ニ不参候間、是非とも香港口ノ津ヲ航海する三千噸程之船ヲ買入不申而は難相成と存候

長崎へ運送スル石炭ノ數ハ夥敷高ニ相成候ニ付而ハ、余程馬力ノ強キ曳船一艘ヲ買入度、可相成丈ヶ安直ニ而用ニ足り候ものを要し候事ニ御座候、先頃以來御相談もいたし候事故、早速御地之処御詮議可被下候

一秀吉丸ハ尚アトニ慥カニ石炭存在せるニ相違無之よし、水谷耕平申出候、弥三池ノ炭業ヲ引受候以上ハ、八重山等皆小事業ハ中止いたし度所存ヲ以、該礦業中止の手筈ニ水谷出張申付候、就而は税関官吏之去ラサル前ニ秀吉丸二回も遣し而、残り炭悉ク運送為致度、幸イ同船厦門へ御遣し被成候ハ、其序ニ帰航ニは是非八重山へ立寄り候事ニ御申付被下度、厦門又ハ福州辺へ航海いたし候而は、式弗式十五錢ノ運賃ヲ申受ケ而も船ハ不足ヲ生し不申哉、頼朝、秀吉丸とも一昨年昨年とも稼キ方少く甚々損ニ困却いたし候、是非とも石炭ニ支配セラレサル様上手ニ御使用可被下候一中国筋へ未タ判断不致候へ共、土用前より之暴風雨続キニ三河尾張ノ綿ハ大損害ヲ受ケ申候、先日夫にて一寸出電いたし置申候

一前便申進候今年之外商売り石炭ハ呉々意ヲ用ひて御仕切り可被成候、此処ハ余り認め兼候へ共、精々御注意御取計精々利潤之有之

様所祈ニ御座候、頓首

[74]

第八月六日

上海支店

上田安三郎様

東京本社

松本常磐

(三井物産会社野紙)

甚々疎惰ニ打絶恐縮罷在候、酷暑難堪気候ニ御座候得とも先以益御壯寧欣抃此事ニ奉存候、次ニ迂生事眼病も平愈先々無事ニ時日を経過罷在候、乍憚御放慮被下度候、扱又皆々心痛罷在候三池下一条ハ元方より悉しく御通知ニ相成候ニ付玆ニ贅説も不申上候得ども兎も角当方之手ニ落ベシトノ見込も相立候間直接ニ利益なしとも三井家之面目ヲ世間ニ顯シ大ナル利益ヲ得ベキ時も可有之候間皆々御同慶罷在候得ども、此際断然之改革アルベキ時節到来と相心得候、昨日社長迄小生之意見書も差出置申候、実ニ当社も此落票ヲ得候上ハ重荷ヲ負担スベキ事ニ付非常之改良方法を施し、社員も振而此業ヲ拡張セザレハ容易ニ維持も六ヶ敷事ニ御座候、私下高価ハ佐々木八郎名義にて四、五五五、〇〇〇円ハ高札、三井武之助ハ四、一〇〇、〇〇〇ト入札仕有之、此情実ハ小生共より筆紙ニ難申上御座候

一八重山炭山ハ弥中止ニ決定致し右整理之為メ水谷耕平又々本日同処江発進仕候

一益田英作ハ明後日出帆にて英京江出張可相成手筈ニ御座候

一金子氏ハ池之端にて(柳橋湊ヤノ別荘)籠城致居リ、又々無事

ニ消光之様子ニ御座候

一武田勝太郎君も弥卒業ニ相成候間同人身上之義ニ付御照会も可
申上[]御座候処、矢野氏ハ万事委任致具候様申居候間同人江一
切相任せ置候、然ルニ馬関ノ商業学校江教師ニ差遣候見込之由ニ
而、本人も承諾致居候由ニ御座候間別ニ愚説も相述べ不申候、不
悪御承知被下度候

一益田克徳君ハ秋田地方江巡回相成り当今不在中ニ御座候

一兵坂メ粕一条も難見込相立チ馬越氏一先帰京被致候得とも、随
分容易ナラザル損金之事ニ相成申候、実ニ迷惑至極之事ニ御座候
右用事而已申上候也

(75)

内帖 明治廿一年八月十七日 横浜丸便

東京 益田孝棟

上海 上田安三郎

七月廿三日、卅日并ニ当月六日附御内帖順次に到着、一々難有拜
見仕候、就中三礦入札一条は御状ニ抛り委細詳ニ承知仕候事を得
得て始而安堵仕候、此上は公然社主の名前江落札之事其筋之御申
渡ヲ偏ニ祈望罷在候、扱モ弥々右礦山三井の有と相定り候上は、
明年ノ商売ノ工合改革相成度思召之趣、誠ニ御尤千万ニ奉存候、
一休会社就業振改革之義は昨年真下欧米より御帰朝アリシ際ニ御

施行相成度希望罷在候処、其事無クシテ止ミ居候間、此度は此機

ヲ失セズ必ラス実地御採行相成度切ニ祈望スル処ニ御座候、右等
之件ニ付私義江上京可仕様被仰付、拝承仕候、且来月は三池江御
出張相成可申哉ニ而、彼地ニテ御出会可仕様ニ可致義も拝承、可

相成は右様仕度奉存候、実は私義病氣之為ニも此処一ヶ月斗り御
暇ヲ願ヒ、何れヘカ入浴ニナリ罷越度と存し居候ヘ共、種々の
用向ニ而何分手放し候事出来不申、甚だ難義罷在候、来月とも相
成候ハ、一時離れ候工夫も相付可申、可成三池又は長崎ニ而拝願
仕候事ニ今より用意仕候間、左様御含メ置キ被下度奉願候

一口の津ニ此後外国船入港を禁し候義は、尚拾五年ケ間は今日の姿
ニ而輸出取計の事御許可無之候哉

一海軍省江年々拾万屯内外の石炭ヲ納メ、旁ラ例のインスタルメン
トニ当テハ候事は出来不申候哉、御工夫願は敷奉存候

一曳船は余程強キ丈夫之もの香港ニ沓艘心当り有之、是は四万弗内
外ト被存候、沓艘は当地ニ有之、是はカラ余程劣り候ヘ共、筑後
三池ガは優り候、此分なれば沓万兩なれば手ニ入可申と被存候
尚是等之事は能ク御相談申上度候

一秀吉丸は当地当節大ヒニ注文ヲ増し、頼朝丸ト式艘ニ而も不足
ニ而、飛竜号式航海雇入候位の景況ニ御座候間、此程申立候処の
厦門行モ止メニ致し、同地江は多分ノルデン号ヲ遣し候事ニ可仕
候、八重山ニは元ト秀吉丸式度分の石炭有リシ事ニ可有之、併シ
其間ニ日本軍艦参リテ何程欵買取り、秀吉丸ヲ式度遣シ候程残り
無之、沓度ニ而止め申候、九月下旬なれば秀吉丸を尚一航丈ケ西

表へ遣し候事ニ工夫可仕候へ共、是は同船ノ為福州厦門香港行よりも著シキ損金ヲ現出致候間、何とか外ニ工夫願は敷候

一棉花出来振應ト御電信被下誠に難有奉存候、其後大阪の報知ニ因レハ、本邦は概して綿作亘敷様ニ被存候、此程実棉操綿取交セ凡式万円斗の品大坂江送り置候間、亘敷駈引御差函被下候様奉願候

当地は此程中暴風有リシニモ拘ラズ、一体ニ上出来ニ御座候、最早立派ニ実ヲ結ヒ、当月下旬ニは早キ分は市場ニ現れ可申勢ニ御座候、此分なれば買入れは安値ニ出来可申見込ミなれ共、本邦の作柄一ツニ而商売相決し可申候

操棉所設置之事ニ付而は、不相変当地道台々苦情申込ミ居候、依テ当方は弥々会社法ニ組立テ、香港ニテ登記スルコトシ、委員ニは英仏米独日本の五ヶ国人専名宛撰定シ、且当地重立タル商人は大体其株主トナリ、近々領事の奥書ヲ得テ北京公使連中江持出し、総理衙門照会ヲ依頼スル事ニ運ハセ居リ申候、右ニ付当地ニテハ多人数の賛成者ヲ得て、何れも五十兩者株の主トナリ此事ヲ助勢致具候事、実ニ当社の面北ニ御座候、右ニ付操綿を見る事少シ時日は後れ可申候へ共、此事落着之上は直ニ取掛リ、続ヒテ紡績ヲ起スニ至ルハ眼前ニ御座候間、一時の御辛抱伏而奉希望候
一香港当地共ニ三池古炭は不残相片付候間御安慮可被下候、又本年中三池売方ニ付注意之義は貴意充分承知仕り度候間、是又為御任置キ可被下候、新嘉坡売リ最モ工夫致し居り申候
一新嘉坡ニ而は遂ニ三池ヲ船渡洋六弗半、蔵渡七弗半以上ニモ売

上ケ候間、此程倫敦江モ電信致し、口の津F・O・B直を拾志以下ニ而売方差止メ申候、此度免狀願出候ツヨール荷は、ゼンキンス社江口の津渡三弗式十五仙ニ而倫敦ニ而売約仕候、香港当地共ニ上景氣、此処ドソソソ売リ捌度ト頻リニ勉強罷在候
本年は当地も景氣余程強ク、社員中病人多人数ニ而誠ニ閉口、無事之者ハ昼夜頻リニ働キ候而も用向片付不申ニは困り入候
右申上度、余は表状御覽願上候、早々頓首

〔76〕

謹啓、貴方々は毎度御慰問ヲ蒙り候処従是は意外之御無音平ニ御寛恕奉仰候、貴兄御眼病モ追々御快方と承り誠ニ大慶尚此上御保養奉願候、小生義も漸ク全快七月中旬出勤罷在候へ共、本年之景氣ニ而弱リ込ミ今ニ平常ニ復シ候とは難申、未た外出モ致し兼居り候次第ニ御座候

三礦我手ニ落候事は実ニ我社は勿論三井家の為ニ可賀義ニ御座候、此の上は底の無キ袋ヲ廢シ万屋主義は手の届ク迄ヲ限リトシ、好果ヲ結フ商売ニ働キ申度候

一当店資本金は御申越通り六月三十日ニ而本社ニ附替可申候、右ニ付而は本社が公然御下命の書面尙通御遣し可被下候

一武田勝太郎義は実ニ是迄永ク御厄介相懸ケ候処、漸ク卒業殊ニ適當之処ニ有リ附候事全ク是迄之御世話ニ抛り候事と深く奉鳴謝候、未た矢野氏江も御礼状差出し不申候へは亘敷御申述被下候様

奉願候、必ラス近日一封差出し可申候

右御答旁御無音御詫迄如此ニ候、早々頓首

廿一年八月十七日

上海 上田安三郎

東京 松本常盤様 侍史

〔77〕

内帖 明治廿一年八月廿日 ビシヨフ号便

香港福原栄太郎様

上海上田安三郎

三池礦山弥々三井家ニ御払下相成り誠ニ以テ可賀義ニ有之候、乍去甚た高直之ものニテ今日の時勢ニ而は右様大金ヲ他の事に支出スルトスレハ、色々面白キ事業有之候を、大奮発ニ而三池ヲ手ニ入れ候ニは、種々事情御遠察相成度、扱我有と相成候上は一体ニ会社就業向も改革可有之、社員モ此上一層之勉強致度義と奉存候、社長モ来月は三池まで被參可申、小生も同地ニテ出会可致答ニ致し居候、就而御相談は此後來年一月ノ津ニ而外国船ニ船積は廃止可相成候ニ付、郵船会社の船々を当分用スルモノトスルモ、何れ適當の手船ヲ供へ不申而は勘定相立不申候ニ付、已ニ其覚悟致し居候間、貴方之事ニ付而は是迄大小の船々ヲ用ヒ御經驗上ヨリ此後可用船の積高及ヒ何艘入用等之事ヲ能々御考御申越し被下度候、船の勘定ニ而巳注意シテモ三池丸如キモノ現出致し候間面白カラス、双方ニ而少々宛の不便はこらへ候事とし、適當のもの望ましく御座候

一怡和増約定之義は別ニ三池ニ上申ニ不及、実は甚た面倒多キニ困り候間(三池ニ而も御困りなり)、臨時充ニ御立被成可然候、其外順記等江臨時売上直等は貴方ニテ諸雜費等ニ而充分御減し被成候而亘ク御座候間、其御含ミヲ以テ勘定御立被下度、本年之末ニ色々金の入用沢山御座候間充分御用意被下度具々願上候、此儀は御目ニ掛レハ能ク分り候へ共書状ニ認め兼候間万々御察シ可被下候

一小室氏月給之事、此程申送ルヲ失念セリ、実は先般益田英作貴地へ在動中之月給之義ニ付申立候事有之候へ共、何タル返答も無之、当店田中寿雄月給之義是又小生ノ申立タルニ其通りニは許可ナクシテ減シ来り申候、田中も矢張一等手代也、右様之次第ニ而小生常々忘れは不致候へ共、社長も此節御多端之央ニ御座候間、余り彼是申立候も如何ト遠慮致居候、此事何れ遠カラス可申立候間今日之処は当方ニ同席同給のものもアリ、旁以テ其儘ニ被成置キ被下度奉存候

右申述度如此ニ御座候、早々頓首

尚々当店詰社員漸々本日出勤揃ヒト相成り大悦罷在候、御安神可被下候

〔78〕

内帖 明治廿一年八月廿三日

上海

東京 益田孝様

上田安三郎

三池弥々三井家ニ御私下の御指令相成り候義、本月十八日御電信被下、謹而拝承大慶不斜、此上は勿論骨モ折れ候へとも所謂働キ甲斐有之事と覚悟罷在候、本日小林殿より御電信ニ而同君は近日に御上京と承り候へは貴下の九州ニ御出張ハ当分六ヶ敷事と奉察候、就而は私義速ニ上京仕度も、今日の処何分其義実行難仕候、来九月中旬後なれば大体一時留主ニ致し候事出来可申と奉存候、亘敷御遠察被下度奉願候

一口の津の外国船々積は、来一月早々直ニ御差留めニ相成候事歎、或は一時御猶豫出来候哉、此事相分り候ハ、御一報可被下候、郵船会社船は逆も相手ニナリ不申候間、外国船入港当分御許可有之事なれば早々雇船の手配仕り置度、全ク禁セラレ候義なれば国旗ヲ代へ候工夫致度候、又来年供給炭約定之義も当地招商局とは已ニ相談相始め居り候間、此事或は電信ニ而伺出相決し可申ト奉存候、船之調へ等之義は粗ホ倫敦ニモ申送置候

新嘉坡は此機ニ臨ミ是非支店ヲ設け度希望之至ニ御座候へ共、最モ困難ナルハ用ユベキ人物ニ御座候、依テ今三ヶ年丈ケ辛抱スルトシ、此際マンズフィールド社ト慥カナル約定取結ヒ置キ、三ヶ年相立チ候ハ、断然支店ヲ設け候都合ニ致し候方上策カト被考申候御意見承り度候

一福井菊三郎今朝福州ガ帰来り申候、善後局ト慎裕号の約定は全ク破談ニ相成候、証拠ヲ持帰り、聊カ安堵仕候へ共、此上当地慎裕ト当店との談判相付け不申而は此事落着致シ不申、慎裕号当店ト約定スルニ善後局の關係は書面ニ記シ無之、先方モ商人の事ニ御

座候間空手為相済モ致シ申間敷ト心痛罷在候、尚ホ此義は領事トモ篤ト相談致見可申候

一操棉一件は北京ニ而仏独の両公使頻リニ替成ニテ、尽力可致トノ内報有之候間、大ヒニ力ヲ得申候、近日当店ニ而株主集会を開キ候筈ニ御座候

一銅及錫之事此便表状ニ申立候義、篤ト御勘考奉願上候、錫は兎ニ角巷荷御送被下候へは誠ニ好都合と奉存候
右申述度如此ニ御座候、頓首

[79]

廿一年八月十三日

(三井物産会社野紙、墨書)

上海

益田 孝

上田安三郎殿

三池一条も落札人未決ニ御座候、其故ハ大蔵大丞昨夜帰京相成候而已ニ而判決ハ不致候へ共、内実決定ハ一番札佐々木八郎ニ落札ニ御座候、残念なるは四拾五万円程高キものを買入候事ニ而、年々三万円程ヲ別ニ出金する事に御座候、然し二番札之力を容レル様子も唯事ニは無之候間、今更不得已事ニ御座候、近日ニ決定ノ達し可有之候間其節ハ直チニ電報可致候、右ニ付而は色々御面話ニ無之而は難尽候へ共、差当り倫敦へ三千噸程之口ノ津香港間ヲ航海する汽船注文いたし度ニ付、種々是迄之実験ニ御氣付之処御

申越可被下候、たとへは甲板ハ最前ノ頼朝丸如キニウエル形ニ候
而ハ不適当ニ候哉、後部丈ケナリとも甲板ヲ張り可申軟、右等ハ
如何、其他御氣付之廉々英和兩様ノ内御都合之方ニ而御申越被下
候ハ、直チニ英國ヘ可申送候

一 過便も申進候へ共、当分ハ石炭ヲ長崎迄回ハスより外致方無之候
間、曳船たる汽船ハ相応之大船ニ無之而ハ、野毛の崎を曳行する
ニ骨折レ可申候、御見込如何哉、是又余り堅固之高イものハ入用
無之、遠からざる内ニロノ津へ外国船を寄港すること出来可致候
間、当分入用ニ付何欵安直之老朽船なりとも無之候哉

一 大藏省之銅も追々御地より注文ありて、大ニ都合宜く候へ共、貯
藏品之有高ニ対し而ハ甚少く、頻リニ此機会之上直を売外する
こと残念なりと而、心痛いたし居候故、横浜ニ而倫敦之シンテイ
ケート之代理怡和へ三百噸より五百噸迄精製銅九九五受合ニ而百
斤、神戸渡二十三弗ニ而売渡申候、十八兩五匁より少々上直ニ御
座候、然しアト尚沢山有之候間御地之方売却相成候へ、此方ハ十
八兩五匁なれば送り方可相成、成程少々も御地ニ貯藏品無之而ハ
売り方ニ差支可申候間五六万斤は平常貯へ置度事ニ御座候、折角
其旨可申立事ニ御座候

一 秀吉丸福州江使用すること呉々損ニ可有之、到底大船無之而は引
合申間敷、責メ而頼朝丸ニなりとも被成、石炭之為メニ船へ不經
濟之事を為サス、船ノ為メニ石炭を損セサル様致度候、双方無理
之無之様御取扱可被下候

一 過日当年中石炭之仕切方ニ付申進候、呉々御慮ニ不及候、何と

もいたし充分ニ利益を御積み可被成候

右之段申進度、時下炎暑難堪候、御病後御自愛可被下候、頓首

[80]

内帖 明治廿一年八月三十一日

東京 益田孝様

上海 上田安三郎

本月十三日附御内帖去廿三日ニ相逢難有拜見、三池弥々佐々木八
郎名前ニ落札之達シ相成り候義は今便着之新聞ニ而も読知いたし
申候、就而は差当り運送船之義ニ付意見申出候義御下命拜承仕候、
此義ニ付而は已に此程より直接当方ハ倫敦江送り候事モ有之、
香港向ケニは昨年中雇居候処のグラチチウド又ノルデン号等の如
キモノ最も適当ト被存候間、船主ニ売ル氣アルカ内々に取調へノ
事、又一年間雇フトスレハ国旗ヲ代ニル事なと委細問合セ置候、
勿論電信ニ而返事可申来様ニ申添へ置候

新嘉坡向ケニは、ウエストミーツス、ウイクトリイ号の内ヲ六ヶ
月間雇方申遣し候へ共、折柄フレイト騰貴之際ニ付暫時取極め見
合候、ウイクトリイ号トエンデポール号共ニ積ミ高三千七百屯
(焚料共)、此内壳艘は来月十月ニは東洋ニ参ル筈ニ而口の津新
嘉坡の為ニ雇約定致セシモノニ候間、是等之内ヲ適當なれば手ニ
入れ申度、英國ハ殊更ニ新船取寄セ候ガも、東洋ニ右様之都合ニ
テ参ル船買入出来候ハ、好都合ト奉存候、其事なども渡辺ニ内々
申送り置候、香港向ケニは式千五百屯(積荷而已)最モ適当ナ

リ、新嘉坡江は三千五百屯少カラヌモノにいたし度ト奉存候、石炭の景況は本邦而已ニ非ス英國の輸出モ余程盛ンニ有之申候、三池の売れ方新嘉坡は勿論、香港当地共ニ当節常に面白キ様ニ商売出来申候、香港などは雇船のなきニ困却罷在候、此際充分相働キ来年約定上手ニ仕度ト奉存候、三池御私下ニ付年末堀置之石炭は山元原価ニ而御引受之義拝承、小林殿ニモ幾分か御加勢沢山堀出し候事ニ御尽力可有之御意ナル事ニ承知仕候へ共、右ニ付私ニ於ては不審ニ存し居候、山元原価ニテ御譲受なれば一月以後当社ノ勝手に採掘シテ新シキ石炭ヲ売ル方直段も好ク、上納金も夫丈ケ少クシテ済ミ不申哉、我社ニ而坑業ヲ取扱フニ至リテ是迄ガも費用相増し候処ガの御考ニ御座候哉、年末の前ニ各地ニ送出したる石炭ニシテ、年末ニ至リテ右ヲ山元原価ニテ運賃ヲ加ヘタルモノ而已ニテ御譲受出来ル事ナレハ、其頃の勘定立テ方ニヨリテ余程得分も可有之候へ共一月二月各地石炭の需用最モ少キ折ヲ見掛ケ三池ニ沢山堀置キ、況ンヤ其代ヲ原価ニ而納め後ニ需用口ニ向ケ古炭ヲ送ルは決テ得策トは被存不申候、右モ他ニ御考有之ニ事候ハ、御教示被下候様、伏而奉願上候

三池ニは其俸給貴キモ英國より熟練の礦山実業技師名是非御雇入相成候様ニ奉切望候、而シテ事務の方ハ小林殿ニ是迄通り御勤続之意アラハ無此上事なれ共、世間の説もアリ左様ニも参り申間敷、左スレハ後任ニは御心当り被為在候哉、内々拜承仕度奉存候、其の余の人員及ヒ就業振合は可成是迄通御残シニテ、改良は徐々ニ御施行相成候様ニ奉希望候

口の津積方一月以後之処甚た懸念ニ候、此義は相知れ次第御一報可被下候

色々愚見申上度義も御座候間一寸ナリモ上京仕度希望罷在候も、当分は迎も被行不申、来月下旬ニは何トカソテ一ヶ月間の御暇ヲ願ヒ、九州地方ニ而入浴ニ参り充分養生も仕度、丁度貴下三池まで御出張相成事ニモ候ハ、幸甚ト奉存候

一操棉一件沓口上海銀五十兩宛のノミナル株主トナリ、当社の工業設立ヲ贊助スル人当地之紳商式十六名の多キニ至リ申候、此内ニ而英仏独米日の五ヶ国人ヲ委員トシ去廿七日狀師ウエインライトの宅ニ而集會ヲ開キ、種々方法相談の上ニ而遂ニ香港政府に社名ヲ登簿スル事ニ相決し申候、当地道台の照會江は却而狀師の意見ニ從ヒボンヤリの返答ヲ英領事まで差出し有之候間、当分氣遣ヒは無之、工場ハ来月中旬ニは出来上り可申候、当地の第壹等新聞北支那ヘラルド記者も頻リニ贊成、李仲堂の達文ニ攻撃ヲ間接ニ致し居申候、則此便差出し候新聞社説御一覽被下度願上候、香港ニレンスタ致し候上は公然会社名ニ而北京公使連中の助力願出候筈ニ御座候、然ル上は五ヶ国に關係有之候間道台も容易ニは輕卒の事も致し申間敷ト奉存候、ノミナル株主人名等も次便委御報可申上、尤モ只今の処ハ極々密ニ致居候間、他人ニ御話しは決而無之事ニ願上候、北京ニ而許可候ハ、トンダ大キナモノガ出来可申候

右申上度此如ニ御座候、早々頓首

廿一年九月一日

上田安三郎殿

元方

先便之御答へ次便ニ可致候へ共、其要領中至急ヲ要する分御答及置候

一口ノ津ハ不開港場故、到底人民雇之外国船入港ヲ許サレス、抛リ而は当分ノ処外国船ヲ雇入ルニ日本国旗ニ交換不致は不相成、是第一之困難ニ御座候

倫敦へは前便此事情申遣し船主と面談六ヶ月ノ間若クハ一ヶ年間ノ船ニし而日本国旗ニ取換へ当社之カ持主となり、而し而其船ハ真ノ船主へ賃入りニいたし置キ、別ニ内約ヲ設ケ而他日不都合之無之様真実之事を記載いたし置候ハ、如何、精々試可申様申置候へ共、尚御地ニ於ても此手続御工夫可被下候

上海と口ノ津ハ頼朝丸、秀吉丸ニ而専ら勉強可為致、是ハ一円八十弍位ニいたし二艘ニ而大勉強致候程ニ石炭御売却被下、其間船ノ余レト有之候ハ、時々神戸へ石炭ヲ口ノ津より積取り、又御地へ行くと申事ニいたし置キ度、一体上海ハ頓と石炭之輸入増加不致候間、追々此近年ハ三池ノ売レ高も減候へ共、高島も今日之姿ニ候へは来年之分よりは従今御配意招商局怡和太古等御地入用之分販売方格別ニ御心配被下度候

千草丸熊坂丸も都合次第ニ而ハ一時限りなり、又ハヤリ切なり差し候而も宜く候

一銅ハ近日騰貴いたし申候、御地之買人氣相立候も、世界ノ相場ヲ

速カニ見而取ル清人ノ伶俐ニ御座候、此時折角売却相成度候へ共大阪ニ而精製方遅延、何分致方無之候間宮本新右衛門を大阪へ遣し、主任者と充分引合確乎と其目的ヲ定メ越候筈ニ御座候、到底今少々高く売却いたし度廿万斤ハ当社持チと相成分有之、今年中ニは無相違積出し出来可致、是ハ半製精ニ御座候

一銅之売価は御電信次第夫々御届いたし候間、是々以後ハ間違相生不申様、御届書之写一通番号を追而差出し可申候間、夫ニ従ひ売揚勘定等御差出し可被成候

一銅ノ手数料ハ百分ノ二と申出候へ共、夫スラ多キと而百分ノ一ニ致せとの命ニ候へ共、未タ服従不致精々百分ノ二を願中ニ御座候、御地之分配方ハいづれ尚取極り次第可申進候

一□の錫ハ出高も至而少ク且ツ日本ハ多少とも清国より輸入致ス程の需用ハ有之と而も、海外へ輸出致スものハ無之と存候間、御地へ送り荷ハ見合ハせ可申候、当方ニ而ハ□の錫殊ニ信用ヲ得而御地より輸入スルものよりハ割合高く売却相成候、昨今百斤四拾円より四十一円ニ御座候、御地之計算ニ而ハ三拾三円五十六錢ニ有之是ハ左も可有之候

一頼朝丸船長コールは、休暇ヲ受ケ而肥前ノ温泉ニアル由、何卒陸動いたし度と而、海上保険会社ヨリ依頼も有之、折角其会社ノ為メ陸動メを志願せり、然しもし当会社之下ニ何と欽陸動相成候事なれハ尚更難有と申越候間、乍残念当社ニは右様之位置無之、三十年間海上ニアル故陸動希望スルコト尤なり、精々当社ニ而も助勢可致、今ノ志望達セラル、様祈望スと申送候、尤万一其事も叶

ハス又当社も欧州の船ヲ取り候場合アレハ、同氏ヲ遣し候而も宜く、多分一応ハ欧州へも行き度欵杯フライウエート之返書差出し置キ可被下候、御含までニ申進候

一今日まで通済丸ノ一等機鐘師ニ使用いたし置候児島某と申もの、当時手明キニ相成、頼朝丸ナレハ二等機鐘師と相成候而も宜キ旨申出候、御考へ如何
右申進度、早々頓首

[82]
内帖 明治廿一年九月十三日 パーサ号便

東京 益田孝様

上海上田安三郎

一高島の出炭ヲ減シ、濠州炭山は坑夫のストライキと、近頃全体之商況活発ナルトニ抛り、各地ニ而三池石炭の需用大ヒニ相増し、別而新嘉坡ニ而は盛ンニ売出し申候、七月下旬より倫敦支店ト当店は毎日の如ク電信往復、已ニ新嘉坡ニ数荷、其外バタバヤ、ラングーン等ニ迄も積出すモノ、口の津渡ニ而続々売約定いたし、直段は遂ニ9/9手取焚料などは10/ニも売約致し、又口の津ニ而相談スル焚料は洋三弗半ヲ最下の直段ニ致申候、尚此度倫敦ニ而ボルネヲ商會トノ間に十、十一、十二の三ヶ月間口の津渡新嘉坡向ケの為ニ壹万屯の三塊ヲ正味9/9替ヲ以売約定取結セ申候、但シ是は三池江は届出不申、積出しの時々船ヲ三弗ニ履ヒテ石炭は六弗ニ売候事ニ届出候間、口ノつ税金入費等充分引去リ式弗六十仙

位ニ当リ可申ニ付、三池の為ニモ立派ナル勘定相立申候、尚思召モアラハ御申遣可被下候、当方は新嘉坡口棧トノ六弗の式歩五厘、其外ニ又当店の式歩五厘の所得ニ御座候

一鋼の売直等一々当地領事ニ可申出事、又代金も当地領事館へ上納スベキ事に七月下旬大蔵省が本社ニ被達候事を過日高原氏が承り、初メテ承知、当店の処都合能ク返答致置候へ共、誠ニ不都合千万御察し被下度、若シ此状御落手まで届直段等御申越無之ば、入費掛り候とも電信ニ而明細御差図願上候

一Z・B・鉛之事本日御電信拜受、早速御返事差立置申候、横浜江の運賃までを見積り洋六弗七拾五仙ニ当り申候、御差図次第ニ買附明日東京丸積ニ致度御電信相待居候

一頼朝、秀吉丸共ニ日本人運転手ヲ乗セ居候へ共仕事ニ耐へズ誠ニ困り入候、此程御申遣之機械手モ実は好ミ不申候間暫時御見合被下度、此度洋人等モ式等百弗ニ三等七拾五弗ニ(機械方)相減シ候、其外色々改革仕候間追而委敷可申上候

一貴下九州御出張は何日頃ニ相成候哉、私義は可成来廿二日当地出帆西京丸ニテ長崎迄罷越、二週間斗り入湯ニ参度奉存候間、凡往復共ニ一ヶ月間の御暇御許被下度奉願候、実は当地迎も手放し難ク候へ共、身体何分衰弱致居候間此処一時養生仕度奉存候、留主中は中々当店人員ニ而操合セ相付不申候間、福原を参り貰ヒ候事ニ相談致置申候、右ニ付九州ニ而御出會出来候事なれば誠に好都合ニ御座候

一本年は当店詰員も去六月以来代ル々病人多ク、從而違者ナル

モノモ用事相増、昼夜の勉強ニ而、是又当筋弱リ居候、依テ近日より沓兩人宛交番ニ口の津ニ遣シ保養為致申度考へ居候、御舎ミ置キ被下度奉願上候
右幸便申上度如此ニ御座候、早々頓首

[83]

内帖 廿一年九月十五日

(三井物産会社野紙)

仏便

上田安三郎殿

益田 孝

今便柳谷謙太郎氏及成島氏仏國へ出帖、御地へ被立寄候、可然御取扱可被成候

小林殿ニも出京、同氏将来之身分も未定ニ御座候、当方ニ而は兎ニ角ニも多年之熟練故同氏ニ委ねる方可然と被存候、然し政府ニ而一層之保護ヲ与へサレハ同氏ニは引受難キ事ニ申居、折角其事ニ付協議中ニ御座候、彼是以而小生方三池へ参ルモいづれ来月ニ可相成と存候

明年々ハ是非とも平均一日千五百頓、即チ一ケ年四拾五万頓ハ採掘いたし度候間、香港其他從今沢山売約定ノ吉報屈指相待居申候而而本年之残炭ハ極而下廉ニ私下相成候事ニ付、当年採掘之分ハ余り沢山売却不致方宜く、今日之処ニ而ハ殆と残炭も無之ニ引受可相成程之売レ方ニ候へ共其辺御注意有之度候

一大阪之藤本久助と申人、醬油を再製し而其エキス即液素ヲ取り、之ヲブリツキニ入レ而航海中之用意等ニ供候事発明いたし申候、

然ルニ同人之考案ニ而ハ並之品ハ其実塩と少々之砂糖ニ不過し而、醬油と申スハ唯色を着ケタル而已ニ御座候へは、先頃領事館へも出願少々は漢江へも送る試みなり、之ハ其実ハ醬油ヲ売ルニは無之、全ク清國之如キ食塩之高キ國へ体ヲ変へ而食塩ヲ売ル之見込なり、既ニ清國ニ而食漬之魚ヲ買ふハ重ニ其食塩ヲ望ム程之よしニ候へは、何と坎売レ途チ之無之もの坎と而相談ヲ受ケ申候、折角之依頼故見本ヲ送ラハ上海ニ而販路取調へ可申と而此大坂へ数鐘送り越候よし、いづれ御地へ右見本大坂支店ヲ送り遣し可申候間其筋之ものと御相談御試被下度候

一鋼之訴訟ニ御困リ被成候事ハ何とも申様無之、不得已次第ニ而、当方ハ追々岩崎ヲシ而古川へ為取懸候手筈ニ御座候、ツマリ御早談之上鋼天保錢ノ潰しニ而なりとも貰ひ候訳ニは参ラス候哉、尤福州之方は、善後局と慎裕号と破約相調ひ候ハ、日本ノ裁判ニ而ハ慎裕号との約定も破約し得可申と存候、然し天津之方ハ如何とも致方無之、唯何程カ金員を納メ而履行を免レ候より外無之候一残炭引受ニ付御不審之趣御尤ニ候へ共、残炭ハ外へ此節之価ニ而被売候よりハ、原価ニ而引受候方、既ニ何分之利益も有之候事ニ而、唯夫而已ニ御座候、今別ニ沢山出スと申訳ニも無之、又採掘高も減し居候間旁今之高直ニ売却し而其利ヲ官へ上ルニも不及候、其辺可然御斟酌有之候へは宜キコトニ御座候

一口ノ津へ外国船を入津せしむる事ハ、太体今年中ニハ片付可申模様ニ御座候、尤是ハ口ノ津而已ニ無之、米と石炭と丈ケ、不開港場なりとも外国船ヲ遣し得ルと申訳ニ御座候、左様相成候へは此

上も無キ事ニ御座候

一 倫敦ハ電信ニ、カルゴ一ポート三千五百磅ニ而買、二月受渡ニ而日本着五千八百磅ニ而出来ルと申越候、是ハ貴地よりも御申遣し被成候事と存候、従当方ハ詳細ヲ不申送候へ共、今頃ハ英作も着し而当方入用之次第ハ承知し而申越候事と存候、御地香港ともニ適宜之もの無之候へ、買入候へ、如何、然し水入等も如何分電信而已ニ而直チニ買入も六ヶ數と存候、其内巨細書も参り可申候、然し長崎回しニ不致、是迄通りロノ津積ニ相成候へ、格別之ものは無之とも弁不申候哉

貴兄ニはいつ頃御出掛被成候事出来可致哉、一ヶ月程湯治之思付至極可然、精々御線合ハせ是非御奮発可被成候

右之段申進度、早々頓首

(欄外受付印)「MITSUI BUSSAN KAISHA, SHANG-

HAI, 21 SEP.88」

[84]

内帖 明治廿一年九月廿二日 西京丸便

東京 益田孝様

上海上田安三郎

本月十五日附御内帖拝見仕候、柳谷其外昨日来着今朝香港ニ向ケ出帆被致申候、滞在時間は短ク且英仏日本郵便メ切日ニ而何モ御馳走出来不申、只々当地の商売振ヲ一寸見セ申候
銅の事は大蔵省ニ而余程疑念を起し、実は領事ニ内々探偵ヲ申来居候趣ニ候、依而種々熟考此度相送候写の本書差出申候、右写ヲ

以私の申立振リヲ篤ト御承知被下度、右の内已ニ勘定書送済トアル分は貴方御申立テト多分相違無之不都合無之事と奉存候、此事

一本本社より常々染々タル御書通無之故ニ御座候、宮本氏折々文通被致候へ共頭尾不相分更ニ引当ニ相成リ不申、此後の商売トテモ只安直デハ売レヌト斗リニ而は取附キ様無之候間、何程迄なれば売レト御申遣被下度半精新形なれば充分望人有之申候

曳船は香港ニ在ルフラインク、フイシ号四万弗位なれば買へ可申、此船なれば長崎ニ通わするとも万々差支無之候へ共、少々扣へ日ニ致シ当地のフエイリー号ヲ買方切ニ御勧め申上候、ドラゴン号ニ而は最早今日の商売ニは細クテ損ニ御座候、詰リ高直ニ而も永ク役立候もの買入候事却而得分ニ御座候、フエイリー号ハ私自ラ充分検査致し至極適当ト相考候、当地ト香港約定は最早幕ヲ明ケ候間跡は続々出来可申ニ付御安心被下候

倫敦ニ而新嘉坡ボル子ヲ商会ニ本年中老万屯供給約定為取結候処、少々輕卒ニ取斗ヒ新嘉坡香港当方の売場ニ而彼等又売リ出し困リ居候、御序ニ渡辺ニ又少々念入候様御申遣し被下度奉願上候
長崎十一志三片(三弗七拾五仙)
口の津十志六片(三弗五十仙)

新嘉坡船ニ積込 七弗七十五仙

香港 同上 五弗七十五仙

右以下ニ而ハ当分御売約無之様ニ願上候

福原一昨日来着候間約定の事片付次第暫時御暇ヲ願ヒ度奉存候
右申上度如此ニ御座候、早々頓首

[85]

廿一年九月廿七日

益田社長殿

上海

上田安三郎

過般一応申立置候処の当地銀行より借越金一件、若シ貴方ニ於而三銀トノ御相談相整候へ、香上銀行式万五千兩、新東洋銀行ニ式万五千兩ト式口ニ分チ保証御申受被下度、呉々奉願上候
本年々末ニ至リ三池代モ一時ニ上納スルニ至リ候へ、必ラス金策ニ困難ヲ告ケ可申、其折差迫リテ彼は苦策致候よりも今より夫等用意致置申度ト奉存候、宜敷御遠察被下度奉願候也

[86]

(挿み込み)

謹啓、陳は佐藤順七郎氏の事ニ付御来示委細拝承仕候、早速本人ニ申聞かせ候処一応当地へ出張致し、志ヲ立テ候事ニ覚悟罷在候間、本邦ニ転勤之望ミ無之旨を被申出候ニ付御差函之通り当便ヲ以而神戸願川君江其旨申送り候事ニ仕候、依而左様御承知被下度奉願上候

本蛭地所之事は可成一日も早く其書類御遣し被下度、当節追々望ミノもの出来候間、取留たるヲフアルを得而御通知申上度と折角希望罷在候

久太郎君ニもブレンチス氏の周旋ニ而弥々有附も出来候由報知有之、誠ニ安心仕候、貴方江は何れ直ニ文通アリシ事ト奉存候

私事此便ニ而長崎まで参リ三四週間ニ而帰滬仕候筈ニ御座候間、御書状は長崎大浦三番館三井物産会社当テニ御差出し被下度奉願候

右不取敢御答申上度候、早々頓首

廿一年十月五日

上田安三郎

東京

品川忠道様 侍史

[87]

(挿み込み)

八月十九日迄之御状順次相達シ難有拜見、益々御壮栄先以奉賀候、当方々は病氣ヤラ多忙ヤラ候而御無音無限幸ニ御寛恕被下度候、扱も比度之御状ニ而グリーンノックなる Rankin & Blackmore 江御従事相成候事ニ相極り候旨御報知ヲ得テ誠ニ安神仕候、且ッ俸給等も相定り毎月の計算モ粗ホ相立候様ニ承り、則チ是迄御執業の効積を岳ヒ申候、教師の月謝は御申越之通り倫敦支店より御受取差支なし、何分充分ニ御勉強ヲ希望いたし申候、小生義久數病氣其後は店用多忙ニ而更々養生も出来不申候間、明日ハ一時帰朝島原小浜ニ而二三週間加養致候事ニ取極め申候、此便は余リニ御無音ニ打過候間唯々御詫まで一筆申上候、いづれ帰滬致候上は追々可得貴意奉存候

折角御自重祈上候、早々頓首

廿一年十月十五日

上田安三郎

品川久太郎様 侍史

[88]

(挿み込み)

益々御安康奉遙賀候、次ニ私々は平素御陳遠申上候段幸ニ御寛恕奉仰候、陳は比度東京品川君より佐藤順七郎之事ニ付御申越之義有之、右は早速本人江委細申聞ケ候処一旦当地ニ渡航致シ当方ニ而志ヲ相立候事ニ覚悟罷在候間、本邦へ転勤之望ニ無之旨ヲ申出候、右之趣は当便品川君江も申送候へ共、同君より御依頼ニ而其義閣下江御文通申上候様との事ニ御座候間此段申出候

右得御意度如此ニ御座候、早々頓首

廿一年十月十五日

上海 上田安三郎

神戸ニ而

頼川君平様

執事

[89] (上海三井物産会社支店郵紙、上田安三郎筆、墨書)

明治二十一年十二月手扣

一金貳拾円

高田 為助

一金拾五円

島田桑太郎

但賄料は外ニ支給之事

高田は廿一年七月が
島田は廿一年十二月が
外ニ

上海支店限雇

第一月より

明治廿一年 月給金三円 小柳七四郎

十二月より
明治廿一年 月給金貳拾円 上田晏次郎

[90] (上海三井物産会社支店郵紙、朱書・上申文言・日付署名のみ上田安三郎筆、墨書)

上海香港支店詰社員等給表

本月帰京ノ上転任 〔朱書〕	入社十二年十二月	番頭三等五十拾円	田中 孝輔
番頭三等五十円ニ	入社十五年六月	手代 考等四十拾円	福原栄太郎
本月帰京ノ上転任	入社十六年十二月	式等三十拾円	小室 三吉
手代考等四十円ニ 〔朱書〕	入社二十四年六月	同	益田 英作
手代考等四十円ニ	入社	同	同
手代考等四十円ニ	入社十七年三月	同	同
席如故式十五円ニ	入社十六年二月	同	同
席如故式十五円ニ	入社十七年七月	同	同
席如故式十五円ニ	入社十七年十一月	同	同
席如故式十五円ニ	入社十四年十二月	同	同
席如故式十五円ニ	入社十五年三月	同	同
席如故式十五円ニ	入社十六年十二月	同	同
手代式等式十円ニ	入社十七年四月	同	同
手代式等式十円ニ	入社十七年四月	同	同
手代式等式十円ニ	入社十七年九月	同	同
手代式等式十円ニ	入社十八年一月	同	同

明治廿一年十二月十五日

支配人 上田安三郎

[92] (三井物産会社野紙、木村正幹筆、但鉛筆書部分のみ上田安三郎筆)

100金百円	福原栄太郎	18金八円	林昌雄
金五十拾円	小室三吉	15金八円	小林雄志
30金三拾円	田中寿雄	18金七円	高柳豊三郎
30金三拾円	福井菊三郎	15金拾五円	遠藤藤二郎
25金貳拾円	副島儀太郎	×廿年分無シ	吳永寿
25金拾七円	長谷部信義	金三円手当トシテ	池田広次
20金拾貳円	大野市太郎	メ三百五拾円也	(印文「まさもと」)
金拾五円	藤瀬政二郎	右之外店限履ニ而不得止支給セサ	
20金拾貳円	高木鉄太郎	ルヲ不得者ハ、手当トシテ金三円已	
20金拾五円	山本条太郎	下ヲ任ス、小僮下	
18金八円	岡田玄良	男ハ一切不給	
(鉛筆書)	廿一年十二月	事	(印文「三井物産会社」)
100(各印「上田」)	福原栄太郎	元方(印)	
50(印)	小室三吉		
30(印)	田中寿雄	高柳豊三郎	

30(印)	福井菊三郎	15(印)	小林雄志
25(印)	副島儀太郎	15(印)	遠藤々次郎
25(印)	長谷部信義	5	池田広次
20(印)	大野市太郎	メ四百〇七円	
20(印)	高木鉄太郎		
18(印)	山本条太郎		
18(印)	岡田玄良		
18(印)	林昌雄		

[93]

明治二十年分慰勞金支給金高

金 四百円	内 四拾円預リ	三百六十円渡	上田安三郎
同 壹百円	同 拾円預リ	九拾円渡	福原栄太郎
同 五拾円	同 五円預リ	四拾五円渡	小室三吉
同 三拾円	同 三円預リ	式拾七円渡	田中寿雄
同 三拾円	同 三円預リ	式拾七円渡	福井菊三郎
同 廿五円	同 貳円半預リ	式拾貳円半渡	副島儀太郎
同 廿五円	同 貳円半預リ	式拾貳円半渡	長谷部信義
同 貳拾円	同 貳円預リ	拾八円渡	大野市太郎
同 貳拾円	同 貳円預リ	拾八円渡	高木鉄太郎
同 拾八円	同 壹円八十錢預リ	拾六円廿錢渡	山本条太郎

同	拾八円	同	壹円八十錢預リ	拾六円廿錢渡	林	昌雄
同	拾八円	同	壹円八十錢預リ	拾六円廿錢渡	岡田	玄良
同	拾八円	同	壹円八十錢預リ	拾六円廿錢渡	高柳	豊三郎
同	拾五円	同	壹円半預リ	拾三円半渡	遠藤	々次郎
同	拾五円	同	壹円半預リ	拾三円半渡	小林	雄志
同	五円	同	壹円半預リ	五円渡	池田	広次

メ金八百〇七円也 内金八拾円廿錢本社預リ

則金七百貳拾六円八拾錢也本人ニ渡ス

右之通実施仕候間此段御報告申上候也

明治二十一年十二月卅一日上海支店支配人

上田安三郎

東京本社元方御中

[94] 内帖

明治廿一年十二月廿日夜 山城丸便

東京 益田社長殿

上海 上田安三郎

謹啓来年一月中旬ニは閣下三池まで御出張相成候ニ付而は安三郎ニモ同地ニ罷出御出会可仕様ニ御差函拜承仕候、然ルニ当地方の用向平時諸事整頓致居候折ニスラ一日他出致セハ一日の損毛ヲ招キ候姿ニ有之、况ンヤ今日の有様ニ而は片時も身ヲ動サ事甚た無覚束、尤モ此度ノ義ハ格別肝要之事と奉存候へ共当地方則チ肝要

之先手ニ当リ居り候間、幾重ニも不都合無之様ニ取計ヒ申度相考候時は、弥々来月三池の御出会は御断申上候方却而目途トスル商業之為ニ得策ニ可有之被考候間則チ思考之儘申上候、此際一時たり共当店ヲ去り候ハ生スル損害は別ニ不申述候共亘敷御遠察被下度、夫とも是非參ルベントノ御意ニ候ハ、何時ニ而も罷出候事ニ可仕候

一九州まで御出浮ニ相成候事なれば、何卒御奮發被下一寸当地ニ御渡航被下度、深く奉希望候、若シモ其義出来候事なれば誠ニ会社之ために無此上仕合ニ而、安三郎義も別而難有、今日の現状ヲ御覽ニ供へ猶後來之事共充分御相談申上度と切望罷在候

一香港上海ト口の津間の運送船ヲ三井ニ於而買入方御不同意ニ有之候ハ、当地方洋人ヲ勸め、其為ニ特別社中ヲ設ケ船舶ヲ供ヘサセ候事も難事ニハ無之、且我々中ニ而別ニ名義ヲ設ケ其為ニ一会社ヲ起し候而も利益ニ相成可申、况ンヤ御国益之一端トモ被考申候、此義御面会モ致候ハ、御意見伺申度候

一三池は勿論之事其他古賀山、唐津及筑前の抗山ニ付而も充分之御注意ヲ奉希望候、此義も拜顔ヲ得候ハ、必ス愚意貫徹可致ト案ミ罷在候

一操棉所之義も当地ニ御渡航被下候ハ、御電覽ヲ可奉願、且其上ニ而御賢慮奉伺義も有之、専ラ御渡航ヲ祈望罷在候情ヲ御察し被下度願上候、右操棉所株式申込ミ書式并ニ委任状は過便差出し置候間、貴地ハは必ラス当十二月中には夫々御募集ニ而当地ニ届キ候様ニ御送附被下候事と每便相待チ申居候、当地之分は本月中ニ相

集め来年一月一日の開業ニ致度ト企テ居候

一 フリント氏ガ棉実ガ油ヲ採る器械の明細書、貴御手許ニ差出し置候趣を承り候処、右は貴方ニ而御用済ニ被為在候ハ、早速当方江御送り被下度奉願上候

一 フリント氏の同伴セシ人物も当地ニ留メ置、当今試ミ中ニ御座候間、此後如何成リ立候哉、相知れ不申、未だ安三郎の手助けニモ操綿の方ニモ能キ支配人ヲ不得申、頻リニ内外唐人ニ而苦慮罷在候、他人は却て心実ニ世話致し呉れ候も、内輪の運転不如意なるニは甚た心痛無限候

一 三池ガ香港其他未売炭の多キトノ苦情公私の御責ヲ蒙リ誠ニ閉口罷在候、此義ニ付而は本月十一日ニ内状ヲ以テ申上御差図相伺置候間、明日は御返事を得可申と仏船の来着ヲ相待申居候

一 三銀保証之義承諾ニ相成候旨過日電信御報拜受大慶無限、是も多分明日御便ニは委細承リ候事と奉存候

一 来年三池約定明細書別紙相認差出候間御高覽奉願候、未だ約定不取結候分ニ而も右ニ記載之分は無拋先ニ候間、是非承諾致サねハナラヌ得意ニ御座候

右申上度まで如此ニ御座候、早々頓首

[95]

号外 廿一年十二月初六

上海上田安三郎様

(香港三井物産会社支店野紙)

香港 福原栄太郎(印)

(印文「ふくはら」)

拜啓、陳ハ当香港店詰社員増給之儀ニ付見込左之通り申出候間幸

ニ御同意ニ候へは本社へ御申立可然御取謀被下度候

洋四十弗宛ニ是迄洋

小室 三吉

〃式拾七弗五十仙宛ニ是迄洋

副島儀太郎

〃式拾五弗宛ニ是迄洋

大野市太郎

〃式拾弗宛ニ是迄洋

岡田 玄良

洋式拾弗宛ニ是迄洋

高柳豊三郎

〃拾七弗五十仙宛ニ是迄洋

遠藤々次郎

右様増給相叶候へは別段昇級ニは及申間敷かと被相考候へども、大体御地詰社員との見較へも有之事故昇級之一点ニ於ては尚貴御見込ニ任セ別段爰ニ不申出候間左様御承知被下度候、遠藤は当店ニ参り候儀未タ其日も浅キ事ニ候へども、是迄御地ニ而勤統之ものゆへ前陳之増給相成候而も至当かと相考候、又右様増給相叶候へは別段臨時賞与を御支給相成候事ニも及申間敷と被存候

右御参考までニ得貴意候間、亘敷御取斗被下度奉願上候、早々不備

[96] (香港三井物産会社支店野紙、日付・差出・宛書のみ墨書)

明治十九年一月一日ヲ以テ香港当支店開設スルニ当リ従前三池石炭売捌ヲ委托シ置キタル太古洋行ヨリ引継キタル残炭ハ左ノ如シ

粉炭千九百〇七頓 アルバニー号揚ケ

同式千〇拾八頓八合 アルトノワー号揚ケ

共計粉炭三千九百式拾五頓八合ニシテ当時九竜ナル倉庫会社ニ貯

藏之儘ニテ引継キ、同年四月ヨリ之ヲ東京本社ノ別口勘定トセリ、
從是先右粉炭アルバニー号揚ノ分倉所ニ於テ發熱セシ趣突然庫所
ヨリ飛報ニ接シ直チニ出張見セシニ、堆炭中蒸烟諸々ニ立登リ
熱氣強キ所ハ手ヲ舐ル々能ハサルノミナラス、此儘ニ打捨置カ
ンニハ發火之危険モアランコトヲ恐レ其最モ熱氣熾ナル部分ヨリ冷氣
ヲ當テテ為ニ不取敢五百余噸ヲ庫所ノ空地ニ取出サシム、時ニ
同年一月三十日ナリ、其後二月廿六日ニ至リ前述アルバニー号揚
ノ分ト密接貯藏ノアルトノワ一号揚ノ粉炭又發熱セシヲ發見、華
氏ノ寒暖計ヲ以テ其熱度ヲ量リシニ百度乃至百三十度ノ高度ニ達
シ、場所ニ由リ蒸烟ノ立ツモアリ又熱氣ノ為メニ近ク炭辺ニ進歩
スルコトモ出来ザル程ニテ既ニ焦焼シテ「コークス」ノ如キ姿トナ
リタルモノ不少、是又此儘ニ打捨テ置クベキニアラザレバ直チニ
倉所ニ命シテ熱氣熾ナル部分ヨリ順々空地ニ取出サシメタリ、此
時倉所外ニ移セシハ凡千三百九拾八噸ナリ、其後モ右両口倉所取
残ノ分熱氣去ラス、數回發熱セシヲ發見シ其時々若干ヲ倉所外ニ
取出シ、右二口ニテ都合三千四百拾五噸ヲ移換タリ、其置換人足
質タル實ニ臨時出費ニシテ又不得止ノ場合ニ出タルモノナリ、抑
發熱ノ原因タルヤ職トシテ左ノ二点ニ由ルモノ、如シ、当地天候
ノ變化ニテ即チ當時連天ノ陰雨ヨリ空中濕氣堆炭中ニ染込ミ偶晴
朗ノ天氣ニ會ヒ蒸熱氣ヲ醸シ其温度増加スルニ及ヒ發熱セシ其一
ナリ、又三池炭ニ限ラス日本石炭ハ塊少ク殊ニ粉炭ノ如キハ密着
シテ其積上ケタル炭ト炭トノ間ニ隙ナケレバ更ニ空氣ノ融通スル
コトナク(前年高島粉炭ヨリモ發熱起火セシコトアリト)、加之炭倉

ニ屋根アレバ却テ其堆炭中ニ醸生セシ蒸發熱ノ冷散スルコトヲ妨ケ
タル其二ナリ

右ノ如ク發熱焦焼セシ為メ炭質ヲ損セシコト不少、迺モ當時ノ市價
ヲ以テ之ヲ売捌クノ難キヲ見出シタリ、尤モ當時此發熱ノ事ハ世
上ニ秘シ窃ニ式弗式拾五仙ヨリ三弗迄ニテ支那炭商ニ之ヲ売約ス
ルニ至レリ、然レモ當時ノ市況ニ就テ見レバ此炭ニシテ此直ヲ得
タルハ蓋シ又不幸中ノ幸ト云フモ敢テ過言ニ非ラザルヲ信ズ

右ノ外ニ又一トツノ不幸ヲ加ヘシモノアリ、他ニ非ス發熱ノ為ニ
焦焼セシ石炭ニ量目ヲ減セシ一事ナリ、則チ初最太古洋行ヨリ引
継高ハ既ニ前段ニ於テ記セシ如ク三千九百貳拾五噸八合ナレモ、
之ヲ購買セシモノへ實際受渡セシ高ヲ算スレバ三千八百九十五噸
ナリ、差引殘三十噸八合ハ則チ發熱ノ為メニ燒失セシ量目ニシテ
又如何トモスベカラザル者ナリ

右ニ陳述スル所ノ者ハ則チ本社別口三池粉炭發熱ニ係ル記事ナ
リ、書シテ以テ實下ノ參考ニ供ス

明治廿二年一月初五

香港支店

(印文「ふくはら」)
福原榮太郎(印)

上海支店

上田安三郎様

(97) (香港三井物産会社支店郵便紙、日付・差出・宛書のみ墨書)

三池塊炭発熱并ニ欠量之報告

一 熊本丸第壹航廿一年一月廿六日揚高

三池塊炭千八百拾七噸七合

内 五百噸 船渡売却

差引残 千三百拾七噸 蔵入

但 九百拾七噸七 九竜炭倉ニ貯蔵

但 四百噸 灣仔炭倉ニ貯蔵

一 熊本丸第貳航廿一年二月九日揚高

三池塊炭千八百四拾壹噸

右同高 蔵入

但 八百五拾噸 九竜炭倉ニ貯蔵

但 九百九拾壹噸 灣仔炭倉ニ貯蔵

右二口九竜灣仔兩倉庫貯蔵ノ分共時価ヲ以テ順次売却シ来リシニ、廿一年七月廿一日ノ事ナリキ、九竜ナル倉庫会社炭倉ニ貯蔵ノ右二口ノ塊炭中發熱セシヲ発見セシニ、堆炭中諸々ニ蒸烟ヲ発シ起火ノ危険モアレバ其最モ熱氣熾ナル処ヨリ速ニ空地ニ運び出シ冷氣ニ当テ、傍其取残シノ堆炭ニ徐々空氣ヲ流通セシメタリ、然レモ尚其後モ右取除キ殘炭尚發熱氣全ク去ラスシテ熱氣ノ登ルヲ數回発見シタレバ其都度幾分宛ラ炭倉ヨリ取出シ起火之防禦ヲ為シタリ、即其移シ換タルハ熊本丸第壹航ノ口五百三拾四噸、同第貳航ノ口四百拾六噸五合、其臨時移換人足賃ハ既ニ売上勘定書中ヨリ取立タリ(勘定書第二百四十五号及第二百四十六号ニ就

キテ見ルベシ)

抑此發熱ノ原因タルヤ一ツハ当地天候ノ変化ニテ、即当地ハ二月三月ヨリ六七月頃ニ掛ケ例年最降雨多ク時々連天ノ陰雨ヨリ堆炭中ニ空中ノ濕氣ヲ染込ミ、偶晴朗ノ天氣ニ会シ蒸發熱ヲ醸シ其濕度ノ増加スルニ從ヒ發熱セシモノト思ワル、又二ツニハ三池炭ニ限ラス日本石炭ハ塊炭ト唱フルモ粉末甚タ多ク(現ニ日本石炭ニ限り炭倉中ニ積上ケタル幾數十ノ小籠ヲ要スル、則粉多キカ故ナリ)、其積上ケタル炭ト炭トノ間ニ隙ナク、為ニ空氣ノ融通ヲ妨ケ、加之当地ノ風トシテ炭倉ヘ凡テ立派ナル屋根ヲ以テシ、多クハ石塀ヲ以テ構ヘアレバ其堆炭中ニ蒸發熱ヲ醸生スルヲモアリ却テ自ラ其冷散スルヲ能ハザルノ姿ナリ、然レモ前陳ノ如ク同時ニ貯蔵セシ灣仔炭倉モ九竜炭倉ト其構造ニ至テハ格別異ナル処ヲナキヲ見ルモ独リ九竜ノミニ於テ發熱數回発見セシハ又不思議ノ出来事ト謂フベシ

偕右二口ノ石炭タルヤ在庫ノ時日既ニ六ヶ月ヲ越ヘ、就中其間發熱ノ不幸ニ罹リシ部分モアリテ其炭質ヲ傷損セシト不少サレバ、當時幸ニ他ニ數口ノ殘炭ト共ニ每噸四弗七拾五仙替ニテ窶ニ之ヲ支那商ニ売却セリ、時ニ廿一年七月廿八日ナリ
然ルニ爰ニ又一ツノ不幸ヲ重ねシモノアリ、他ニ非ス前述ノ如ク發熱ノ為ニ焦焼セシ石炭ハ怡モコトクノ形トナリ其量目ヲ減セシト不少、則右二口ノ石炭ヲ不殘各買手ニ引渡シ石炭全ク庫所ヲ出払ヒシハ漸ク廿一年十二月初旬ノ事ニテ、其結果ヲ挙グレバ左ノ如シ

一 九百拾七噸七合 熊本丸第壹航荷ノ内九竜
貯蔵ノ高前陳ノ通り

内八百〇壹噸 實際受渡高

差引残百拾六噸七合 不足

一 八百五拾噸 熊本丸第二航荷ノ内九竜
貯蔵ノ高前陳ノ通り

内七百八拾貳噸五合 實際受渡高

差引残六拾七噸五合 不足

右不足ト記載セルモノハ則發熱ノ為メニ消失セシ量目ニシテ勘定
書調製ノ当時ハ唯売約ニ止リ、未タ全ク石炭ノ受渡ヲ済サザリシ
カバ實際此欠量ヲ知ルニ由シナク、悉皆該炭々倉ヲ出払ヒテ後初
メテ如此結果ヲ見ルニ至レリ、実ニ意外ノ損失ト云フベシ
右發熱ノ事ハ其当時書信ヲ以テ其都度報告ニモ及置タルコトナレ
ル、尚記シテ以テ貴下ノ参考ノ一助ニ供ス

明治廿二年一月初五

香港支店 (印文「ふくはら」)

福原栄太郎 (印)

上海支店

上田安三郎様

(欄外受付印) 「MITSUI BUSSAN KAISHA, SHANG-
HAI, 13 JAN. 89」 「上田」

内帖 廿二年二月十一日

上海

上田安三郎殿

東京
本社

元方

本日ハ憲法発布之末曾有之大典ヲ被奉、万民奉祝之為メ市中湧カ
如シ、実況ハ新聞紙ニ譲ル

一 線綿ハ横浜より風雨之為メ回船遅ク相成、夫カ為メ段々延引いた
し候、一昨日大勢へ差示し候処、成程能ク製練いたし有之候へ
共、実綿ノ時売手カ量目ヲ持タセル為メ、水氣ヲ為含置キタルニ
相違無之、手練之分とスルと幾分カ湿氣を含居申候、是ヲ乾燥ス
ル時ハ何分カ欠量いたし候間夫丈ケ価格を見込マねハナラス、此
件ハ余程御注意有之度ものニ候

尤今日之儘ニ而も百斤之上ニ於而御地の二牌と申綿よりハ一円二
三十錢も上直ニ売却可相成よし、茲又寧波辺ニ而練りしもの欵器
械線と云ふもの有之、是ハ一円四十錢も御遣し之ものよりハ安
く、然し中々能く出来いたし居候、就而懸りよりも申進候ニ候へ
共三分ノ一程ハ手入りをいたし置、夫より器械へ懸ケレハ尚一層
上物ニ仕揚り可申と申もの有之候、此ニ委敷御申越しを受ケ度ハ
清國人ハ手ニ而練り候事故老婆之手間賃なし之仕事と実綿ヲ買入
器械ニ懸ケ一円二十錢位の上直にし而ハ到底線綿ニ而買入候方
余程安く相揚候と申計算ニは相成不申哉、損益算概略御見込之
処も御示し被下度、先年相立タル予算とは如何、實際ニ至り相違
有之候哉承り度事ニ候、又安直之時ニ実綿ヲ買入置不申而は難相
成、其資金之利足も見込申度候、且ツ一ヶ月何程ハ線綿製造相成

可申欵、早々是等之概略御申越被下度候

一 水庄器ハ早々御試シ被下度、是ニ而運賃ヲ減スルノ利益ヲも見
度

一株ハ如何様之事ニ相成候哉、是又實際の有様御申越被下度、道台
ハ其後苦情如何ニ候哉

一 東京紡績会社ニ而ハ評判も宜く、既ニ注文も有之候、尚諸処へ売
方も試可申候へ共、器械ニ而繰りしもの清国内地の需用ニ於而も
売レロ宜シと申事ニ無之候而ハ不相成、紡績器械の老婆之仕事ヲ
奪ヒ去リシ様ニは参リ不申候哉

一 石炭も不相變荷數少く御困却御察申候
口ノ津へは一ヶ月四日より二月二日迄

塊炭 一万四千七百九十四噸
粉炭 六千七百三十八噸

長崎へハ
塊炭 千四百四十六噸
粉炭 七百五十八噸

之送り出しニ相成居申候、長崎へ余分ニ送り方敵數三池へ申送り
置候

外国船使用之事ハ昨日外務省よりハ内閣へ差出し相成候、不遠内
ニ許可ニ相成可申欵、大藏省の方ハ既ニ相濟候事ニ御座候

三池ハ昨今ハ千式百噸以上ニ而上都合ニ候へ共、永統如何、本年
ハ四十万噸如何哉と夫而已大心痛ニ御座候

頻りと囚徒増員等計画いたし居候

一 敷木之事ハ其後何なる報も無之事と存候、青森之櫃ハ大倉組ニ而
者万本所持いたし居候間、御手紙ニ有之候者万三千本口ハ是非引
受ケ度と申参り候へ共、運賃之高キ一円拾式幾位ニ売却不致而ハ
利益ニは相成不申、然し精々如何とも相働キ可申候間、尚彼の実
状々々木をし而充分ニ為御探可被下候

一 天津の方ハ御考へ如何、銅之事共片付候ハ、少數手を引ク之手
段ニ無之而ハ中々維持被致兼不申候哉、銅ハ川明ケニ相成候ハ、
九十六位の半製ニ而、廿三円位ナレハ是非幾分カ上納不致而は難
叶と存候、尚可然良考置被下度、伍氏も死去せしよし々々木も困
り可申候

一 セメントは追々日本ニ而沢山製出いたし候、是非天津之鉄道用ニ
売込申度、篤とキントル氏へも御依頼被下度候

一 三池の石炭売揚金ハ、残炭之精算相濟次第第鉱山局へ対セル分ハ上
納し、残りハ例之殘炭ニ当、三池へ払入度、而し而一月ニ入り而
送り出せる石炭代ハ、二月廿日頃ニは是非少々ツ、なりとも払入
度候間、其御積リニ而精々勘定と送り金と御配慮可被下候

一 東洋銀行之当座預ケ金勘定過振リ之分ハ、三池石炭運賃諸雜費
立換之為メニ限り相用候事ニ而、決し而余之仕事ニは任用不致と
申事ニ申入置候間、御手紙度毎ニ周報とし而東洋銀行当座過振金
高及三池炭運賃其外立換概略之金額御申越可被下、三井銀行へ
報知いたす筈ニ御座候

一 該行ニ而ハ外国人ニ対し保証スルコトハ呉々好ミ不申、色々苦情有
之抵当品差出し申ス様相談も有之候へ共、全ク三池之為メニ仕用

スル為ナレハ即チ前文之通り報道スルコトニいたし申候

一東京計算支配人ニ人を欠キ困リ居候、藤瀬ハ呼戻し候事も今日ニ
而は出来いたし候、就而は藤瀬ヲ御地へ差回し、福井菊三郎を東
京会計支配人ニ命し候事ニ付御地の都合如何、御良考御示し被下
度候

右之段申進度、孝ハ十五六日頃出立いたし度存居候、早々以上

(欄外受付印) 「MITSUI BUSSAN KAISHA, SHANG-
HAI, 18FEB. 89」

[99]

廿二年四月初八

(三井物産会社野紙、墨書)

安三郎様

孝

長崎及上海より両度之御文通正ニ落手拝見致候、此度ハ始終甚不
敬而已相働キ申訳も無之候

段々御容子ニ付而ハ心痛、其後も如何あらん欵と頗ル頭を悩まし
候処、大ニ元氣旧ニ復し大ニ雲霧相晴れ候由、御発帆之御容子ハ
金子ガも電信いたし呉大ニ安心いたし候次第、尚御細報を得而大
悦いたし候、呉ミ身体之壯健ナラサルは何寄神経を悩し候間、何
と欵御勉メ御撰生被下度、御模様次第何時も用事之間を見合ハセ
旅行可被成、旅行程良薬ハ無之候

而し而此夏氣ハ函根日光等ニ日を御消し可然と存候、御留守中福
原御呼寄相成候ハ、岩下清周香港へ差出置候而も宜く候、如何様

とも人繰回は可致候、小生も帰米足へ腫物ヲ出し、三四日引込居
候、昨今出勤いたし居候

追々線綿之方も都合宜キ由、大幸々々、無滞委員之集会も為御済
被成候由、電燈之見積も御入用之趣是非当方引受之電燈試申度、
早速豫算差送り可申候

油搾り器械渡辺より、予算書図面等差出候よし、尚小生も一見い
たし候ニ今日之綿種ニ而は式拾八万八千斤程よりハ無之候間、い
つれ他よりも買入使用可致事ニ候へ共、愚存ニ抛レハ三池ニ於而
ハ非常ニ水油を相用候事故、三池ニ搾り器械相建薬種を第一と
し、而而綿種ハ御地より買積シ而製造候ハ、需用者を控へ居候間
必定利益ニ可相成、何も運賃ハ無運賃同様ニ可參、尤も油之直段
御地之方宜く候へ、致方無之、御地之需用ハ必定食用ニ可有之、
去スレハ高直ニ可有之欵、綿種油価格為御知被下度候

一日本内紡績業之盛なる、至ル処大利益ニ御座候故尚諸処之紡績所
皆増株之企有之候、彼是綿ハ皆貴地を仰キ可申ニ付一体ハ速カニ
拾台も増器械いたし、此三四年ニ而シツカリ利益を出し度事ニ御
座候

尔来御地より日本へ綿之輸入ハ非常ニ増加可致候、名古屋、大阪
至ル処綿出来如何を承り、先方ニも太体ハ承知いたし居懇望いた
し居候

印度綿ハ少し輸入可致候へ共、支那綿程キレイニ無之候間到底日
本人ニは適当致間敷と存候、増器械之事ハ要用と存候
右之義申進度、御返事旁早々頓首

尚々長崎御妹様ニは不容易御厄介ニ相成候間、宜く御礼被下度候、我儘而已相働申候

〔100〕 (三井物産会社野紙、墨書)

内帖 廿二年七月一日

上田安三郎殿

東京

益田 孝

三池囚徒ニは又々困難之事共ニ御座候、何分折合愚敷七浦ハ數日休業、尚當時開業ノ見込無之ニは殆と当惑仕候、内務省ニ而も臨機ノ処分可致旨被達候へは不遠内ニは何と欵片付可申候へ共、実ニ人間ニは困り切り申候

一丁銅三万五千斤天津へ差回し候事へ委細承知、精々早急取斗可致候

一御地より統々可送石炭代ハ多少可有之ニ付、後之積送りノ時荷為替ハ可相成御避ケ被成度、余程損失ニ可有之候

本月ニ入り而は尚数万円送り金被下候事と侍居候、銀行の方ニも余程昨今ハ融通困難之模様故、精々払入申度早々送り金御頼み申候

福原御呼寄御留守中代理之事可然、福井菊三郎ハ病氣如何、其便宜ニ抛り同人東京へ御遣し之事ニは不相成候哉、尤田中寿雄氏一人ニ而は暫時ニ而も貴処御病氣之時杯ニは困入可申候、強而ハ申進兼候、誰カ福井之跡ヲ取ル人は無之欵、随分困りものニ御座候一今便郵船会社之支配人とし而タルホツト氏御地へ在勤ニ被參候、

御面会精々懇意御結可被成候

一丁銅ハ今日之処先ツ神戸渡し十六円五十幾位より以下ニ而は少數困入申候、其故ハ大分右様之直段ニ而相応ニ売却も可被成様最支那人買入候事ニ御座候、倫敦少數騰貴ノ電信有之候間右様申入候へ共、又々倫敦も高からんよし随分大數ナレハ十六円位ニは何と欵折合可申欵、当会社ニ払下之義何分許可六ヶ數困り居候

一青森櫛ハ可也利益ノ計算ニ相成候よし、何等ニ相用候事欵御都合次第精々当方ハ心配可為致候、他行中番状御返事相認不申、心付之廉々此ニ申出置候、早々頓首

〔附一〕 (上田安三郎筆、コビーの上を墨筆でなぞる)

明治十六年三池石炭売捌約定見込書

一來明治十六年ノ三池石炭売捌高ヲ起見スルニ、先ツ去ル十年ノ頃此石炭ノ販売ニ着手セシ以来今日ニ至ル五ヶ年間ニ於テ、年々ニ輸入ノ高ヲ増加シ需用者ノ望ミニ適ヒ漸次盛大ヲ来セシ實際ノ經驗ト況状ヲ以テスルニ、塊炭七万噸、粉炭五万噸ヲ売却スルハ難カラザル可シト信シ候、本年約定高ノ如キハ三池ニ於テ産出ノ高ト内地需用向ニ売却ノ高等ヲ酌量アリテ当上海ニ販売ス可キ惣高ハ塊炭七万噸ニ粉炭式万五千噸ヲ限りテ許可セラレ、則チ其高ヲ限リトシ売却ノ約定ヲ取結ビシモノナレバ、粉炭ノ如キハ許可ノ高或ヒハ其余ニ及ブトモ前年結約セシ際ニハ容易ニ売捌キ得タランモノヲト存ジラレ候、又本年ノ景況ヲ以テ看レハ三池ニ於テ

ハ粉炭ノ産出ハ増加シ内地ノ需用ハ減消ヲ現ワセルヲ以テ来年当地ニ五万噸ヲ売却スルモ、其供給ニ苦シムト万々有ルマジク、幸ヒニシテ当地ニ於テハ近年汽船ノ進出著シク増殖ヲ現シ、從テ石炭ノ輸入年々式三萬噸ノ増加スルヲ見ルニ當リテ、我カ三池石炭塊粉共二年々市場ノ声価ヲ増シテ今日ニ低サマルヲ以テ、來ル十六年分ノ約定高ニ本年分ヨリ式万五千噸内外ノ増加ヲ看ルハ難カラザル可ク、又此ノ増額ハ唱價ノ下廉ナル処ヲ以テ考フルニ、塊炭ヨリハ必ラス粉炭ニ有ル可シト信ジ、本年ノ約定高ニ粉炭式万五千噸ヲ加へ、塊炭七萬噸、粉炭五萬噸ノ見積リ相立テ候也、扱テ約定ス可キ直段ハ仮ニ之ヲ三等ニ立テ、則チ塊炭上海銀四兩五匁、粉炭同三兩五匁(當時即チ昨年約定セシ本年分ノ直段)ヲ最上直トシ、次ニ塊炭四兩三匁五分、粉炭三兩四匁中直トシ、塊炭四兩式匁五分、粉炭三兩三匁最下ノ安直ト仮定シ之ヲ規票トノ第一ニ右ノ最上直ニ売却センコトヲ謀リ後ニ市況止ムヲ得サル勢ヒニ至ラハ仮定セシ最下ノ直段ニテモ必ラス売却ノ約定ヲ為ストト意ヲ決シテ此ノ売却方ニ従事セバ、万々失敗無カル可シト存シ候、元ヨリ直段ニ因テ売却ク可キ高ニ關係ヲ生スルハ自然ノ理ニシテ前述ノ塊粉炭ヲ合シテ拾式萬噸ノ高ヲ販売スルニハ右ノ直段ヲ規票トス可ク、此上ヲ得ント仰望スルニ至ラハ拾式萬噸トノ數字ヲ并ブル巨額ヲ売却定スルハ恐ラク難事ト存ジ候、高島炭坑主ニ於テモ既ニ充分ノ計画アリテ、來ル十六年分ハ必ラス安直ヲ以テモ約定ヲ取結ヘント想像スレハ、当方ニ於テハ唯々僅カノ高直売リヲ望ミテ却テ從前ノ得意先ヲ失フ如キ失策無キ様ニ注意最モ

肝要ト存シ候、高島炭売却方ノ挙動ハ常ニ注目シテ怠ラサルニ彼モ類リニ声価ヲ保ツテ低サマル様ニ苦慮スルヲ看ルハ實際安直ニ売却シナガラモ之ヲ市場ニ現スル懼レ、相場状等ニハ藏渡シノ直段(船渡トハ現ニ一噸三匁ヨリ三匁五分ノ差アリ)ヲ掲載セシメ、或ヒハ今日ノ安直ヲ秘シテ「ブライベイト、トルム」ノ語ヲ用ヒ前日ノ上直ニ売却セシ相場ヲ其儘ニ保チ配布セシムル等ノ事アルモ、現ニ數千噸ヲ輸入シテ絶ヘス市場ニ充テ、長崎并ニ香港等ニテハ現在安直ニ売却シ、未売荷ノ陸上ケ貯藏セルモノハ長崎港内ニ山形ヲ為スト聞キ、当地ニ於テモ六十噸以上ノ貯藏荷アリテ目下ノ上直売寛束ナキハ論ヲ待タズ、來年ノ約定ニ至リテハ其苦慮我カ三池ニ於ケル比ニ非ズト察セラレ候、別テ昨年々暮ノ時機ヲ悞マリシモノ欤前々年約定ノ殘荷ヲ輸入セシ外ハ本年分ニ約定アリシヲ聞カズ、着スル処ノ荷物ハ悉ク之ヲ市場ニ向ケテ買入ヲ求め、或ヒハ陸上ゲシテ清國人ノ小売商等ニ分売セリ、其ノ未タ売却スルヲ得ズシテ貯藏セルモノ、如キハ実ニ其損失莫大ナルベク、察スレバ本年ニ約定無キヲ悔ミ來年分ハ必ラズ約定売ヲ悞ラザル可ク、而シテ止ヲ得サル場合ニ至ラバ非常ノ安直ニテモ結約セント務ムルハ必定ト存シ候、此程私カニ伝聞スルニ高島塊炭四兩五匁、粉炭三兩五匁、則チ當時三池ノ約定直ト同價ヲ以テナレハ今日ニモ其高ヲ問ワズ約定取結ヒ度キ旨ヲ長崎ヨリ当地怡和洋行(即チ彼ノジャーデン・マツソン・アンド・コンパニー)江直接ノ照會アリタルトノ事、尤モ此ノ議ハ極々内密ノ事ニテ前坑主ノ頃ニ數年其売却ヲモ托セシ程ノ因縁モアル事ナレハ、全ク高島坑主ト

怡和洋行限リトシ他ノ得意先ニ対シテハ仮令前記ノ直段ヲ以テ約定スルノ底意ヲ以テスルモ、最初高直ヲ主張スルヤ明カナリ、今日高島ニテ申シ出ス直段ヲ察セントセバ、塊炭ニ四兩八匁、粉炭ニ三兩八匁ヨリ下ラザル可シ、又目下市場ニ於テ該炭ノ今日ニモ來着ス可シト言フ荷物ニ買人アリテ売買ス可キ公平ノ直段ヲ仮立セハ、塊炭ニ四兩六匁、粉炭ニ三兩六匁ヲ附スルヲ至當ト言ツ可ク、尤モ千噸以上ノ積荷統々入港スルノ状態ニ至ラハ吉噸ノ代価ニテ式匁、三匁ノ低落ヲ看ルハ一週日ニアル可ク、終ニ自カラ陸揚ケ貯藏シテ費用ヲ投シ、余義ナクモ空然トモ他日ノ買人ヲ待ツニ至ルヤ必セリ、是レ實ニ約定ナキ荷物ニシテ不景氣ノ市場ニ不時ノ荷嵩ミヲ為シ、倍々相場ヲ低落セシムルノ大害ナリ、香港モ亦タ石炭市場ノ景狀ハ實ニ悲歎ニ堪タリ、現ニ高島炭ハ塊ヲ洋六弗ニ、粉ヲ洋五弗ニ売捌キ、斯ノ如キノ直ヲ以テスラ未タ其売却モ思ワシカラズシテ、望ミアラハ或ヒハ尚ホ此上ノ安直ニテモ送附セント言ヒ込ミアリシ先モ有ル由ナリ、右ノ直段ハ元ヨリ香港通用ノ墨銀ニシテ、加ルニ該港ニテハ輸入税ヲ課セザレバ、之ヲ上海売直ニ改算スレハ、自長崎至香港ト自長崎至上海トノ運賃銀ヲ同価ト見ルモ、塊炭ハ上海銀四兩三匁、粉炭ハ三兩六匁ノ上ニ出テズ、况ンヤ香港ト上海トハ運賃ニ常ニ洋式十五仙ヨリ五十仙以上ニモ及フ差アリテモ船主ハ該港ニ至ルヲ快バス、香港モ斯ル実况ナレバ前ニ述フルル如ノ高島ヨリ怡和洋行ニ申シ込ミテ約定セント望ム塊炭ニ四兩五匁、粉炭三兩五匁ノ決意ハ實ト見做スニ至リ、且ツ該炭ノ売却ニ従事スル人ノ至極尤ナル決意ニシテ、怡

和洋行ト差向キ結約ヲ望ムノ策モ亦實ニ得タリト信シ候、此ノ高島ノ直段ニ比較スルハ弥々三池ヲ約定スルニ當リテ塊ニ四兩五匁、粉ニ三兩五匁ヲ得ルニ至ラハ誠ニ此ノ上モ無キ三池ノ幸福ニシテ、上海市場ニテハ三池炭ハ其實ノ当地需用者ノ意ニ適スルヲ遙カニ高島炭ノ上ニ出ヅルヲ証スルニ至リ、又本年分ニ得シ昨年ノ約定直ハ已ニ此炭ニ至當ノ直段ヲ得タルモノニアリシヲ信シ申候、併シ高島ニテ至當ノ直ノ上ヲ望マズ売り方ノ策ヲ悞ラザル以上ハ、來年三池ノ約定ニ塊四兩五匁、粉三兩五匁ノ直段ヲ得ルハ一時ノ僥倖ニ非ルヨリハ難事ト存シ候、依テ此処ニ望ミテハ當方ヨリ先鞭ヲ附シ、文首ニ述ル三等ノ比較直ヲ以テ臨機其何レカラ採リ一步モ先キニ結約スルヲ最良ノ策ト思考致シ候

先ツ小生ノ愚意前述ノ通ニ有之、尤モ當時三菱炭坑員ノ動作ニ注目致居リ候間、尚ホ此ノ後ノ景狀ト因テ起ル如ノ見込ミモ申シ出ツ可ク候ヘドモ、斯ノ如キ大切ノ場合ニ候間何時売却約定ヲナス為ノ好機相起リ候哉モ難斗候際、一々電信ニ其事ヲ訴ヘ或ヒハ其筋ノ許可延滞スル等ノ事ヨリ不都合ヲ生シ候テハ三池ニ對シテモ不相濟候義は勿論、又得ラル可キ丈ケ最上直売ヲ謀ルハ会社ノ兼テ苦慮スル如ニテ、当店ノ粉骨細身シテ務ム可キ務メナル義ニ候上ハ、前文ノ比較中ナル最安直ヲ以テ安直売ノ制限トシ、塊粉共計十二萬噸ノ高ヲ限リ売捌約定取結フノ許可有之度存候、右尚御賢察被下候上飯山御局江上申被下度存候也

明治十五年七月

上海支店支配人

上田安三郎

三井物産会社々長

益田 孝殿

同 長崎支店支配人

金子 弥一殿

〔附2〕

(表紙)

「明治十八年中

三池石炭売捌高明細書」

(上海三井物産会社支店野紙、墨書)

上海明治十八年一月ヨリ五月三十一日ニ至ル

三池石炭輸入并売捌高明細書

一塊炭六千七百七拾貳噸五合

一同 貳万六千八百〇八噸

合 三万貳千九百八十壹噸也

内 (但太古旗昌怡和約定渡方三月ヲ始ム)

貳千七百八十六噸

七千六百五十三噸

六千六百八十四噸五合

六百七十八噸貳合五夕

壹千三百三十七噸

貳百七十五噸

壹千貳百八十七噸五合

五千六百四十壹噸五合

貳千三百三十壹噸

外ニ 貳万八千六百七拾貳噸七合五夕

外ニ 貳噸貳合五夕

合貳万八千六百七十五噸也

差引

四千三百〇六噸

残荷貯藏高

本年六月一日ヨリ同三十日迄ニ可引渡高

壹千貳百十四噸

三百四十八噸

四千三百十五噸

三百五十噸

外ニ 六千貳百貳十七噸

合計 貳万八千六百七拾五噸

外ニ

三万四千九百〇貳噸

外ニ

粉炭壹千貳百五十七噸五合

内 五百〇五噸

差引

粉炭七百五拾貳噸五合

ポイド商会十八年約定口渡

青煙筒船売捌高

諸向小売口売捌高

総売捌高

舁下欠量

本年上半季可渡高

一月ヨリ

五月迄

着荷高

一月ヨリ

五月迄小口売捌高

着荷高

残荷貯藏高

残荷貯藏高

残荷貯藏高

残荷貯藏高

残荷貯藏高

残荷貯藏高

残荷貯藏高

残荷貯藏高

残荷貯藏高

残荷貯藏高

残荷貯藏高

三井物産会社上海支店「内状」(田中)

但シ右ハ七月中受渡ノ売約定済

通計

塊炭三万四千九百〇式噸

粉炭壹千貳百五十七噸五合

右本年上半季中上海売渡高ニ当ル

外ニ他港売ノ分(本年上半季中)

塊炭七百七拾五噸 汕頭スシヤール商会渡

同 六百八十噸 芝罘道台売渡(此分ハ昨年中送荷セシモノ)

メ壹千四百五十五噸

本年七月一日ヨリ十二月三十一日迄ニ可引渡高

塊炭六千噸 太古洋行約定荷

同 壹万貳千噸 怡和洋行 同断

同 壹万貳千噸 旗昌洋行 同断

同 貳千壹百噸 マクベイン同断

同 壹千貳百六十噸 瓦斯会社 同断

同 七百拾貳噸五合 ボイド商会同断

メ三万四千〇七十式噸五合

外ニ

同 五千噸 青煙筒汽船売渡見込

同 貳千噸 諸向小売口売渡見込

メ 七千噸

又

粉炭貳千四百噸

通計

塊炭四万壹千〇七拾貳噸五合

粉炭貳千四百噸

右本年下半季中上海売渡高ノ見込

本年七月一日ヨリ十二月三十一日迄

他港渡約定口并売捌見込

塊炭壹千五百噸

同 貳千三百噸

同 壹千壹百噸

メ 四千九百噸也

外ニ

塊炭壹千噸

同 五百噸

同 五百噸

同 五百噸

同 壹千噸

同 貳千噸

メ 五千五百噸

二口合

塊炭壹万〇四百噸也

諸向小口売毎月四百噸見込

汕頭スシヤール商会約定

同 太古洋行 約定

同 怡和洋行 約定

売渡約定済

汕頭ブラドレー商会売見込

厦門江試売トノ送付見込

福州江同断

寧波江同断

天津売見込

芝罘売見込

外二

粉炭貳千噸也

汕頭其外注文口引當

則

塊炭三万四千九百〇貳噸 上半季中

粉炭壹千貳百五十七噸半 上海渡分

塊粉合三万六千六百五十九噸半

塊炭四万千〇七拾貳噸半 下半季中

粉炭貳千四百噸 上海渡分

塊粉合四万三千四百七拾貳噸半

塊炭壹千四百五十五噸 上半季中

粉炭 他港渡分

塊粉合壹千四百五十五噸

塊炭壹万〇四百噸 下半季中

粉炭貳千噸 他港渡分

塊粉壹万貳千四百噸也

總計

塊炭八万七千八百貳拾九噸半

粉炭五千六百五十七噸半

合九万參千四百八十七噸也

(朱書)

外二拾万八百四十四噸三合五夕 香港分

合計拾九万四千三百三十噸三合五夕

内 塊粉四万八千貳百〇六噸貳合五夕
粉四万六千貳拾五噸壹合〇夕

明治十八年六月

上海港各種石炭輸入高調

十八年一月ヨリ五月迄五ヶ月間分

英産三千六百三十七噸

濠産壹万貳千五百九十六噸

小メ壹万六千貳百三十三噸

三池塊貳万八千〇〇八噸半

同 粉壹千貳百五十七噸半

高嶋塊三千八百拾六噸

同 粉壹万六千四百八十噸

雜種 三万三千七百八十九噸

小メ八万三千三百五十噸

惣計九万九千五百八十四噸也

日本産

外国産

人名注

アルウィン(ロバート・ウォルカー・アルウィン) 三井物

産会社顧問

青木道孝 内状〔91〕

池田広次 内状〔41、56、90、91、92、93、〕

伊志田直二郎 内状〔2〕

石本鑽太郎 内状〔56、90〕

岩原謙三 倫敦支店詰、のち理事、常務取締役等

上田長次郎 内状〔89〕

牛島鉄弥 内状〔56、90〕

江南哲夫 上海旧店員カ

遠藤々次郎 内状〔41、56、90、91、92、93、95〕

大井幾太郎 内状〔2〕

大野市太郎 内状〔3、6、14、29、30、41、56、90、91、92、93〕

岡田玄良 内状〔3、14、30、41、56、90、91、92、93、95〕

金子弥一 長崎支店支配人、のち元締役、専務委員

木村正幹 副社長

小林殿(秀知) 三池鉱山局長

小柳七四郎 内状〔56、89、90〕

小林雄志 内状〔41、56、90、91、92、93〕

小室三吉 内状〔3、6、14、29、30、41、56、90、91、92、93、95〕

のち理事、取締役、監査役

吳永寿 内状〔56、90、91、92〕

佐々木祐司 内状〔41、56、90、91〕

笹瀬元明 倫敦支店支配人、はじめ上海支店設立当時の副主

任者(第一銀行側より派出)

沢松好之 口ノ津出張所

島田衆太郎 内状〔89〕

副島義太郎 内状〔2、3、6、29、30、41、56、90、91、92、93、95〕

高木鉄太郎 内状〔3、14、30、41、56、90、91、92、93〕

高田為助 内状〔89〕

高橋清吾 函館支店詰

高柳豊三郎 内状〔41、56、90、91、92、93、95〕

田中孝輔 内状〔56、90〕

田中寿雄 内状〔3、6、14、29、30、41、56、90、91、92、93〕

田辺次郎一 倫敦支店支配人

檀勝三郎 内状〔91〕

寺島昇 本店紙方

拝司永造 大阪支店支配人、元締役

長谷部信義 内状〔2、3、6、14、29、30、41、56、90、91、92、93〕

服部種次郎 三池出張店詰

林昌雄 内状〔41、56、90、91、92、93〕

福井菊三郎 内状〔3、6、14、29、30、41、56、90、91、92、93〕のち取締役

福原栄太郎 内状〔2、3、6、14、29、30、41、56、90、91、92、93〕のち小野田セメント社長

藤瀬政次郎 内状〔41、56、90〕のち取締役

馬越恭平 横浜支店支配人、元締役、理事

益田克徳 益田孝弟、東京海上保険会社支配人、東京米穀取引所理事長など

益田英作 内状〔3、14、29、30、41、56、90〕益田孝弟、のち三越取締役

松岡謙 函館支店支配人

松延弦 芝罘総領事

松本常磐 勘定方支配人

宮本新右衛門 米方支配人、元締役

桃井可雄 内状〔2〕

山本条太郎 内状〔91、92、93〕のち理事、取締役 満鉄総裁

渡辺専次郎 倫敦支店支配人、のち理事、取締役